

ISSN 2433-8397

同志社女子大学

教職課程年報

第 7 号

同志社女子大学 教職課程センター

2023

目 次

巻頭言

第7号発刊によせて

(教務部長・教職課程センター長) 真 部 真里子 1

第1部 教職課程センター主催の講演会、研究会、説明会等の活動報告

1. 教職課程センター特別講演会	5
〈参加者の感想〉	
(学芸学部音楽学科演奏専攻2年次)	6
(現代社会学部現代こども学科3年次)	6
2. 人権・同和教育及び性教育講演会	7
3. 介護等体験オリエンテーション及び介護等体験	8
I. 視覚障害児の教育課程及び指導法レポート	
(学芸学部音楽学科演奏専攻3年次)	9
(学芸学部音楽学科音楽文化専攻3年次)	10
(現代社会学部現代こども学科3年次)	10
(表象文化学部日本語日本文学科3年次)	11
(生活科学部人間生活学科3年次)	12
II. 聴覚障害児の教育課程及び指導法レポート	
(学芸学部音楽学科演奏専攻3年次)	14
(学芸学部音楽学科演奏専攻3年次)	15
(学芸学部音楽学科音楽文化専攻3年次)	15
(現代社会学部現代こども学科3年次)	16
(現代社会学部現代こども学科3年次)	17
(大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程(前期))	18
4. 教職課程センター特別研究会(夏期)	
〈参加者の感想〉	
(現代社会学部社会システム学科3年次)	20
(看護学部看護学科3年次)	20
(看護学部看護学科1年次)	21
(表象文化学部日本語日本文学科4年次)	21

5. 教職課程センター特別研究会（春期）

〈参加者の感想〉

（学芸学部音楽学科演奏専攻 3 年次）	22
（学芸学部音楽学科演奏専攻 2 年次）	22
（学芸学部メディア創造学科 2 年次）	23
（現代社会学部社会システム学科 3 年次）	23
（現代社会学部現代こども学科 3 年次）	23
（現代社会学部現代こども学科 2 年次）	24
（表象文化学部英語英文学科 2 年次）	24
（表象文化学部日本語日本文学科 3 年次）	24
（大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期））	24

6. 教職課程オリエンテーション

〈参加者の感想〉

（学芸学部メディア創造学科 1 年次）	26
（表象文化学部英語英文学科 1 年次）	26
（表象文化学部日本語日本文学科 1 年次）	26
（生活科学部人間生活学科 1 年次）	27
（生活科学部食物栄養科学科食物科学専攻 1 年次）	27

7. 教職課程説明会

〈参加者の感想〉

（現代社会学部社会システム学科 1 年次）	28
（現代社会学部社会システム学科 1 年次）	28
（看護学部看護学科 1 年次）	28
（表象文化学部日本語日本文学科 1 年次）	29
（表象文化学部日本語日本文学科 1 年次）	29
（生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 1 年次）	29
（生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 1 年次）	29
（生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 1 年次）	29

8. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 2024 年度入試特別推薦説明会

30

第 2 部 各学科教職担当者よりの特別寄稿

特別支援教育を学ぶ意義

（現代社会学部現代こども学科准教授） 勝 浦 眞 仁	33
----------------------------	----

教職をめざす皆さんへ

（生活科学部人間生活学科教授） 藤 本 純 子	34
-------------------------	----

第3部 教職に関する研究報告、実践報告、論説、書評など

授業における学び／読書

(教職課程センター特別任用教授) 佐藤 光 友 39

第4部 在学生、卒業生からの寄稿

1. 教育実習・保育実習を終えて

教育実習を終えて

(学芸学部音楽学科音楽文化専攻4年次) 43

教育実習を終えて

(現代社会学部現代こども学科3年次) 43

教師の働きと児童

(現代社会学部現代こども学科3年次) 44

教育実習を終えて

(現代社会学部現代こども学科3年次) 45

幼稚園実習を振り返って

(現代社会学部現代こども学科3年次) 45

かけがえのない4週間

(現代社会学部現代こども学科3年次) 46

“やりがい”に触れた一カ月

(現代社会学部現代こども学科3年次) 46

実習後記

(現代社会学部現代こども学科3年次) 47

教育実習を終えて

(現代社会学部現代こども学科3年次) 48

初等教育実習を振り返って

(現代社会学部現代こども学科3年次) 48

教育実習について

(現代社会学部現代こども学科3年次) 49

幼稚園実習での学び

(現代社会学部現代こども学科3年次) 50

4週間の実習で私が意識したこと

(現代社会学部現代こども学科3年次) 50

教師をめざすきっかけ－教育実習を経て－

(現代社会学部現代こども学科3年次) 51

実習を振り返って

(現代社会学部現代こども学科3年次) 52

『乳児院実習』

(現代社会学部現代こども学科3年次) 52

「温」	(現代社会学部現代こども学科 3 年次)	53
私の夢	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	54
別の道で頑張るという選択	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	54
教職課程の軌跡	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	55
達成感と貴重な一瞬	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	56
感謝	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	56
4 年間の教職課程を終えて	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	57
教職課程を選んで	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	58
時間にかえられない大きな学び	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	59
教職課程を修了して	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	60
教育実習、教職課程を終え感じていること	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	60
一生の財産	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	61
教職課程を履修して	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	62
教育実習という経験を終えて	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	63
生徒達の笑顔と声で頑張れる	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	63
教職で得たもの	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	64
確かな成長	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	65
教育実習・教職課程を終えて	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	65
夢を見つけた 3 週間	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	66
教職課程のサングラス	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	67

教職課程を振り返って	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	68
教師を支える生徒の存在	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	68
4 年間教職課程を履修して感じたこと	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	69
教育実習を終えて	(生活科学部人間生活学科 4 年次)	70
教育実習から広がる挑戦と発見	(大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程 (前期))	70
教職課程を終えて	(科目等履修生)	71
教育実習は、教職課程のご褒美だ	(科目等履修生)	72
2. 教員採用試験合格体験記		
合格体験記	(学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次)	74
悔いのない大学生活を！	(学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次)	75
教員採用試験を終えて	(学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次)	75
これまでの自分を信じて	(学芸学部メディア創造学科 2021 年度卒業／京都教育大学大学院連合教職実践研究科 2 年次)	76
11 年間の夢	(現代社会学部現代こども学科 4 年次)	77
自己分析について	(現代社会学部現代こども学科 4 年次)	78
二兎を追わない者は一兎をも得ず	(現代社会学部現代こども学科 4 年次)	78
教員採用試験合格までの道のり	(表象文化学部英語英文学科 4 年次)	80
私の教採合格までの道のり	(表象文化学部日本語日本文学科 4 年次)	80
自信を持つこと	(表象文化学部日本語日本文学科 4 年次)	81
チャンスを掴む	(生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 4 年次)	82

第 5 部 教職課程情報公開資料（各種統計データ・参考資料）

「同志社女子大学教職課程年報」要項

「同志社女子大学教職課程年報」投稿の手引き

「教職課程年報」編集委員会委員

編集後記

WEB 公開のご案内

第7号発刊によせて

教務部長・教職課程センター長

真部 真里子

今年度も、無事に、教職課程年報を皆様のお手元にお届けできることになりました。近頃、「教職の不人気化」「若者の教職ばなれ」が叫ばれる中ですが、本誌に寄稿くださった学生を含む本学の教職課程に関わる方々の文章からは、教職に対する真摯な取り組み姿勢、熱い思いや教職の魅力が伝わってきます。

随分以前のことで、私は、懸命に教職をめざす人々と出会ったことがあります。私は、教員免許状取得に必要な単位を不完全に修得して大学を卒業してしまったので、本学着任後、通信制のある女子大学で、教員免許状を取得することにしました。通信制といえども、いくつかの科目は、スクーリング（大学での対面授業）に出席する必要があります、夏休みに受講することになりました。通信制ですから受講生の年齢は千差万別。その時の出席者は、20歳代から70歳代の方まで、平均すると40歳半ばくらいだったでしょうか。ほんの10日程度でしたが、自己紹介付きのグループ学習が多かったこともあり、共に受講する方々の教職をめざす背景などを知ることになりました。ある方は、大学を2年で中退して南米の楽団の方と結婚され、子育てしつつ、演奏旅行を繰り返しておられましたが、教育の大切さ、大学で学べることのすばらしさに気づいたとおっしゃって、休演期間を利用して単位を積み重ね、4年制大学卒業と教員免許状取得をめざしておられました。また、ある方は、高校卒業後実業団バレー部員として活躍し、一時は日本代表候補に選ばれつつも怪我で引退して結婚、出産。子どもの成長を見守る中で、教師になって中学校のバレー部顧問（監督）になりたいと一念奮起の末、通信制の大学に入学されました。その年、「やっと、卒業に必要な単位が揃った」、「この授業の単位がとれば教職もとれる」と嬉しそうに話してくださいました。他にも、仕事をしながら教員免許状を取得するため、教育実習を受け入れられる夜間定時制高校を探し回ったと言っておられた方がおられました。受け入れていただけたものの、授業時間帯前後1時間しか学校での滞在が許されず、毎日1分でも長く学校で授業準備がしたいと門前で開門を待っていたら、見かねた守衛さんが、こっそり、少し早めに入構させてくださり、さらに研究授業の日は2時間前に入構させてくださって、無事に教育実習を終えられたとおっしゃっていました。

その大学の通信制では、2本のレポートの合格を条件に受験可能となる修了試験に合格できないと単位が修得できません。レポート作成に必要な文献一つ集めるにも、一般の図書館では大学の図書館のようにはいかず、また、課題に悩んでも、相談できる先生が身近におられないなど、通信制ならではのご苦労も耳にしました。勿論、提出したレポートには、随所にとっても丁寧なコメントが入って返却されるため、非常に勉強になりますし、担当教員のガイダンスなども開かれてはいるのですが、そばにすぐ相談できる先生方がおられる本学での学びと比べると困難が多いと言わざるをえません。このように、環境的にも、時間的にも困難が多い中で、自分が見つけた教職という目標達成に向けて努力する方々と接する機会を得て、自ずと教職に就くという

意味を再認識することとなりました。私は、自分が必要な科目の単位修得以上に、スクーリングでお会いした方々の努力、熱意とお人柄に触れることで、得るものの多い10日間を過ごすことになりました。今でも、ふと、お会いした方々のことが心に浮かび、教員になる夢をかなえられたらどうか、どんな先生になられたらどうかと想いを馳せることがあります。

さて、先述のとおり、この教職課程年報には、私がスクーリングで出会った方々に負けず劣らずの教職に対する熱い思いが詰まっています。教職が楽なお仕事とは思いません。教職に就くことに心揺れる方が少なからずおられることと思います。教職に邁進されておられる方は勿論のことですが、教職に不安を感じる方がおられましたら、是非、この年報を手にとって、どこかのページからでも、少し、読み進めていただけたらと思います。行間から伝わる教職に関わる方々の思いを通して、教職の意義や深さに触れていただけたら幸いです。

2024年3月

第 1 部

教職課程センター主催の講演会、 研究会、説明会等の活動報告

1. 教職課程センター特別講演会
2. 人権・同和教育及び性教育講演会
3. 介護等体験オリエンテーション及び介護等体験
4. 教職課程センター特別研究会（夏期）
5. 教職課程センター特別研究会（春期）
6. 教職課程オリエンテーション
7. 教職課程説明会
8. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科
2024 年度入試特別推薦説明会

1. 教職課程センター特別講演会

担当：教職課程センター

水本 徳明

〈この講演会は、豊富な教職経験を持つ講師の実践を交えた講演に参加することで、学生に教職の実際を学ぶ機会を提供することを目的としている。同テーマ、同講師で2年間にわたり京田辺、今出川両キャンパスで実施している。〉

テ ー マ：「いつもいっしょがあたりまえ」

～「みんなの学校」が教えてくれたこと～

開催日時：2023年7月19日（水）15：00～16：30

会 場：京田辺キャンパス 知徳館 C283

参加対象：在学生、科目等履修生、大学院生

参 加 者：19名

講 師：木村 泰子 先生（元大阪市立大空小学校校長）

〈講演会の趣旨〉

大阪市立大空小学校では、「全ての子どもの学習権を保障する」という理念のもとに、地域住民や学生のボランティア、保護者らの支援を積極的に受け入れ、不登校も特別支援学級もなく、みんなが同じ教室で学ぶ学校づくりが行われている。その実践を記録した映画『みんなの学校』には子ども、教職員、保護者の苦悩やよろこび、成長、そしてその学校づくりをリードする木村泰子校長の姿が描かれて感動を与えるとともに、これからの公教育の在り方についての問題提起ともなってきた。この講演会では、参加者がこれからの学校や教師の在り方について深く考え、教職に対する理解を深め、教職に向けての意欲を高めるために、木村先生に「みんなの学校」の実践をもとにこれからの学校と教師についてお話をいただいた。

〈参加者の感想〉

学芸学部音楽学科演奏専攻 2 年次

本日は貴重なお話をありがとうございました。

自分の言葉で自分の気持ちを話すという行為は本当に苦手ですが、今の学校や学習に必要なことであると感じました。一人の子どもの意見として学校が刑務所というお話は本当にその通りかもしれないと思いました。全員が決められた規則を守ることを強要され、何かひとつのことだけが正しいとされる空間でルールをつくること、それらを守ることは必要ではありますが皆が納得する理由が必要であり、それは誰に対しても例外ではないと感じました。また、二択だけではなく **pass** するという選択肢をつくることによってひとつの自由が生まれるというお話がとても印象深かったです。私自身、当事者意識が欠如しており、生徒という立場は教えてもらう側で自分が自分の学校をつくるという考えに至っていませんでした。この場所で生きづらいのは他人のせいだ、ではなく自分が変えようという意識で当事者になることが必要だと感じました。すべての人が当事者になることで人のせいにしない学校づくりができだと思います。また木村先生のお話で文句は絶対に言ってはならないが意見はいくらでも言っている、文句を意見に変える、という言葉がとても胸に刺さりました。世の中を変える、コミュニティを変えるために意見を言う、つまりは自分の考えを持つことが必要だと初めの目標に繋がると感じました。4つの力の中で圧倒的に自分に足りないものは自分

の考えを持つ力だと思います。今回の講演を機に、まず自分の考えを持つところから始め、自分に対しても自由を創造しようと思いました。本日は本当にありがとうございました。

現代社会学部現代こども学科 3 年次

学校、こども、教師、大人に対する考えが自分の中ですごく変化したように感じます。自分自身が今までどんな環境で、どんな学校で、どんな大人と出会い、どのように育ってきたか、当たり前だと思っていたことが実はそうではない、いろいろなことが頭の中を巡りました。こどもも教師も学ぶこと、正解のない答えを問い続けること、一人ひとりの「個」を認め存在や価値観を大切にすること、それこそが今の教育にとって考え直すべきところなのではないかなと強く感じました。木村先生、本当にありがとうございました。



2. 人権・同和教育及び性教育講演会

担当：教職課程センター

佐藤 光友

実施日時：2023年9月9日（土）10:30～16:15 今出川キャンパス

2023年9月16日（土）10:30～16:15 京田辺キャンパス

会場：今出川キャンパス 楽真館 R401

京田辺キャンパス 知徳館 C131

主旨：3名の論壇者による講演会を開催し、人権・同和教育および性教育の学習に取り組む。

対象：教職課程の履修者で、2024年度教育実習予定者

プログラム：

- ①10:30～12:00「性教育」：布施 邦子 先生（大阪公立大学特任講師）
- ②13:00～14:30「人権教育」：中川 陽子 先生（大阪成蹊短期大学専任講師）
- ③14:45～16:15「同和教育」：星野 勇悟 先生（大阪府公立小学校教員）

3. 介護等体験オリエンテーション及び介護等体験

担当：教職課程センター 中川美保子・大黒 孝文
水本 徳明・佐藤 光友

(1) オリエンテーション

実施日時：2023 年 9 月 27 日（水）15：00～16：30

会 場：今出川キャンパス 純正館 S014（対面実施）
京田辺キャンパス 知徳館 C131（オンライン配信）

対 象：教職課程の履修者で、2024 年度介護等体験予定者

参 加 者：195 名

プログラム：

- ①介護等体験概要説明
- ②DVD による介護等体験の事前学習
- ③体験実習への心構えについて
- ④今後の手続きについて説明

(2) 介護等体験について

今年度の介護等体験については、文部科学省「令和 2 年度から令和 5 年度までの間に限り特例的に行う介護等体験の代替措置等について」（2023 年 2 月）の通知により、本学では介護等体験受入先の安心・安全及び学生とご家族への同様の配慮により、実際の介護等体験を行わず、全て代替措置（レポート課題）で対応することとした。

代替措置の印刷教材として、（独）国立特別支援教育総合研究所が開設する免許法認定通信教育の科目に係る印刷教材

- ①視覚障害児の教育課程及び指導法
- ②聴覚障害児の教育課程及び指導法

を指定した。

なお、実際の介護等体験を希望する者には 2024 年度の体験を案内した。

以下、受講生のレポートの一部を転載する。

I. 視覚障害児の教育課程及び指導法レポート

学芸学部音楽学科演奏専攻 3 年次

1. 学修の成果

視覚障害者と言えば今まで全く見えない全盲の人や著しく視力が低い弱視の人のことを指すのだと思っていました。しかし、一口に「弱視」といっても、視力の低さだけでなく視野や色覚に障害がある場合もあり、その見え方は多様であることを知りました。視覚障害児を教育現場で指導するとなると、対象者の障害の程度やできること・できないこと、どのような場合に支援を必要とするかなどを本人や保護者、医師、教師同士などと食い違いがないように共有し、対象者が着実に学習の効果を上げられるような一人ひとりに寄り添った支援・指導方法を考える必要があると思いました。そのような指導を行うためには支援者が連携を取り合うことももちろん大切ですが、何より対象者の生活や学習の姿をよく観察し一人ひとりに寄り添うこと、教師との信頼関係を築くことが鍵となるのではないかと考えます。また、対象者の観察を通して知り得た能力や意欲に合わせて、スモールステップを用意し成功体験を多く作り出すこと、対象者が弱視の場合には健常者にとって当たり前の「見る」という行為を意図的に経験させて言葉での説明とともに理解を深めさせていく必要があると考えました。

今回の学習を通して盲学校には「自立活動」という時間があることを初めて知りました。ものを見ることができないという障害により、あらゆる場面において困難や生きづらさがあると思います。そのような児童・生徒の自立を促し困難を改善するための主体的な態度の育成をすることが自立活動において大切だと思いました。私が視覚障害を完全に理解することはできませんが、その気持ちを想像し一人ひ

とりに寄り添った指導を行うことが盲学校では重要であると考えました。

2. 将来の展望

私は音楽科の教員免許取得をめざしているため、特に音楽科での指導にあたってどのように生かしていけばよいかについて考えてみました。音楽科では歌唱や器楽など実技の単元も多くあります。健常者は演奏の手本を目で見てその真似をしながら習得していくことができますが、全盲者はそれができないため全てを言葉や演奏で伝えていかなければなりません。その時に生徒が興味を持ち、惹きつけられるような工夫が必要になると思います。楽器や曲の魅力を伝えることから始めて、見ることができない演奏方法を的確にわかりやすく説明する。楽譜を読むことができない分、リズムや音を覚えさせるまで繰り返し説明したり手本となる録音を聴かせたりするなどをできるようになるまで根気強く行うべきだと思いました。楽器の構造や演奏姿勢などは理解していないと上手く演奏することが難しいと思うため、力を入れて説明したいです。また、一人ひとりの進度や何が理解できていないのかをよく観察し、それに応じた説明を個別に行うようにしたいと思います。健常者への指導以上に簡単なことから徐々に難しくしていくペースや内容を考え、生徒自身が毎時間ごとに「できた!」を実感できるようにすることが充実した授業の秘訣になると考えました。また、できなくても怒らない、人と比べないといった、楽しみながら音楽の学習に取り組んでもらう雰囲気づくりも大切だと考えます。盲学校においても他の学校においてもできるようになったことはもちろん、できなくても向上するための意欲や態度がみられたらそれを認めるような温かい授業にしていきたいです。

1. 学修の成果

視覚障害者の中でも視力や見えにくさに違いがあることが分かった。弱視だと、ものを大まかに捉えることはできるが細かい部分は見えにくい場合もある。また私たちは物事を見て何かを判断する時、今までの経験を判断材料として判断しているが、目が見えない場合、今までの経験がないため判断するための要素が減ってしまう。そのようなことを配慮して指導をしていかなければならないと感じた。乳幼児期における発達では、生活習慣、運動、言語等を見て学ぶため障害の無い子どもに比べて歩行の開始時期や言語の習得が遅れてしまうことがあるため、子どもの個々の発達に合わせて教育や支援を改善し、保護者との連携をとり、早期に対応することが大切である。学校での教育においては視力に合わせて点字を使用するか、普通文字を使用するか、併用するかを判断し、文字を理解するスピード上げていくのが重要だということが分かった。コンピュータの学習が義務化されていることに合わせて、今までの教科書からの文字の認識方法と変わっており、テキスト情報の音声化などができる情報機器の活用によって全体的な文字を理解するスピードが速くなり、学習に差が生まれにくくなると思う。音楽教育をするにあたって、視覚障害があると楽譜を見たり演奏したりすることが難しいため、歌唱や楽器の演奏を聴いて覚えるなど音楽に対しての関わり方を変える必要がある。また点字楽譜というものがあるということを知り、聴いて曲を理解するよりも時間がかかってしまうが、楽譜が見えない子どもにとっては聴いた曲がどのように書かれてあるのか分かるため点字楽譜を利用するのは面白いと思った。一人ひとりの視力や理解度に合わせて指導を変えていくことが必要不可欠であると分かった。

2. 将来の展望

視覚障害の中にも全盲、弱視があり、全盲は視覚

を用いて学習をすることができないため点字や音声機器を使用する必要があるが、弱視は視覚補助具等を使用し文字を拡大したり反転させたりして文字を理解する。このように視覚障害の程度によって教育の方法や学習の手段を変えてく必要があるため、指導者は一人ひとりの文字の理解の方法に向き合っていかなければならない。また障害がない子どもと比べて、ものを見て判断する経験が少ないため理解するのに時間を多く費やしてしまうということを配慮しなければならないと感じた。自分たちにとっては当たり前のことでも視覚障害を持った人からすれば、当たり前ではないということを前提に平等に教育していく必要がある。今回の学修で盲学校には普通科だけではなく、理療科や保健理療科、理学療法科、音楽科を設けている学校もあるということを知った。視覚の程度を把握し、鑑賞して学習することが難しい場合には、聴覚や触れる体験や活動を重視し、触れているものの具体的なイメージをつくりながら、創作的な活動を進めていく必要があると分かった。視覚障害という理由で学習の幅を狭めてはいけなため、学習できるように教員がサポートしていかなければいけないと思った。視覚障害者が社会でより活躍していくためにも教育の場では、自立することができる教育をすることが大切である。そのためにも情報に応じた人とのコミュニケーションを取ったり、他者との関わりを円滑にしたりできるように、学校での人との関わりを密にしていけるべきであると思った。そして、児童生徒が主体的な学習ができるようにコンピュータなどの効果的な活用を通して情報を収集、整理し、視覚障害の状態等を考慮した指導方法を工夫していく必要がある。

1. 学修の成果

学習を経て、私が学んだことは大きく二つある。

第一に視覚障害は様々な見え方の違いがあるということである。私の中で視覚障害がある人は目が全

く見えない人という概念が強かったため、今回学んだことが大きな発見であった。視覚障害は大きく盲と弱視に分けられる。見え方として、盲は明暗の区別がつくことや目の前の指の数を数えられることなど程度がある。また、弱視はピンボケ状態や暗幕不良状態など見えにくさに個人差がある。さらに視力だけでなく視野や色覚などの障害を併せて持っている人もいるということが分かった。このような違いがあるが、学校教育では視力の程度ではなく普通文字による教育が困難であれば盲、普通文字による学習が可能であれば弱視といった区別が妥当とされているようである。

第二に視覚障害を持った児童の指導方法の留意点である。視覚障害の児童を目立たせてしまうことや特別視してはいけないが、授業を受けやすくするための配慮は必要である。様々な留意点が紹介されていたが、私はその中でも概念形成ができるようにすることが特に大切だと思った。なぜなら事物・事象や動作が言葉と対応するために、教師は普段の話し言葉でも注意する必要があるためである。「これ・あれ」などといった抽象的なものではなく、具体的な話し言葉を意識して授業を行うことが大切である。実際に見る・理解するなどといったことが困難であるため、聴覚・触覚や持っている視覚を十分に活用し、教師が言葉で詳しい説明を加えるなど児童自身で確認できる情報を準備するとよいと分かった。

2. 将来の展望

学んだこととこれから活かしていきたいことを対応させながら述べていこうと思う。

まず、視覚障害の見え方には様々な種類があるため、児童の見え方について正しい理解をすることが必要だと感じた。そのために、普段の授業で見えづらい場面やその状態などをヒアリングすると良いのではないかと思った。普通文字による学習が可能であっても見え方の中には振とう状態や視野の制限など十分な学習がしづらい状態もあるため、黒板や配布する資料での工夫や配慮をしていきたい。また低学年のうちは自分自身の状態を上手く言葉で説明で

きないこともあり得るので、見え方や感じ取り方の特徴など、保護者とも連携を取りながら学習方法を模索すると良いのではないかと考えた。連携の面から述べると、学習方法で効果的なものなどは教師間での情報共有をし、児童の学習環境をより良いものにする工夫をし続けていきたい。

次に児童の指導方法での留意点は上記に述べたものに合わせて情報機器の活用ができるようにしたい。児童が持っている聴覚や持っている視覚を十分に活用するためにタブレット機器などを用いて音声読み上げ機能や大切な部分を強調させる機能を利用することや自由に拡大縮小が行えるようにしておくことで授業での不便さが少しでも解消できると知ったので利用していきたいと思った。全盲の児童、弱視の児童で用いる教材が異なってくるため、教師が正しい教材を準備できるようにしたい。また、操作方法や使用の注意点などの教材研究を欠かさないようにする必要があると感じた。

表象文化学部日本語日本文学科 3 年次

1. 学修の成果

今回私が学んだことは、視覚障害と一括りにいえないということです。「盲」か「弱視」なのかの違いや他にも様々な違いがありました。きっと一人として同じ見え方をしている人はいないのだと思います。これまで無知だった私からすると、視覚障害と聞いても目が見えない人という認識だけでした。でも、それだけでは理解するにはあまりにも乏しい情報でした。

視覚障害児は通常学級で学ぶ人と、支援学級で学ぶ人がいます。支援学級の先生だけが知るべき情報ではなく、通常学級の先生も理解すべきだということが分かります。通常学級で学ぶ、支援を必要とする視覚障害児に対して、配慮すべきことを知ることができました。チョークの使う色、板書する量、文字の大きさ、それから教室の大きさ、他にもまだまだあるでしょう。工夫すべきところは考え続ける必

要があります。

私が一番理解不足だったと思う点が、視覚障害児の心についてです。視覚障害児は、ハンデを背負っているという思いから、目立ちたくないという考えや、自分の視覚障害について理解してもらうのを諦めてしまうことがあると知りました。考えてみれば、ネガティブな感情を抱いてしまうのも無理のないことです。周りを見渡せば皆ができていのに自分にはできないと思い込んでしまうと、できない自分にやるせなさを感じてしまうことは私にもあります。だからこそ心に寄り添うべきだと考えました。

学校全体としては、教室や門の入り口を分かりやすくしたり、環境を整えたり、点字を利用したり、学びやすい環境を整えるべきであり、教員や生徒が理解を深めることで、ハンデを持った生徒が学びやすい場になると思います。

2. 将来の展望

今回の学習から、私は教員になったとき2つの活動を行おうと考えました。

1つ目は、視覚障害児との積極的コミュニケーションです。私は知識として得ただけであり、当事者ではありません。完璧に理解することができないことは自覚しています。だからこそ、当事者である視覚障害児に聞くべきではないでしょうか。授業でついていきにくい部分を聞き、教員が授業で視覚障害児に配慮して工夫した点があるのならば、どうだったか聞いてみるべきです。視覚障害児に足りないのが視力ならば、教員になる上で私に足りないのはそれに対する理解であり、その理解を完璧にできないからといって、生徒を教える上で努力を怠ってはいけません。コミュニケーションを取ることで、心のケアもできるので、必ず必要となってくることです。

2つ目は、視覚障害児を理解するための活動です。視覚障害児ではない生徒からすると、視覚障害児が学校生活を送る上でどのような点で困るかが分かりません。障害を持っているからいじめられる生徒もいる現状を踏まえて、マイノリティに対する理解度は生徒に高めてもらうべきです。数の暴力とい

うものがあるように、少数派を排除しようとする思考を持ち合わせている人がいるかもしれません。だから、全ての人が違っているということを分かってもらう授業は必要だと考えます。また、視覚障害者の視点に寄り添う授業も必要と考えます。例えば、アイマスクをする人とガイド役に分かれて目が見えない状態で校舎を回り、擬似ではあるものの、当事者の立場に立つ事は重要です。視覚障害児以外の生徒が、視覚障害児のサポートをできるようになるのではないかと考えます。視覚障害児に寄り添う環境をつくれるように努める教員をめざします。

生活科学部人間生活学科 3 年次

1. 学修の成果

私が今回学んだことの中で、視覚障害児について見えるレベルや生活経験の違い、いつから視覚障害があるのか等を細かく理解することが重要であると考えた。

私はユニバーサルデザインゼミに所属しており、ゼミで視覚障害児向けに触図を使った3ページの絵本を作った際に視覚障害児について理解できていないと実感した経験がある。フワフワした動物の触図を触ってもらい、その動物が何かを当ててもらおうというテーマにして視覚障害児でも楽しめるような作品を作ることを心がけて絵本を作ったが、視覚障害児の中にはその動物を一度も見たことがなく、そもそも見た目が分からない方もいるということが頭から抜けてしまっていた。動物にどのような特徴があるのかは知っていても、触図を触ってもそれがどの動物か分からない可能性があるということに完成してから気がついた。視覚障害の無い自分にとっては動物によってどのような特徴があるのかということは目に見えて分かっているのが当たり前だと思ってしまっていて、視覚障害児の状態や気持ちを理解することができていなかったと痛感した。当時は視覚障害についてしっかりと理解できていなかったため、そのような結果になってしまったと考

える。

その経験と今回学んだことをきっかけに視覚障害児について細かく理解することの大切さについて改めて考え、学ぶことができた。すべての児童生徒に応じた環境を整え、指導方法を考え選択できるような教員になれるように努めていきたい。

2. 将来の展望

私が今回学んだ視覚障害児への家庭科の指導方法を、教職に就く際に生かしたいと考えた。この指導方法は、視覚障害児だけでなくすべての児童生徒にも応用することができるため、視覚障害の有無を気にせずに実施できるようにしたいという意図を持つ。

例えば、野菜や果物の学習では、形・大きさ・重さ・感触・匂い等を実際に野菜や果物を触ったり匂いを嗅いだりして体験することで、野菜や果物の特徴を「見る」以外のことで把握できる。この指導方

法は授業を受けている児童生徒が共通してできることを取り入れ、可能な限り、視覚障害児に目が不自由であることを感じさせないような授業を実施したいという考えに繋がる。また、このような手法を用いることで、複数の感覚を刺激することができる。例えば、布を切る、針や糸で縫うといった行為は、視覚だけでなく、触覚や音にも影響を与えるものである。このような多様な感覚の刺激により、児童生徒はより深い理解を得ることができ、学びの効果を高めることができると思う。

そして、板書や授業で使用する図やグラフ、地図でのカラーユニバーサルデザインや、見やすい文字の大きさの選択など、すべての児童生徒にとって分かりやすい指導を心がけ、音を利用して環境認識を行うことができる視覚障害児に対しても、分かりやすく簡潔な説明をするなど配慮したい。このように、視覚障害児に対する指導方法を活用し、手本となる授業を実践していきたいと思う。

Ⅱ. 聴覚障害児の教育課程及び指導法レポート

学芸学部音楽学科演奏専攻 3 年次

1. 学修の成果

「聴覚障害児の教育課程及び指導法」の学修を経て私が学んだこと・印象に残ったことは主に二つある。

一つ目は、聴覚障害によって言葉の発達や理解に影響が出る、ということだ。聴覚障害児にとって、特に目からの情報は非常に大切である。このことは言うまでもない。しかし、その目からの情報すべてを正確に理解することはとても難しいことを学んだ。聴覚障害により、聴こえにくい、だけではなく学びが制限され、それが理解の制限へと繋がることを知った。特に日本語には、教材文で用いられる言葉の意味と、一般的な意味と異なる場合の意味理解が挙げられるケースが多い。また、授業内だけではなく、互いの伝達や理解の違いにより友人との拗れが起こる場合もある。子どもの知っている言葉のイメージや概念を広げていく指導や配慮をしていかなければならない、と強く感じた。そのためには、いろいろな知識・経験をたくさん積むことが大切だ。

二つ目は、聴覚障害の特徴、伝音難聴・感音難聴・混合性難聴についてである。聴覚障害は一人ひとり異なる。言うまでもないかもしれない。しかし、指導に当たる上で最も重要なことだと私は考えている。単に「聞こえていない」のではなく、「何が聞こえており、何が聞こえていないのか」、そして音や音声自体は聞こえていたとしても何らかの課題から「聞こえていない」ように見えるのかなどについて、分析的に視る視点をもつこと、聞こえにくさで様々な困難さを経験している子どもそのものを知ること、その言葉に感銘を受けた。

その他にも、書き記すことのできない学びがたく

さんあった。「聴覚障害児の教育課程及び指導法」での学修や抱いた感情を胸に、これからも教職課程の学修に励みたい。

2. 将来の展望

私は4歳からエレクトーンを習い事で始め、幼少期から音楽に触れてきた。そして今も、音楽を聴いたり、演奏したり、音楽が好きだ。音楽のない人生は想像がつかない。その音楽の魅力を感じてもらいたい・一緒に学びたい、この先も音楽に触れていたい、という思いから音楽教師をめざしている。聴覚障害を持っている子どもたちとも一緒に音楽に触れたい。私が「聴覚障害児の教育課程及び指導法」を選択した理由である。

「音が聞こえていないと音楽は難しいのではないか」、そう捉えられがちである。実際私もその一人であったかもしれない。しかし、それは思い込みにすぎない。講義を通して、子ども一人ひとりを分析的に視る視点を持ち、意思疎通を図りつつ、試行錯誤しながら、子どもの可能性を伸ばし、視野を広げる・たくさんの経験をするのが大切だ、と学ぶことができた。その中の一つとして音楽がある。音楽にしかできない役割がある、と改めて感じた。子どもたちは一人ひとり違う。音楽を形作っている要素（強弱や旋律など）を正確に完璧に聞き取ることは難しいだろう。しかし、音楽に合わせて一緒に拍を打ったり体を動かしたりすることで、要素を体感することができる。要素の視覚化・動作化をする。この講義を受講したことで気づけた視点であった。その子の可能性を見つけ、どうすれば伸ばせるかを考える。音楽だからこそできる学びがある。私が教職に就くに当たって、教職に就いてからも忘れてはならないことである。

音楽を通していろいろな知識・経験を積んでもらい、その子どもたちなりに音を楽しんでもらう、そ

んな教員になれるよう、上記の学び（この講義での学び）を生かしていきたい。

学芸学部音楽学科演奏専攻 3 年次

1. 学修の成果

聴覚障害児の教育課程において、自立活動というのはすごく大切なのだと学びました。また、聴覚障害にもレベルがあり、補聴器を付けていれば日常生活を送れる人もいれば、重度の聴覚障害で聴こえない人もいます。このレベル別に生徒たちと接し、教育を行う必要があるのだなと思いました。聴覚障害者に指導するときには、適切な指導や配慮を行うことが大切で、はっきりと話すこと、掲示物や板書の工夫など、様々な配慮をする必要があると思いました。

そして、今までの聴覚障害教育の歴史についても学びましたが、現代の聴覚障害教育というのはここ数十年で発達しており、初期の頃に比べて、聴覚障害を持つ生徒にとって教育を受けやすい環境というのが整えられていました。それらから、聴覚障害があってもきちんと教育を受けられるようになっていくことが分かりました。指導をしていく中で、言わないように気をつければならない言葉や生徒に対してどのようにコミュニケーションを取るのが良いかなど、知っておくべき知識がたくさん書かれていて、実際の現場で気をつけないといけないなと思いました。後半では、ICT 技術の活用方法が記載されており、教材やコンピュータを使った最新の授業方法など、細かく書かれていました。今まで私が見たことのない「見える校内放送」「視覚情報で伝えるチャイム」など耳が聴こえなくても目で見て分かるものがたくさんあり、今の教育現場では、聴覚障害があっても不自由なく教育を受けられる工夫がたくさん施されているのだなと改めて感じました。

2. 将来の展望

私は、今回この聴覚障害児の教育課程及び指導法

を学んで、自分の担当科目にどのように生かせるのだろうと考えました。私は、音楽が専攻科目なのですが、音楽というのは「音を聴く」ということが必須になってきます。耳が聞こえるのが当たり前になっていましたが、そうでない生徒がいること、実際に働く現場に聴覚障害の生徒がいるのかもしれないと考えたときに、私は、音が聴こえなくてもみんなでする音楽を行うことが大切なのではないかと思いました。その生徒の聴覚障害のレベルをしっかりと理解したうえで、タブレット端末など、現代の発達した ICT を使用して、今どんな説明をしているのか聴こえなくても分かるような工夫をしたいと思いました。また、実技のほうに入るときには、ボディーパーカッションなど、体を使ってリズムをとる授業などを行い、その際、生徒とアイコンタクトを取りながら、ゆっくり大きくはっきりと言葉を発することで実際のリズムやテンポを伝えることができるのではないかなと思いました。また、生徒の体にリズムを入れてもらうため、生徒の肩でリズムを刻みながら進めていけばいいなと考えました。きっと生徒自身が一番不安に思っているだろうし、教師側が、この生徒は聴こえないから他の生徒とは違う内容の授業をしようなど、諦めてしまうのではなく、何をすればこの生徒も一緒に音楽を学べるのかという試行錯誤を繰り返すことが重要だと思いました。最新の技術も活用し、自立活動を支援する形で聴覚障害のある生徒でも一緒に学べる授業を行える教師になりたいと思います。

学芸学部音楽学科音楽文化専攻 3 年次

1. 学修の成果

言語習得の過程や要求伝達の発達、カリキュラムマネジメントを読んで、言語概念を身につける難しさを学んだ。大人との共同注意の場面で、視覚で捉えた対象を音声で確認することが難しかったり、自分の視野の外での情報を感じ取り、注意を向けることが難しかったりすることが、日常生活での様々な

言葉の経験の幅を狭める可能性があることを学んだ。また、語彙の種類によって獲得の難しさも異なり、具体的に物体と関連付けられるのか、使用する頻度、イメージができるのかによっても違いがあり、言語発達に遅れがみられる場合があることを理解した。また、言語指導法の歴史から、多様なコミュニケーション手段により、発表や話し合いなどの活動から、的確な意思の相互伝達が入り入れられていたことを学び、聴覚に障害があると、他人から聞くことが難しいと考えてしまうが、理解し自分の意志を伝えることにもニーズがあることを考えた。自分は相手の発言が分かっている、指文字や手話なども用いて伝えることができて、相互伝達には相手の理解が必要なため、自分から積極的にコミュニケーションを取る難しさが課題だと考えた。生活上の留意点で、複数の場所からの同時提示や目線に合っていない提示を避けることや、声の大きさ、視覚的情報の併用などニーズに合った情報の伝え方など、新たな気づきがあり、接する上で、まず相手の気持ちになってどの手段が最善なのかを考えることの重要性に気づいた。

2. 将来の展望

学修成果を活かし、学校生活で聴覚障害を持っている児童、生徒と接する上で、情報提示は、黒板の板書を分かりやすく工夫したり、ICTの活用によって表現の幅を広げたりと、視覚情報の確保を大切にすべきだと考えた。学習上の注意点として、教科書や資料を読む時間と、教師が話す時間を分け、文字と教師の口形や手話を両方認識することができるよう配慮し、特に音楽科では、音楽に合わせて一緒に手拍子や、体を動かすことによってリズムを感じ、活動に参加できるようサポートすることが必要だと考えた。授業以外でのコミュニケーションでも、まとまりのある、適切な長さの単語や文を正面から向き合い、口の形を見せながらジェスチャーや手話も用いてはっきりと発音することを心がけるなど、整った状況での伝達が求められると考えた。また、児童、生徒からの表出については、様々なコミュニケーション手段と、観察力、洞察力、教師の言

語力を用いて、的確に捉え、把握した上で、視覚情報に関連付けて理解を深め、働きかけや質問の工夫をしたり、気持ちを読み取ったりすることでコミュニケーションをとることが重要で、自立活動の面においては自分のニーズを理解し、周囲の状況、他人の行動や表情などを多角的に捉え、情報を得たり、自分の意志を積極的に伝えたりすることを目標とし、話し合いや発表などの機会をつくる、相互伝達の工夫を促すなど、個々の発達の状態を十分踏まえた指導を行い、サポートすることが大切だと考えた。

現代社会学部現代こども学科 3 年次

1. 学修の成果

学修を経て印象に残っていることが三つある。

一つ目は、聴覚障害教育の歴史についてである。聴覚障害教育の歴史を辿っていくと、聾学校の減少がみられ、通常教育と障害児向けの特設教育を統合したりしようとするインクルーシブ教育の発展をみることができた。インクルーシブ教育は統合という考え方であり、障害者とそうでない人の壁を壊しているものであるが、一方で新たな課題があると私は考える。それは対人関係についてである。互いがコミュニケーションと取ることが難しく、対人関係への課題が発生するのではないかと考えた。聴覚障害について周りが知ることも必要ではないのかと考えた。

二つ目は、障害者や保護者、学校の関わりについてである。この学修では、難聴の早期発見はコミュニケーションに大きく関わることを学んだ。ある授業で一度フランスのインクルーシブ教育について調べた。フランスでは、保護者や専門家などを募って障害のある子どもへの就学先やこれからについて計画していく特別支援があることを知った。これらのことから、いろんな人たちと関わり合って、その子どもに合った支援を見極めていく必要があるのではないかと考えた。

三つ目は、聴覚障害児の社会参画についてである。この学修で、社会参加し社会に貢献していくことに障害の有無は関係ないと学んだ。障害者がやりたいことを発見し、適当な職業に就き、社会へ参加できるように支援してあげることが大事だと考えた。また、共生社会の考え方がもっと広まってほしいなと考えた。それは、教育活動において、積極的に参加できる場面や、やりたいことをできる場面をつくり支援してあげることが大切だと気づいた。

2. 将来の展望

私は今回のこの学修を経て、聴覚障害教育において、指導目標や具体的目標を設定することが大切であることを学んだ。学んでいると、コミュニケーションを取ることが難しいと多く記載され、コミュニケーション能力の低下も見られることを知った。支援するにあたって、その子どもが今何を考えているのか、などコミュニケーションは不可欠であると考え。聴覚障害の子どもは、相手の表情や口の動き、身振り手振り、書写などから言葉を認識する。私たちは聴覚評価の視点をもとに目標を設定し、聴覚障害の子どもの自律活動を促し、コミュニケーションを取る、相手の気持ちを知ることが大切になってくると考えた。私はこれらのことから、コミュニケーションを取るときに、工夫していきなさいと考えた。コミュニケーションを取るにあたって大切なのは、相手に伝えることができているかどうかであると私は考える。言葉だけでなく、身振り手振りを利用して伝えてみたり、表情管理を試してみたりしてコミュニケーションを取っていきなさいと考えた。

また、上記でも述べたようにコミュニケーションが社会参加において重要になってくると考える。そこから人とのつながりを意識したいと考えた。一人で考えたことはその一つの考えにしかないが、みんなで考えたことは、その何倍も大きな考えになれると思う。障害の有無に関わらず、人とのつながりを持っていろんな考え方に辿り着けるように、多くの人とコミュニケーションを取ることを意識しようと考えた。

1. 学修の成果

私はまず初めに「聴覚障害がある子どもの学習上の困難さ」について学んだ。聴覚障害を抱えている子ども達は、話し言葉などが耳から入りにくく、自分の声も聞こえにくい。また、音だけでなく、音や言葉を基にした物事の意味や関係などの身の回り情報が得られにくくなる。これらのことから、結果的に言語能力や言語運用が育ちにくくなる場合が多いということが分かった。早期からの補聴器や人工内耳により、聞こえを保障することや、手話や身振り等様々な方法によって、コミュニケーションと情報を保障していく必要がある。コミュニケーションを取る方法としては、聴覚活用、読話、発音・発語、文字、キュード・スピーチ、指文字、手話などがあつた。その子どもの状態や環境に応じて、どのようにコミュニケーションを取っていくのかを考えていかなければならないと考えた。そして、次に聴覚障害がある子どもの義務教育段階における教育の場について見ていくと、「聴覚障害児童生徒を対象とする特別支援学校」「難聴特別支援学級」「難聴通級指導教室」「小・中学校の通常学級」「児童発達支援センター」があつた。これらの中でも特に、通常学級では、指導方法が重要になっていく。教室の座席配置、授業の際の教師の話し方の工夫などがあげられる。また、教室内の音環境を考慮し、FM 補聴器やデジタルワイヤレス補聴システム等を使用するなどの配慮が必要になる。さらに、聞こえの支援、視覚的な情報の獲得の支援、各教科の授業内容の支援、コミュニケーションの支援ができる ICT の活用はかなり有効的であると考えた。

2. 将来の展望

教職に就くに当たって、聴覚障害を抱えている子どもの実態をまずはしっかりと理解して、配慮していく。聴覚障害を抱えている子どもへの指導を行う際には、教材文の検討を行い、児童生徒にとっての

教材文の読みの困難さを予測する。そして、それを踏まえた上で、単元で身につけさせたい力、本時で身につけさせたい力を明確にしていく。言語活動を行う際には手話表現なども取り入れるなどして、児童生徒が理解できるためには、目標を達成するためには、何をすべきかを具体的に考えていく。しかし、聴覚障害のある児童生徒は、出来事の因果関係や言語の背景など、目に見えない事柄を理解することが難しいことが見受けられる。そのため、相手の立場に立つことや、人間関係を俯瞰して見る、筆者の意図を読み取るといったことが難しい。そのような際には、同じようなシチュエーションの字幕付きアニメを視聴し、イメージを持たせたり、絵カードと感情の言葉カードを使用したりして、より具体的に細かく、その状況や意図を一緒に考えていくというような配慮をしながら、聴覚障害のある児童生徒を支援していく。また、児童生徒の支援はもちろんのこと、保護者の支援も忘れてはならないと考える。上記に示した、聴覚障害のある児童生徒の教育の場について具体的に説明することや、指導方針や方法をしっかりと伝えていくことも重要であると考え。また、通常学級の際には、周囲の理解が必要不可欠である。聴覚障害について学ぶ機会を設けるなどして、互いが助け合えるような学級経営をしていきたい。このように、聴覚障害のある児童生徒への配慮と、その保護者への配慮、周りの児童生徒への配慮を欠かさず、より良い教育ができるよう努めていきたい。

大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）

1. 学修の成果

「聴覚障害児の教育課程及び指導法」の学修を経て学んだことは、聴覚障害児が社会で一人の人として活躍できるよう、個人の状態に合わせた教育課程と指導法が行われていることです。特に興味深いと感じた点は、彼ら聴覚障害児はインプットが「聞くこと」より「読むこと」であり、新出の学習内容に

関して「どこかで聞いたことがある」のように聴児が日常的に得られる掴みがどうしても乏しくなってしまうことです。言葉で思考する力の重要性が感じられるとともに、彼らが学びに対する困難に負けないよう工夫が施されていることを知りました。例えば、新規学習の際には、既習事項と結び付けて思い巡らす量を増やし、新たな学習へのフックをできるだけ多くすることで、彼らの学習の定着度が高まりやすいことです。学年が上がるとともに学習言語が多用され、その抽象化された言葉で躓きやすいのは聴児でも十分な可能性があるため、聴覚障害児がその状態に陥ることは容易に想像できます。なぜなら、彼らは「聞く」というインプットが補聴器等の聴覚活用を用いても限られていることがしばしばあるからです。そのことから、既習の言葉や生活言語で彼らが今までに経験してきた具体的な言葉の活用が彼らの学びを大いに手伝っていると考えられます。また、彼らの「読むこと」の能力が必ずしも高いわけではないと気づきました。彼らが持つ優れた直感に関する言語化の定着の弱さや、視覚優位型となりうる彼らの言葉を学習する難しさから、限られた方法によるインプットが母語である日本語習得に強い影響を受けていることを学び、意図的に可視化された言葉の出会いを増やす配慮が不可欠であると学びました。

2. 将来の展望

上記の学修成果から、学校教育で誰一人取り残さず学習についてこられる状態をつくることができることで生かせるのではないかと感じました。その理由は、彼らのように学年が上がるとともに学習言語に躓く聴児は一定数存在すると想定した上で、可視化される情報は多ければ多いほど良いと考えたからです。私は英語科の教員をめざしているため、日本語と英語の二言語を扱います。現在は話せる英語を軸に教育課程が組まれているため、実際に英語を使い学習者が自ら気づいて学習の定着を図る場面が以前より増えています。しかし、言語の説明は学習言語と呼ばれる生活言語よりも難しい専門用語などを用いることは避けられません。そこで助けになるの

が可視化された情報なのではないかと思います。その可視化は、板書でのチョークの色分けや使い方、イラスト化した例え、実際に生徒がカードを用いて文を並び替えること、ICT を活用して生徒が学習した英文を発話しタブレットが正しく文字起こししてくれるか等、前半は先生による可視化された授業、後半の例は生徒が実際に言葉を見ながら、声に出して自分の中に吸収していくといった、可視化した上で体験させる取り組みが挙げられます。そうすることで、英語学習も学びを抽象的な言葉に留まらせる

のではなく、可視化されて言語内の識別ができ、実際に活用することで生活言語に落とし込めるのではないかと考えました。

つまり、インクルーシブ教育として彼ら聴覚障害児が担当クラスにいるからそれに合った使用をするに限らず、聴児のみのクラスであっても同様に可視化された学習内容や情報提示できるようにしておくことで、スローラーナーのような学習に躓きやすい生徒にも役立ち、生かせるのではないかと考えました。

4. 教職課程センター特別研究会（夏期）

担当：教職課程センター 佐藤 光友・大黒 孝文
中川美保子・水本 徳明

実施日時：2023 年 8 月 28 日（月）9：30～16：00

開催場所：京田辺キャンパス 聡恵館 1 階 ラーニング・コモンズ（イベントエリア）

主 旨：主に、1・2 年次生で教職をめざす学生または教職に関心のある学生と、3 年次生以上で教員採用試験受験予定者を対象とした教職課程研究会

参 加 者：17 名

プログラム：

- * 教員採用試験の動向等と面接関連（来年度の教員採用試験について）
- * 場面指導（特別活動や生徒指導等、学校の様々な場面で起こる事象に対して教師として接する）
- * 集団討論（教育法規・連合教職大学院についての解説含む、集団討論のテーマ及び形式の傾向、評価の観点、留意点などについて解説する。加えて、重要な教育法規及び京都連合教職大学院について解説する）
- * 論作文対策、連絡事項（論作文作成での基本的な事項について解説する）
- * 経験交流会（教職をめざす、1 年次生から 4 年次生が集い、教員採用試験への取り組みなどを語り合う交流会）

〈参加者の感想〉

看護学部看護学科 3 年次

現代社会学部社会システム学科 3 年次

来てよかったと思った。先輩の声を聞いてからした方がいいとか詳しいことを聞けてとてもためになった。教育新聞があるということを知らなくて、それが面接対策に使えると聞き、読みに行こうと思った。実際の勉強時間、方法などリアルな意見も聞けて参考になった。私は 3 年次生だけどまだ勉強をはじめていなくて、これを機に頑張ろうと思った。私の周りにあまり本気で教員をめざしている人がいなかったけど、同じ夢を持っている人と知り合えたのでとてもよい機会だった。

教員採用試験の具体的な内容や対策の仕方が分かって、とてもためになりました。場面指導は教職独特の試験で、どういう内容なのか知らなかったけど、保護者への対応も試験に含まれる場合もあるということを初めて知ることができました。小論文の対策は全くやっていなくて、言葉の選び方や文章の書き方を意識しないといけないことが分かりました。先輩からのお話を聞ける機会もとても貴重で、勉強の具体的な方法や試験の内容、どう対策されたのかを聞くことができ、とても有意義な時間になりました。

私はまだ一年次生だったため、初めて知ることが多く、分からないこともありました。しかし、先生方の話や、先輩方の実際の経験談などを聞き頑張ろうと思うことができました。経験交流会では、先輩のそばで実際に聞きたいことを聞き、さらには同じような道をめざす先輩にも出会うことができました。今回の話を聞き、頑張ろうと思うことができました。ありがとうございました。

ついこの前まで話を聞かせていただく側だったのが、「もう話す側になったんだ…」と感慨深くなりました。本当に教員採用試験は、4 年次生になるとあっという間に始まってあっという間に終わります。私がやってきたこと、逆にできなかったこと、いろんな情報を共有することで少しでも後輩たちの試験や実習に対しての不安などを拭いて、前向きになれるようにと思いお話をさせていただきました。実は私自身、明日が 3 次試験の模擬授業と個人面接で、教員採用試験の最終日です。後輩たちの姿を見て、改めて刺激を受けることができました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



5. 教職課程センター特別研究会（春期）

担当：教職課程センター 佐藤 光友・大黒 孝文
中川美保子・水本 徳明

実施日時：2024年3月11日（月）10:00～16:10、3月12日（火）10:00～15:00

開催場所：京田辺キャンパス 聡恵館1階 ラーニング・コモンズ（イベントエリア）

主 旨：主に、1年次生以上で教員採用試験受験を考えている学生を対象とした教職課程研究会

参 加 者：31名

プログラム：

1日目

- *教員採用試験入試動向、面接のマナーと内容について
- *教職教養・面接・討論・小論文のための基礎知識 ―不登校・いじめ・特別支援教育に関して―
- *集団討論（頻出課題の傾向と今日的課題を中心に説明し、討議能力を身につける）
- *論作文対策、連絡事項（論作文についての知識・スキルを身につける）

2日目

- *面接・集団討論演習（聡恵館4階 T452・T454・T455・T457）
- *卒業生による教員採用試験対策と質問会（教員採用試験受験についての体験談等に耳を傾け、その内容等について質疑応答することにより自らの教員採用試験に備えていく）
- *交流会

〈参加者の感想〉

学芸学部音楽学科演奏専攻3年次

不登校やいじめの問題について、悩んでいる生徒に対する向き合い方や教員として普段から意識すべきことなどを、改めて考えさせられた。問題によって生徒の境遇や感情は異なるが、共通して彼らに必要なのは学びの場だと考え、学びの場を設けるためのあらゆる手段を知ること、生徒に合った対応が可能になると考えた。

また、教員採用試験の仕組みや詳細を知り、自分が今何を準備したら良いか具体的に把握することができた。採用試験を受けると決めたのが最近だとい

うこともあり、何から手を付けるべきか分からず正直なところまだほとんど行動に移していなかった。そのような中で試験対策の順序をイメージすることができたため、今から実行していきたい。

集団討論、論作文解説では、今の自分が教職に就くという意識を持っていないことに気づかされた。教育に関する議題が出された時、すぐ簡潔に自分の考え、意見を言葉や文字に起こせるように、教員としてあるべき姿を考え対策していきたい。

学芸学部音楽学科演奏専攻2年次

今回は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。途中までしか参加できなかったことが悔や

まれますが、教員採用試験の内容だけでなく、実際に集団面接や集団討論の実践に取り組めたことがより参加して良かったと思いました。教職についてどの程度どのようなことに取り組めば良いのかを理解せず過ごしてきてしまっていたのですが、教員採用試験の早期化を目の前に、自身が取り組まなければならないことを改めて確認することができたと思います。一つ一つの言葉だけではなく実践に繋がられるように頑張っていこうと思いました。面接や討論は練習の必要性を改めて感じ、自分の長所など「自分を理解する」ことも重要だと思いました。実習や教員採用試験に向けてこれからも頑張っていこうと思います。

本当にありがとうございました。

学芸学部メディア創造学科 2 年次

春期集中教職課程研究会に参加してとても良かったと思います。今年度の夏期にも参加しましたが、今回も教員採用試験へのモチベーションが上がるとともに、自分の受験予定の見直しにも繋がりました。特に、大黒先生による最新情報をまとめていただいたものが印象に残っており、自分の調査不足を痛感させられました。3 年次受験をする学生が少ない中、同じ立場の学生と繋がることができたのも良かったです。自分の受験する自治体が使っている教育ソフトウェアについてなど考えたことが無く、おそらく使い方も分からないので事前に手に入れられる情報はあらゆる手段を使って手に入れようと思います。また、私が志望している情報科では過去問がまとめられた出版物が存在していないため、地道に過去問を手に入れていく必要があると気づかされました。ありがとうございました。

現代社会学部社会システム学科 3 年次

教職課程研究会に参加し、1 日目は基本知識を学び 2 日目は実践演習をしました。1 日目は教員採用

試験の傾向、面接の基本ルール、集団討論について知ることができたのが良かったです。ホームページを見てもたくさんの情報があるので、必要な情報を読み取れているか不安でしたが、倍率や採用試験の仕組みが整理されていて気になる情報を知ることができました。2 日目は集団面接と集団討論を初めて練習し、いつも一對一の面接練習しかしていなかったのがよい経験になりました。その後の合格された先輩方への質問会がとても参考になり、おすすめの参考書や本番の雰囲気を知れたことが良かったです。先生も先輩も気さくに答えてくださり教員採用試験に向けて改めて頑張ろうと思いました。

現代社会学部現代こども学科 3 年次

教職課程研究会に参加して、教員採用試験までに残された日々をどのように過ごしていくべきか改めて認識させられた。印象的だったことは二つある。一つは、筆記試験以外の面接や集団討論、論作文などの試験についての講義である。今まで、筆記試験については自分でも勉強したり、授業で説明を受けたりしたことがあり、どのような対策が必要か知っている部分は多かった。その中でも、漠然としたイメージしか持っていなかった面接試験や論作文試験についての基礎知識を、講義を通して身につけることができたように感じる。また、今の学校現場での動向や、教育に関連した社会の課題について、日頃から関心をもつことが重要であると考えさせられた。

次に、集団討論・集団面接の演習である。2 日目に少人数で実践的な面接練習をおこなうことで、どのような流れで進めていくのか、面接の中で意識すべきことは何かなど、面接練習に向けた具体的な対策方法について学ぶことができた。また、学生の質問に答えてくださる時間も設けられ、教員採用試験に対する不安や疑問が少し解消されたように思う。この 2 日間で習得したことを、約 3 カ月後に迫った教員採用試験の対策にいかしていきたい。

2 日間参加させていただきました。

教員採用試験の実態や、面接、小論文等への対策だけではなく、実際にそれを演習で体験することができ、改めて教員採用試験に対する気持ちを高めることができました。面接等は、自問自答して答えを考えていてもなかなか力にはならず、緊張感も感じることはできません。しかし、教職課程センターの先生方に直接ご指導いただけたことで、緊張感のある中でどのように頭を働かせれば良いか、自分に足りない部分はどこにあるかを考えることができました。私の受験希望自治体の一次試験まではあと 4 カ月です。この 2 日間で見えた課題を乗り越えて、自信を持って試験に向かえるように頑張ります。ありがとうございました。

表象文化学部英語英文学科 2 年次

教職課程研究会に参加して特に良かったと思うことは、集団面接・討論の練習ができたことです。先生方からのアドバイスでは自分の話し方の癖やもっと改善すべき多くのポイントに気づくことができました。面接や討論の練習は初めてで正直上手く話せたことはあまりなかったですが、まずは教職における集団面接や討論がどのようなものなのかを知ることができたのが大きな成長だと感じております。内容やポイントを知れたからこそ、どのような練習をすれば良いかが明確になりました。また私は 2 年次生での参加だったのですが、教職課程研究会では面接や討論の練習を既にされている 3 年次生の先輩方が多かったので、その先輩方と面接や討論を一緒に受けることで、参考にしたい答え方や内容を学ぶことができました。先輩方や同期の姿を見て非常に刺激を受けるとともに、自分も頑張ろうと改めて感じました。

今年度の夏期にも参加する予定で申し込みしていたものの、体調不良により参加できず、研究会に参加するのは今回が初めてでした。長時間にもわたるプログラムに「わざわざ京田辺キャンパスまで行ってこんなに長い時間何をするのか」という気持ちが少しありましたが実際に 2 日間を終えて、想定以上に時間が経つのが早く驚きました。特に面接や討論の演習は普段関わることのない、はじめましての人と行ったので学内での練習でも緊張感をもって取り組みました。講評で「こうしたらもっと良くなる」という改善提案もしていただいたので練習を重ねていくたびにレベルアップしていけたらいいと思いました。日頃の授業でも言われていたことにはなりますが、常にアンテナを高く張って最新の情報に注目すること、一人で取り組むのではなく仲間と助け合いながらやっていくことの重要性などを改めて感じました。同じ内容を学ぶにしても、時期がすごく大切で、試験当日まで 100 日ほどという時期になったからこそ自分事として捉えられるようになったと思うし、授業で学習したことを再度講義で聴くと「分かる！」という安心感や自信に繋がることも実感しました。先輩方のお話も聞けたし、先生方にも気にかけていただいて「これはもう合格するしかない」という気持ちになりました。参加して良かったです。

大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）

教職の過去と現状の見方・考え方から現在の教育、教員採用試験に関する情報を得る方法を学び、集団討論と集団・個人面接の演習も体験した充実の 2 日間でした。私の周りには教員採用試験を受ける友達がいなかったため、今回一人で参加しました。とても緊張していましたが、同じ自治体を受験する方に出会い、夏に行われた研究会で知り合った方とも再会することができ、同志社女子大学の中にも教員採

用試験を受ける仲間がいる心強さを感じました。様々なプログラムがありましたが、特に集団面接などの演習のときには、周りの意見に圧倒され、準備不足であることを痛感しました。

研究会の最後には、来年度から教師として働かれ

る先輩方のお話も聞くことができ、勉強方法や教員採用試験を受けたときの状況も教えていただきました。数カ月後に迎える教員採用試験に向けて、より一層気持ちが引き締まりました。



事前申込制

2023年度 春期集中教職課程 研究会

2024年 3月 11日(月)10:00-16:10
12日(火)10:00-15:00

場所:京田辺キャンパス ラーニング・コモンズ

対象:本学 在学生

内容:教員採用試験の基礎知識や対策について

詳細:教職課程センター所属の教員が、教員採用試験の動向や対策について講義を行います。グループワークや卒業生への質問機会を設けた、実践的な内容です。

参加希望者は、➡のQRコードより
詳細を確認し、申し込むこと。

締切:2/29(木) 17:00



同志社女子大学 教職課程センター

6. 教職課程オリエンテーション

担当：教職課程センター

大黒 孝文・佐藤 光友

実施日時：2023 年 7 月 19 日（水）15：00～16：00

会 場：今出川キャンパス 純正館 S301

京田辺キャンパス 知徳館 C281

目 的：入学して間もない 1 年次生を対象に、教職全般のイントロダクションという位置づけで、教員の仕事内容や教員採用試験等、本学の教職課程についての概要を説明することで教職に興味・関心を持たせる。

参 加 者：教員免許取得を希望する 1 年次生 約 50 名（今出川）

約 20 名（京田辺）

プログラム：

主 題：これから教職科目を履修するひとのために

ねらい：教員免許取得のための内容と方法を説明することができる

- ・はじめに
- ・教師の仕事とは
- ・教員採用試験について
- ・教職課程センターについて
- ・教職課程履修について（免許・資格課担当者より説明）

〈参加者の感想〉

学芸学部メディア創造学科 1 年次

教職課程について詳しく知ることができ、教員免許取得までの道のりが見えました。説明を聞いてかなり大変そうだなと感じましたが、取得に向けて頑張ろうと思います。ありがとうございました。

表象文化学部英語英文学科 1 年次

教員採用試験の早期化を初めて知りました。ま

た、ディスカッションは就職活動のイメージでしたが、教員採用試験でも取り入れられているとも知りました。私は大人数で話すのが苦手なので不安に思いましたが、支援の取り組みがあると知り、安心しました。

表象文化学部日本語日本文学科 1 年次

教職課程という漠然としたものが少し明確になった気がします。1 年次生のうちに何ができるのか分かりませんでした。オリエンテーションを受けて学校ボランティア探しなど積極的に行動してみようと思います。

外部のプログラムで小学校教員免許も取れることを知ったので、活用していくことを視野に入れたいと思った。教員採用試験を 3 年次生から受けられるようになる早期化に対応できるよう、早めの対策をしていきたい。

教員採用試験の早期化があることを初めて知り驚いた。大学では、教職課程に対して多くのサポートがされていることを知り安心した。私は、まだ 100 % 取りたいというわけではないので、登録等に遅れないようにしっかりと考えたいと思った。

7. 教職課程説明会

担当：教職課程センター

大黒 孝文・佐藤 光友

実施日時：2023 年12月13日（水）15：00～16：00 京田辺

2023 年12月20日（水）15：00～16：00 今出川

会場：京田辺キャンパス 知徳館 C283

今出川キャンパス 純正館 S302

目的：教員免許取得を希望する1年次生を対象に、教員免許取得の内容と方法、及び教職の仕事内容や教員採用試験の現状について説明を行うことで、教職課程履修の目的意識を持たせる。

参加者：教員免許取得を希望する1年次生 約30名（京田辺）

約60名（今出川）

プログラム：

主 題：教職をめざすひとのために

ねらい：教員免許取得のための内容と方法を説明することができ、教員採用試験への取り組みについて理解できる

- ・はじめに
- ・教職について
- ・これからの教員採用試験の動向について
- ・教職課程センターについて
- ・教員免許取得の内容と方法（履修内容と方法）

〈参加者の感想〉

現代社会学部社会システム学科1年次

現代社会学部社会システム学科1年次

今回の説明会で、自分が理解できていなかった所を詳しく説明してくださったので、理解することができました。また履修登録など分からない場合があったら、免許・資格課に聞きに行こうと思いました。

教職課程の履修に不安がありましたが、詳しく説明していただいて、概要も理解できました。

また、詳しく相談したい時があれば、免許・資格課に伺わせていただきます。本日はありがとうございました。

看護学部看護学科1年次

どのように履修登録を行えば良いのかがよく分か

り、不安が軽減されました。また、学生ボランティアにも参加してみようと思いました。

表象文化学部日本語日本文学科 1 年次

今回の説明会で、教職課程センターでは様々な情報を得られるということが分かりました。また、教員採用試験の受験日が早くなっているということと、3 年次生で受験が可能になっているということを知り、まだ 1 年次生だから大丈夫と思っているのではなく、今のうちから早めに情報を手に入れて、試験対策をしておくことが大切だと改めて実感しました。ホームページとマナビーを定期的に確認しようと思います。

表象文化学部日本語日本文学科 1 年次

教職課程を履修するときは、早め早めの準備が何より重要であることを知った。3 年次生から教員採用試験を受験できる機会も増えてきているので、自分から情報をキャッチしていこうと感じた。

生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 1 年次

教職課程の履修はまだ先の話だというイメージが

ありましたが、受験時期が早まり、内容の重さを考えて、もうすぐ準備が始まるということを知って現実味が増しました。ただでさえ忙しい管理栄養士専攻で教職関係の科目も履修するのだと考えると気が遠くなりますが頑張ろうと思いました。

生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 1 年次

まだ教職課程を履修するか否かという所は決められていないのですが、教員免許を取得するためにはどうすれば良いのか、ということが分かって良かったです。しかし、思いのほか履修する必要のある単位数が多く、自分の能力では管理栄養士の資格取得をめざすのと並行して行うのは難しそうだなとも感じました。また、地元に戻って教員採用試験を受験する場合、1 次試験の日時が早くなっているようで驚きました。

生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 1 年次

3 年次生で教員採用試験が受けられる所があると知って、出身県も受けられるのでチャンスが 2 回あると知ることができました。教職のために履修しないといけない科目が結構あって、大変だと思うけど頑張りたいなと思いました。

8. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科 2024 年度入試特別推薦説明会

担当：教職課程センター

水本 徳明

実施日時：2023 年 5 月 24 日（水）15：00～16：00

開催方式：オンライン

概 要：

京都教育大学大学院連合教職実践研究科の 2024 年度入試特別推薦に関する説明を行った。

まず、連合教職実践研究科の目的、組織、教育課程、修了後の進路等について説明を行った。

次いで、三角免許・資格課長より、特別推薦制度の概要、手続き、日程等について説明を行った。

その後、本学出身の在籍院生より、連合教職実践研究科での学修と大学院生活について説明を行った。

引き続き、参加者との間で質疑応答を行った。

参 加 者：5 名

第2部

各学科教職担当者よりの特別寄稿

「特別支援教育を学ぶ意義」

勝浦 眞仁（現代社会学部現代こども学科准教授）

「教職をめざす皆さんへ」

藤本 純子（生活科学部人間生活学科教授）

特別支援教育を学ぶ意義

現代社会学部現代こども学科准教授

勝浦 眞仁

教職に就くうえで、特別支援教育を学ぶことは必要不可欠な時代となっています。

2022 年 12 月に文部科学省から「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」が公表されました。公立小中学校の通常学級に在籍する児童・生徒のうち、発達障害に近い状態像があると教師が判断する子どもの割合が 8.8% であることが報告されました。

学年別の結果によると、小学校で 10.4%、中学校で 5.6% の割合で特別な教育的支援が必要とされており、学年が進むごとに割合が下がっていく傾向が見られました。特に小学 1 年生から 3 年生までは 12% 前後の数値を示しており、特別な教育的支援の必要性の高い児童が潜在的に多くいるといえます。

割合が増加した要因について、発達障害のある児童・生徒が増えているのではなく、教師や保護者の発達障害への理解が進み、その特性をもつ児童・生徒に気づきやすくなった結果であるとされています。今まで見過ごされてきた学校生活に様々な困難のある子どもたちにより目を向けられるようになってきました。

しかし、教育的支援の必要性が高いとされる 8.8% の小中学生のうち、「校内委員会」で、特別な支援が必要と判断されたのは 28.7% であることも報告されました。この結果を裏返せば、校内で支援の検討自体されていない児童生徒が約 7 割もあり、チーム学校として組織的、計画的に校内支援体制が構築されているわけではない現状も浮かび上がってきます。その背景には、特別支援教育の知識がある教員が少ない現状があります。

いま、教職をめざしている皆さんも、特別な教育的支援の必要な子どもにいつかどこかで必ず出会うことでしょう。そのときには、これまで学んできた

知識や経験を活かして関わっていくこととなります。それが上手くいくこともあれば、コミュニケーションをとることが難しいと感じる子どもと出会うこともあるでしょう。このときに忘れてほしくないのは、その子自身も皆さんとコミュニケーションを取るのに難しさを感じているということです。

例えば、構音の問題があり、言葉をしゃべるのが苦手な子どもがいたとしましょう。発音が不明瞭なために、「言語障がい」というレッテルをその子に社会や大人はつけたがります。そこには正常範囲から「劣る」というニュアンスが含まれています。しかし、子どもの側の視点に立てば、聴き取ってくれないのは周囲の人の方であり、こちら側が「聴き取り障がい」を持っているともいえるのです。

このようにお互いを理解しづらい状況が生まれているときであっても、あなたを分かりたい・関わっていきたいという思いを持ち続けている教師に子どもは徐々に心を開いてくれるのだと思います。先の例でいえば、その子の言おうとしていることを想像したり、その子の気持ちを確かめたりなどして、共有・共感する体験が生まれてきます。その体験を通して、子どもに身近な他者に対する信頼感が生まれてくると考えられます。そして、身近な他者に信頼されているという実感と経験があるからこそ、子どもが自分自身を信じる力も育っていきます。これは障がいのある、なしにかかわらず、育っていく自己肯定感といえます。

子どもに対して、「あなたを理解したい」という思いを教師が持ち続けること。これは言葉で言うほど簡単なことではありません。しかし、障がいのある子どもの姿から、あれやこれやと想像を働かせて、その子を理解していこうとしているうちに、私たち自身の子ども理解の視野も広がっていきます。そこでは、その子の育ってきたこれまでの歴史や、

育ててきた保護者・家族の思い、文化や社会から受けてきた影響を知ることもあり、私たちの生き方を問い直すことにもつながっていきます。このように

私たち自身を問い直す学びが特別支援教育にはあるのです。

特別寄稿②

教職をめざす皆さんへ

生活科学部人間生活学科教授
藤本 純子

皆さんは、なぜ教職課程を履修しようと思われましたか？

私が所属する生活科学部人間生活学科の教職課程を履修する学生にそう問いかけると、「家庭科の授業が好きだったから。」という回答が多く寄せられます。生活科学部では、好きだった「家庭」の教員免許状を取得することができますが、中学校・高等学校で学んできた「家庭」の授業の詳細は学校によって様々で科目の印象も異なるようです。例えば「衣」分野の授業を思い出して書き出してもらうと、衣料品の取り扱い表示、衣服素材の種類や特性、衣服の役割などの講義もあれば、洋服のカラーコーディネート、洗剤を用いた洗濯実験、リペアやリメイク、布玩具やショートパンツの製作などの実習、学校行事と結びつけたハッピードレスの製作…等々、実に多岐にわたります。さらに中学校・高等学校の「家庭」では、衣だけでなく、食、住、子ども、高齢者、環境、家庭経済など日々の生活と直接的に結びつく幅広い領域が扱われます。

教職課程の山場とも言える教育実習が近づいてきた学生にとっては、受け持つ授業の範囲が大きな関心事となります。それまでの授業や生活を通して得てきた知識量や経験値が分野によって異なることもあり、例年、少しでも早く担当単元を知って実習に備えたいと気を揉む姿を目にします。その後、教育実習を終えた学生たちからはバラエティに富む体験談が語られ、教育の場で活かせるヒントを共有することができます。教科に関するものもありますが、むしろ、生徒や教師、学校を取り巻く環境の話題で盛り上がります。教育実習の前には「家庭」の教科

に対する興味が強く、知識や技術をいかに生徒に伝えるかということに専ら関心が向いていたように思えます。もちろんそれも重要なことなのですが、教師それぞれの授業や学級運営、生徒との接し方などに対する視点や価値観に直接触れる教育現場での実習を通して、生徒の立場では見えなかった様々な気づきを得て教職に対する思考が一段と深まるように感じています。以下に、この数年の教育実習後の振り返りの際に報告された「先生方の言葉」のいくつかをご紹介します。

「まずは声」

特に授業で大切なことは「声」なのだそう。声の大きさや抑揚、話し方で生徒の興味は変わる。教材のみに頼らず、まずは自身を磨いて生徒を惹きつけることが大切。

「教師は10を知って3を伝えるもの」

ただ教科書を教えるだけでなく、教科書に付加価値をつけてこそ授業。教科書を教えるのではなく、教科書で教える。そのためにはたくさんの知識を持っていなければいけない。そして、生徒の立場に立ち、教える項目を取捨選択することも大切なこと。多くのことを知り考えながらも押し付けたり、ひけらかしたりせず、必要になった際に必要な知識や知恵を差し出せるようにしたい。

「授業内容に関心を持つことはとても大切だけど、生徒に関心を持つことはもっと大切」

生徒はそれぞれ個性があるため、関心を持って接

していかないとそれに気づくことができず、何もうまく伝えられない。

「とりあえずやってみて、やってみないと分からないことがたくさんある」

あれこれ悩んでばかりでは始まらない。計画・準備してやってみて、その場の状況を察知し、計画にこだわりすぎず、機転を利かせて、少しずつ変える柔軟さが必要。

「ほかの仕事を選んだら楽ってわけでもないだろう。しんどいこともあるけど、それを上回る楽しさがある」

学校の先生は大変だという話をよく聞くけれど、きっとどんな仕事に就いても大変なことはあるは

ず。自身も楽しんで授業をしたい。

「もっとこうすればよかったと終わって思えるなら成長できる」

失敗は、それを乗り越えて成長することができる機会ということでもある。教師として立派に見えるのは、成功し続けているからではなく、失敗も含めた経験の豊富さがあるからだろう。

これらの言葉には、教員はもちろんのこと、社会人にとって意識したい要素が含まれているのではないのでしょうか。教職に関わる学びをこれからの社会を担うひとりの人としての成長の糧とし、魅力ある教師としての活躍につなげてほしいと願います。

第 3 部

教職に関する研究報告、実践報告、
論説、書評など

授業における学び／読書

佐藤 光友（教職課程センター特別任用教授）

授業における学び／読書

教職課程センター特別任用教授
佐藤 光友

自らの経験から緋いてみても、高等学校の生徒のときに学んだ小説家や思想家のことが今でも深く印象に残っており、自己の人生においても何らかの礎になっているように思われる。当時の国語の先生が作家希望であったこともあり、先生は、漱石や梶井基次郎の小説に触れながら、その文体や意味内容を丁寧に緋いていた授業のことを思い出す。今日においても、やはり、小説など学校の授業で紹介され、小説全体を教科書は網羅できないが、その小説の肝にあたることを知ることができ、そこから通学途上などで漱石なら漱石の作品全体を読むきっかけとなっていると思われる。私自身、大学生になってからも、京都での学生生活であったので、寺町通を歩いているときなどに授業で読んだ、梶井基次郎の『檸檬』の世界をなんとはなしに実感できたことを思い出す。やはり、この作家の作品も高等学校時代に知った小説の一つであった。もちろん、基次郎のころの寺町通とは趣が異なっているであろうが、時代が変わっても、小説の世界から、なんとなくその雰囲気味わうことができたように思われる。私自身、高校での国語の授業の影響もあり、小説というものにたいへん関心をもっていたし、文学を大学で専攻してもいいかなと思っていたくらいである。また、イギリス文学を専攻していたという、英語の先生の影響で、ジョイスの『ユリシーズ』を知り、その本は、原書も難解なのだが、翻訳も原書の表現を損なわないように、たいへんよく訳されていて、独特のジョイスの言葉遣いに感銘を受けたことを思い出す。英語の授業の学びから海外の作家のことを知り、自分でも、夏休みなどを使って、ジョイスに影響された伊藤整の『鳴海仙吉』などもかじってみたりした。これらの読書もまた、授業をきっかけとして、高校生のときに緋かなかたら大学に入学して

からもさほど関心を持たなかったかもしれない。

自らの高等学校時代に、やはり、思想家たちについて学んだのは、「倫理社会」という科目であった。この倫理社会を担当していた先生の授業も抜群に面白く、プラトンの『ソクラテスの弁明』や、ロックの『人間悟性論』、ルソーの『人間不平等起源論』、はたまた、サルトルの『実存主義とは何か』やハイデガーの『存在と時間』など、様々な哲学者、思想家のことを学んだ。そのときの授業がなければ、哲学を勉強しようと思うことはなかったかもしれない。ソクラテスの無知の知という考え方にしても、今までの日常生活では発想できない考え方だと感じたのを今でも思い出す。私が習ったこの科目は、現在は「倫理」という科目に引き継がれていると思われる。高校生の多感な時期に、多様なものの考え方を身につけることが大切であり、そのためにもいろいろな思想家の考え方に触れて、自らの感性と悟性を研ぎ澄ます必要がある。そのためにも授業で触発された思想や考え方を起点として、さらに各々の思想家の書物に触れていくことが大切であるように思われる。

日本を代表する哲学者、西田幾多郎の『善の研究』を高校生のときに読んだとき、こんな難しい書物があるのかと驚いた。高校生にとって、西田の文体はあまりにも難解である。しかし、難解であるがゆえに、こんな日本語があるのかと驚愕して、よし、少しでも分かるまで読んでみようという気にさせられたのも事実である。その岩波文庫は今でも手元にあるが、今読んでも、とても真似することのできない文体や表現力にあふれている。また、私自身、西田の弟子でもある三木清の『人生論ノート』などもむさぼり読んだ。授業で一人の思想家について学ぶ、そうすると、図書館で習った人物のことに

ついて調べる。一人の思想家からどんどん枝葉が分かれて多くの思想家について知り、また、別の思想家へと好奇心の赴くままに読み進める。このような授業のサイクルは、今でも、総合的な学習・探究の時間を使ってできるであろう。このような知識の身につけ方によって、私たちは、ひょんなときに、その思想家が思い出されて自らの人生が愉しく愉快になるのではないか。そういう経験を高校生のことには、まさに、ライフサイクルの軌道をよくすることにも役立つように思われる。

先日、電車に乗っていたら、その車両だけかもしれないが、スマホ全盛の時代に、5、6人の人たちが真剣に読書をしていた。資格を取るための読書あり、歴史書など所謂、教養書のたぐいのものを熱心に読んでいた人もいた。この人たちが、どれだけ学校時代に読書によって知識を身につけたのかは知る由もないが、生徒時代・学生時代の読書が礎になっているのではないだろうか。少なくとも、電車での読書の姿勢は、そのときに培われたのではないだろ

うか。さて、教職をめざす皆さんも、教職に就くことが決まった皆さんも、教壇に立つ折に機会あるごとに、読書の楽しみを児童・生徒に伝えて、また、教員自らが、読書することを忘れず、自分の教え子たちにも読書することの大切さを伝えてほしいと思う。例えば、自分の学級に、学級文庫をつくり、かつて自分が影響を受けた読書を並べてみるのもいいのではないだろうか。朝の5分間を利用して、学級で読書する習慣を身につけることや、総合的な学習の時間などを使って、児童生徒自らが影響を受けた好きな本を挙げて、ビブリオバトルなどをもっといいのではないだろうか。もちろんこのバトルには、先生も参加して、クラス全体に読書の輪、教養の輪が広がっていくことを期待したい。生徒時代・学生時代に、授業で学んだ人物の考え方・感じ方を知り、偉人たちの知、まさに、リベラルアーツ、その教養を身につけ、人生の幅を広げてくれる読書は、これからも普遍的なスタイルなのではないだろうか。

第 4 部

在学生、卒業生からの寄稿

1. 教育実習・保育実習を終えて

教育実習を終えて

学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次

私は今年度、母校の小学校で 2 週間、中学校で 3 週間の教育実習をそれぞれ行いました。実習が始まるまでは、実習生がどちらも私 1 人ということもあり、自分が教員として児童生徒と過ごすことができるか不安を感じていました。しかし、児童生徒や先生方に支えられ、無事に実習を終えることができました。実習期間はあっという間で毎日が充実していました。

中学校では、1 年生を担当していました。初めての实習ということもあって、初日はすごく緊張しました。実習 2 日目から授業を行う機会をいただき、2 年生の音楽の授業 1 回と配属クラスの音楽の授業と道徳の授業を担当しました。授業では、模擬授業で上手くいく部分があっても、現場では通用しないこともあり苦戦しました。しかし、日々授業を行うことや先生方の授業を見学することによって、自分の課題を明確にすることができ、もっと上手く授業ができるようになりたいと思うようになりました。また、授業だけではなく学級の業務を行うことや、部活動で生徒と関わることで信頼関係を築くことができました。

小学校では、5 年生を担当していました。実習が始まるまでは、小学校教員が向いているか不安を感じていました。国語、社会、道徳、音楽で授業を行い、評価授業は音楽で行いました。中学校で実習を先に行っていたので、少し余裕を持って授業を行うことができたものの、児童が理解できるような説明の仕方や、発問の設定など新たな課題も見つかりました。また、小学校では基本的に担任の先生が教科指導を行うため、それぞれの教科に関する知識を幅広く持つておかなければいけないことを痛感しました。しかし、児童の笑顔や授業に真剣に取り組む姿

勢を見て、常に責任感を持ち、児童と向き合うことの大切さを感じました。

教育実習を通して教師になりたいという気持ちが強くなると同時に、自分自身の成長を日々感じるようになりました。このように思うようになったのは、指導して下さった先生方や、支えてくれた児童生徒のおかげだと感じています。私は、春から教職大学院に進学します。進学という決意をしたのは教育実習での経験や、進学するか非常勤講師として働くか迷った時に指導教諭の先生が背中を押して下さったことで、決意しました。同志社女子大学で学んだことを生かして、教職大学院での勉強に励み、教員として現場に立つという目標を実現したいと思います。

教育実習を終えて

現代社会学部現代こども学科 3 年次

私は、母校である小学校で、1 カ月間教育実習をさせていただきました。不安や心配な気持ちをもつことも何度かありましたが、指導教諭の先生をはじめ多くの先生方や他の実習生に支えていただき、やりきることができました。教育実習で感じたことは大きく分けて 3 つあります。

まず 1 つ目は、授業づくりとその実行の難しさです。子どもたちにどういうことを学ばせたいのか、そのためにはどのような活動や発問が必要なのかを考えながら指導案を作成しますが、実際に指導案通りに授業を進めたとしても全てが上手くいくわけではないということを痛感しました。実際に授業をして上手くいかなかったところ、どのように改善していくことが必要なのか、自分の授業を振り返ることの大切さを学びました。さまざまな状況に臨機応変に対応できるようにするためにも、幅広い知識と経験を身につけておくことが大切であるということも

感じました。教師としてのレベルを向上させることが子どもたちの学びの深さや質にも影響していくと考えるため、子どもたちだけでなく、教師自身も常に学び続けることの重要性に気づくことができました。

2つ目は、失敗を恐れず挑戦してみるということです。大学の授業で模擬授業をし、教科指導を学んでいたとはいえ、実際に学校の現場で教師という立場で子どもたちや先生方と関わるのは初めての経験だったため、間違えたらどうしよう、失敗したら迷惑がかかると考えがちでした。しかし、何事もやってみないことにはどうなるかなんて誰も分からない、思い切って挑戦してみたからこそ学ぶことが多くあるということを感じました。自分から積極的に児童とコミュニケーションをとったり、授業の中で予定とは違う発問や活動に変えてみたり……。とにかく少し勇気を出して、新しいことへ踏み込んでみることの大切さを感じました。

最後に3つ目は、“教師”という職のやりがいや素晴らしさです。実際に学校という現場で先生として1カ月間子どもたちと関わることを通して、子どもたちの日々の様子やちょっとした変化に寄り添い、信頼関係が少しずつ生まれていく中で子どもっておもしろいと感じることが何度もありました。また、実習終わりがらに「先生の授業分かりやすかった！楽しかったです。」と伝えてくれた児童がいました。この経験から、自分自身が本気で向き合い、目の前の子と本気で関われば、それは児童から素直に返ってくるものだということが子どもたちが私に気づかせてくれました。

“教師”という職は決して楽しいという面だけではないと思います。仕事量も多く、体力もいる大変な仕事であるという見方も否定はできません。しかし、この実習を通して、子どもたちとの関わりの中で生まれる教師という職のやりがいや楽しさ、教師の深さについて実際に身に感じて学ぶことができ、“教師”という仕事の魅力を強く感じました。教育実習での経験を活かし、これからも日々成長できるように努めたいです。

教師の働きと児童

現代社会学部現代こども学科3年次

私は大阪市内の小学校で教育実習をさせていただきました。小学校内にある学童でアルバイトをしており、顔見知りのいる中での実習となりました。緊張しがちな私は実習初日の児童集会での挨拶の際、心臓の高鳴りがやみませんでした。「あ、荒木先生だ！」と一番前にいた1年生が名前を呼んでくれ、続いて様々な場所から名前を呼ぶ声が聞こえ、少し笑顔が戻り無事に挨拶をすることができました。

その後1カ月にのぼる実習では多くの学びがありました。中でも実際に体験してこそ深めることができた学びは、「教師の配慮の深さと細かな仕事が多いこと、児童と教師が互いに支え合うことの大切さ」です。

担当学級が1年生ということもあり、朝の児童の迎え方や先生の立ち位置、休んだ児童へのプリントの渡し方など様々な場面で深い配慮がみられました。板書や配膳、休み時間の外遊びなど様々な観点で指導・支援が必要でした。また授業内での発問や児童の興味の持たせ方など細かい工夫が行われており、言葉の大切さも学ぶことができました。

しかし、35名在籍していたためノートや宿題をチェックするのも膨大な量であり、授業で使うものの下準備や環境整備など何をするにしても時間がかかりました。朝登校してから児童が帰るまで給食の5分だけ座ることができる、放課後は運動会の準備などをし、家に帰って指導案作成や授業準備をするという日々でしたが、そんな日々を支えてくれたのは紛れもなく児童の温かい声と真っ直ぐな瞳でした。児童は積極的に先生のお手伝いをして先生のためにと動く姿が見られ、本当に多忙な中で先生方が放課後、児童の成長した姿を笑顔で共有していることも先生が児童に支えられている証だと思われました。

実習を通して、見えないところでも児童のために細かな配慮をして働きつつ、児童との信頼関係の中で互いに支え合いながら、共に成長していく姿勢をもった教師になりたいと強く思われました。

教育実習を終えて

現代社会学部現代こども学科3年次

教育実習は有意義で生活が豊かになった経験でした。

実習校の先生方・児童からは1人の先生として見られ、自分の意見が求められることが多くありました。そしてたくさんの人と関わる中、人として成長できました。

実習では1人の先生として児童に教える機会があり、自分で指導案を作りどのような声掛けをするか、どうすれば興味を持ってくれるか考えることが多くありました。その中で先生に相談する際は自分がどのように授業を行いたいのか、どんなことを児童に伝えたいかを考えていました。そうすることで先生に、私がどんな思いを持って取り組んでいるかが伝わり、親身にどう改善すべきかアドバイスをいただけました。自分自身の意見を直接大人の人に伝える経験は貴重で先生と対話することによって新たな価値観や発見を得ることができました。

また児童と接する際は、素直なかわいい一面もありつつ、日々変動が起きる学校現場では多くの学びがありました。朝に「旭先生おはようございます！」と体を向けてまっすぐ目を見て挨拶してくれる児童や、発表で当ててもらえず、泣いてしまう子。

そして児童は大人が思っている以上の発想力とアイデアがあり授業中は児童の発言に授業の進め方のヒントが隠されていると感じました。例えば、私の算数の授業では教科書にはないような発展的なおきさくらべの方法を思いつく子がたくさんいました。そんな中で、「分かりやすく！」と言っている

子がいて、それをヒントに分かりやすい方法は何かな？と発問を変えることができ一緒に授業をつくっている実感がわきました。

授業づくりは最終的に行うのは自分自身で、授業中も児童の発言によって変わる可能性があることから自分で判断し、授業を進めることや、児童とのかわりの中で何を注意して何がダメか先生として判断することがありました。

このように自分で決断し、考えていること・想いを表現し、児童と関わる中で自分と向き合う素晴らしい機会になりました。

幼稚園実習を振り返って

現代社会学部現代こども学科3年次

私立の幼稚園で4歳児クラスを担当しました。幼稚園実習を通して一番苦戦したことは、子どもの気持ちの切り替え方です。実習生として保育に参加していると、子どもは新しい先生が来た嬉しさから甘えてくる事がよくありました。

保育者の方が話そうとしているのに子どもが私の足にしがみついて離れない、などといった場面がよく見られました。初めのうちは私自身も子どもの気持ちを優先してしまい、その様子を見て他の子どもたちも集まってくるという状況が生まれ、「席に戻ろうね！」と声掛けをしてもなかなか聞いてもらえませんでした。その際、保育者の方に相談すると子どもの気持ちを無視して注意をするのではなく、話したい気持ちを受け止めつつ「今は〇〇する時間だから席に戻ろうね」と今は何をやる時間なのかを伝えることが大切なのだと教えていただきました。その後、実際に時計の針に注目を向けたり、周りの子どもの様子に触れながら言葉掛けをしたりと時間をかけて実践していく中で、子どもも理解して自然に活動に移ることができるようになりました。

この幼稚園実習全体を通して、子どもの成長と保育者の関わりは密接に関係しており、一人ひとりの

性格や特徴を理解した上で関わることが大切であることを学びました。給食時に、子どもが苦手なものを食べることができた時にはたくさん褒めてクラス全体で祝福したり、鍵盤やひらがなの練習が上手くできない子どもには「大丈夫！できるよ！」と子どものやる気を引き出す言葉掛けをしたりと、日々の関わりの中で子どもの気持ちに寄り添い、個々に合った言葉掛けや援助をすることで子どもの自信や成長に繋がっていくのだと感じました。また、様々な学習を行う中でクラスの雰囲気が盛り上がってしまった時や、揉め事が起こった時などには、子どもにどうしたら解決できるのかを問いかけるなどして、保育者と子どもの関わりの中で子どもが自ら考え成長していけるよう援助することが大切なのだと学ぶ事ができました。

かけがえのない4週間

現代社会学部現代こども学科3年次

私は大阪府吹田市で4週間、小学校実習を行いました。4週間と聞くと、とても長く感じ、子どもたちとうまく打ち解けることができるのか、きちんと授業ができるのかと不安でたまりませんでした。一方で、どんな子ども達がいるのだろうというわくわく感と、一緒に勉強して遊ぶことの楽しみもあり、不安と期待が混ざり合った中で私の実習が始まりました。

私は3年1組のクラスが担当でした。初日、教室に入るとキラキラした笑顔で子どもたちが迎えてくれ、気づけば緊張は無くなっていました。たくさん話しかけて来てくれる子以外にも何とかして全員の名前を覚えようと必死に1人ずつ話しかけに行きました。そのおかげで3日目には全員の名前を覚えることができました。また、業間休み、お昼休みには全力で子ども達と遊びました。3年1組の子どもたちだけでなく、1~6年生の他クラス、他学年の子ども「一緒にやりたい！」「まぜて〜！」と言ってき

てくれて、気づけば30人ほどで鬼ごっこやケイドロをするという毎日を過ごしました。すると、実習クラスではないのに「土井先生だ！」「先生またおにごしようね〜！」とたくさん声をかけてくれるようになりました。

授業は2週目の半ばから実習が終わるまで毎日しました。最初は緊張しましたが、はきはきと話すことだけには自信があったので、焦らずに進めることで、担当の先生からも、子どもたちからも良い言葉をたくさん言ってもらえました。算数に国語、理科、図工、体育とたくさんの科目の授業をさせていただき、毎日授業計画と準備が大変でしたが、子どもたちが一生懸命取り組む姿を想像すると頑張ることができました。もちろん時間管理や教材の選定、声かけの仕方など、まだまだ改善すべき点もたくさんありましたが、授業をすることの楽しさを覚えました。

長いようであつという間だった4週間。しんどいことも難しいこともたくさんありましたが、何よりも子どもたちといっぱいお話して、勉強して、遊んだことが本当に楽しかったです。とても優しい子どもたち、先生方に囲まれて過ごした4週間はかけがえのない貴重な経験となりました。

“やりがい”に触れた一カ月

現代社会学部現代こども学科3年次

私は、母校である和歌山県の小学校で実習を行いました。事前オリエンテーションまでは、子どもや先生方との関係のことや授業のことについて不安な気持ちが大きかったのですが、実習担当の先生と顔合わせをして、担当クラスが3年生であることが分かってからは楽しい気持ちの方が大きくなったような気がします。

担当した3年A組の子どもたちは、「先生の授業楽しい、分かりやすい」「先生明日も授業してくれるの？」「先生一緒に遊ぼう」という言葉を毎日の

ようにかけてくれ、優しく素直で人懐っこくて、元気をもらえる存在でした。

そんな子どもたちにだからこそ、「分かりやすい授業をしたい」という気持ちが高まる反面、45分間一人で授業を行うことには不安や緊張も大きかったので、全14回の授業実践に向けて指導案作成や教材研究、授業練習等を他の実習生や先生方に協力してもらいながら行いました。いざ授業を実際に行くと、時間の流れの早さに驚くことが多かったのです。授業終わりには、先生からのフィードバックや授業中の子どもたちの様子を踏まえた振り返りをして、今日の反省点を明日に一つでも活かせるように少しずつ改善できるよう努めました。

4週間の教育実習を通して学んだことは、人間関係の重要性、子どもたちにとっての教師という存在の大きさです。実習先の職員間・職員室の雰囲気は和やかで仲良く笑顔が多いことが印象的でした。悩みや相談を職員室にいる先生同士で共有できることは、一人当たりの業務量が多い教師という仕事には大切です。また、一日の半分を一緒に過ごす先生の存在は子どもにとって大きいことが改めて分かりました。特に小学生は、思っているより先生を頼りにしているし、大好きだし、よく見ています。子どもたちに良い影響を与えられるような頼りのある先生になりたいと思いました。

子どもたちと一緒に過ごした思い出は、実習を終えた今でも心の中に強く残っています。勉強の活力にもなります。最終日にもらったプレゼントを見ると今でも勇気が出てくるので、子どもたちからの言葉や笑顔は最強だと改めて感じます。教師のやりがい、子どもの笑顔にあるのではないかと、とも思った小学校実習でした。

実習後記

現代社会学部現代こども学科3年次

私は10月、1カ月間母校の小学校で教育実習を

行いました。それまで小学校の教師にはなるつもりはなくボランティアやスクールサポーターの経験もなかったため児童と実際に関わることに不安な気持ちを持っていました。実習に行くまでは上回生の実習体験談を聞き想像だけが膨らみ、緊張し行きたくないという気持ちが大きくなるばかりでした。

事前打ち合わせで担任の先生や校長先生とお話をするときに2年生のクラスに入ると聞きました。その時点ではまだ実習に対してネガティブなイメージが大きかった記憶があります。

実際に教育実習が始まりクラスに入ると小学生のみんなは私たち教育実習生に興味津々で目をキラキラ輝かせながらこちらを見ていました。自己紹介し終わると大きな拍手で歓迎してくれました。休み時間になると一斉にクラス中の子どもたちが私を取り囲んで「先生！あそぼ！」と声をかけてくれたのを今でも覚えています。私の緊張が解けたのはこの瞬間だったのではないかと考えます。

児童との関わりだけではなく現場の先生方の教育方針や授業の工夫にも発見がありました。生徒指導のことや近年増加傾向にある不登校児童に関してなどあらゆることを担任の先生以外の先生方も学校全体を通して実習生である私に丁寧にご指導くださいました。授業はクラスに入っている2年生のみならず他学年の授業観察もさせていただき先生方の学級経営によって授業の方法が変わっていることに気がつきました。また、大学で取り組んでいるロイロノートをはじめICT教育が実際の教育現場で顕著に活用されていることに新鮮さを感じました。複雑なログインも低学年から触れさせることでどのクラスもスムーズに学習に取り入れることが可能となっていました。

実習前に不安を感じる要因であった実践授業については何も心配はいりませんでした。最初の授業はとにかく明るく元気に大きな声で子どもたちに届けるという気持ちで取り組みました。そうすることで児童の反応は良くたくさん手をあげてくれたり、発言してくれたりしました。ただ普段は大学生を相手に授業をするため作業は多めに時間を見積もることが必要であったり、低学年ゆえ一つ一つの行動の指

示が必要であったりしました。しかしその点は授業回数を重ねるごとに児童の実態や特徴に気づくことでカバーできました。

実習最終日に子どもたちはメッセージカードをプレゼントしてくれました。その中には私の授業が分かりやすかったという言葉や先生の授業で九九が早くなったよという言葉が書かれていました。習いたての漢字を一生懸命練習して書いてくれたそのメッセージカードは半年たった今も宝物です。そして不安だった実習は周りの友人に話すほど楽しく、かけがえのない思い出となりました。

教育実習を終えて

現代社会学部現代こども学科3年次

教育実習を終えて2つ学んだことがあります。1つ目は喧嘩の仲立ちの仕方です。喧嘩の仲立ちをする際には、お互いの思いを聞いてから気持ちを代弁し、お互いの気持ちを知れるように仲立ちに入るようにすることが良いということを学びました。また仲立ちをする際には、解決することを優先しすぎるのではなく、お互いが納得できるような仲立ちをすることが大切だということも学びました。仲立ちをするときにずっと側にいて関わりすぎてしまうことで話が進まない、解決しないということもあるので、関わりすぎないようにして自分たちで解決できるようにすることの大切さを学びました。

2つ目としては、目からの情報が子どもにとっては大きいということです。部分実習で製作物の見本を見せた際に、見せた見本の絵に引っ張られてしまい、同じような絵を描いている子が多くなってしまいました。反省会で子どもは目から見た情報が大きいというアドバイスをいただき、ただ単に見本を作るのではなく、視覚的な情報が子どもにとって大きいということを意識しながら、見本を作ったり絵を描いたりする必要があるということを学ぶことができました。

印象に残ったこととしては、お店屋さんごっこの準備と本番の日です。準備では販売する動物を自分たちで作り、顔をどんな顔にしようと悩んでいたりと、紙コップで作る動物でどの動物を作るか考えたりする姿を見ることができました。またポスター作りをする際に、保育者がこういう風にしてくださいと指示をしなくても、自分たちで考えて行動する姿を見ることができました。本番では店員さんになりきり、お客さんの呼び込みをしたり販売をしたり、お客さんがいない間に動物のお世話や足りていない動物を補充したりして店員さんになりきっている姿がありました。普段から人のことをよく見ているということやどの動物が足りていないのかを見て自分たちで判断して補充するなど、周りをよく見ているということに気づくことができました。

初等教育実習を振り返って

現代社会学部現代こども学科3年次

私は奈良県の公立幼稚園で4週間の初等教育実習をさせていただき、学びの多い充実した日々を送ることができました。

特に保育において大切であると実感したのは、子ども一人ひとりと丁寧に関わることです。言葉で聞くと当たり前で誰でもできることのように聞こえますが、毎日慌ただしく過ぎる時間の中で一人ひとりの子どもの小さな変化や頑張りに気づき、丁寧に向き合うことはとても難しいことだと感じました。しかし、毎日そうした関わりを続けることで少しずつ子どもは保育者との間に愛着を形成したり、信頼関係を築いたりできるようになっていきます。私自身、実習の初日は全く話もできなかった子どもとも、毎日少しずつの関わりを通して好きなことや苦手なことなどを知ったり、何かを頑張ったときにその頑張りを受け止めたりする中で信頼関係を築くことができたと感じました。

また、特別な支援を必要とする子どもも数名登園

しており、その子どもたちとの保育者の方の関わりを間近で観察させていただいたり、自分自身が関わらせていただいたりしました。同じ場所に長時間じっとしていられなかったり、他のものに興味がすぐに移ってしまったり、言葉が出づらくコミュニケーションが上手く取れなかったり、子どもによって支援の必要な場面が異なる中で、一人ひとりのできること・好きなことに焦点を当てて関わることで自信を持てるように保育を行っておられたことが印象的でした。また、自分自身が支援の必要な子どもたちと関わる中では、スキンシップや歌いかけ等の言葉以外のアプローチでの関わりの重要性を学ぶことができました。気持ちを切り替えられないときは抱きかかえて安心できるようにしたり、歌を上手く歌えない子どもに対してはリズムを一緒に体で表現したりと視点を変えた関わりをしてみると気持ちが前向きになることができました。

この4週間、保育現場での実習、日誌の記入、指導案の作成、部分・責任実習など大変なこともたくさんありましたが、毎日子どもたちの笑顔に温かい気持ちになることができ、自分の理想とする保育についての考えを深めることができました。

教育実習について

現代社会学部現代こども学科3年次

私は、大学3年次生の9月から10月にかけて母校にて約1カ月間の教育実習を行いました。私が入った学級は、高学年（5年生）の20数人の学級でしたが、今まで高学年の子どもたちと関わる機会ほとんどなく、どう接していけばいいのか分かりませんでした。そのため、実習前は、どうやって距離を縮めようか、一カ月間先生としてうまくやっていくのだろうかという不安でいっぱいでした。

しかし、実習が始まるとたくさんの不安は吹き飛ばされました。素直で元気いっぱいの子供たちは、緊張している私を温かく迎え入れてくれ、3日

もたてば、すでに学級の一員になれていました。子どもたちの受け入れるスピードの速さはすごいと驚いたのと同時にとてもうれしかったです。初日から休み時間は外でドッチボールや鬼ごっこに駆り出され、1週間は筋肉痛との戦いでしたが、そのおかげで子どもたちの顔と名前を覚え、距離を縮めることができました。

実習1週目は各学年の授業を見させていただき、子どもたちの発達段階によって異なる教師の働きかけの工夫を学ぶことができました。授業観察では、ほとんどの授業でタブレットを使用しており、グループワークなどを多く取り入れた授業が多かったです。大学で経験していた模擬授業とは、授業展開のスピードも、先生が子どもたちへかける言葉かけも全く異なっており、実際に自分の目で見ないと分からなかったことだと実感しました。さりげない教師の言葉や行動の中に子どもたちの学びにつながるしかけがあり、子どもたちの気づきとともに授業が発展していき、教師も一緒に楽しみながらつくり上げられていく授業は見ていて面白く、このワクワク感を生み出すためにはどうすればいいのだろう？と考えるきっかけにもなりました。

そして、2週間目からは体験授業が始まりました。多くの授業観察を行ってきましたが、いざ自分が授業をするとなると全くイメージがつかず、一回目の授業はとにかく指導案を教科書通りに作ることで精一杯でした。初回の授業は、時間配分もうまくできず、教科書通りに進めないといけないという意識で自分ばかりが話してしまった大失敗の授業でした。しかし、教育実習のいいところは失敗をすぐ次に活かせることです。初回の授業を終えて、何がいけなかったのか、子どもたちが分かるためにはどうすればいいのかを振り返って考え、次回の授業につなげることで何とか体験授業をこなしていくことができました。実習では、分からないことばかりであるため、分からなかったらまず自分で考え、担任の先生に聞くこと、そして、授業観察で学んだ先生方の方法を真似してみることが大切だとこの実習で学びました。

毎日の授業や行事をこなしていくうちに4週間の

実習はあっという間に終わりました。実習前は不安でいっぱいでしたが、この4週間の間、自分は教師なんだと言い聞かせ、精一杯なりきって頑張ることができて本当に良かったなと思います。この実習で、やっぱり自分は先生をめざしたいと思うことができ、憧れる教師の姿を多く学ばせていただきました。

今回の教育実習の経験を活かし、子どもたちを見守り、支え、成長を後押しできるような教師になれるよう、これからも向上心を忘れず頑張っていきたいと思います。

幼稚園実習での学び

現代社会学部現代こども学科3年次

私は京都府の私立幼稚園に実習に行きました。4週間ずっと3歳児クラスに入る予定でしたが、風邪が流行っていて初日から3日間学級閉鎖になったため、5歳児クラスに1日、4歳児クラスに2日間入りました。それ以降は予定していた3歳児クラス(28人)に入りました。9月の実習では、10月の運動会に向けて5歳児はマーチング、4歳児はパラバルーン、3歳児はダンスの練習に取り組んでいる期間でした。

部分実習は4週目に1度させていただきました。3歳児クラスで1時間、ピョンピョンがえる／うさぎの制作を行い、それを飛ばして遊ぶところまでを設定しました。事前準備として、工作用紙を2枚重ねて貼り付け、そこに輪ゴムを引っ掛ける切り込みを入れて、分かりやすいように切り込み部分に黒いペンで印を付けました。他には、かえるとうさぎの顔の型を画用紙で用意したり、飾りの折り紙を短冊状に切って子どもたちがはさみで切る位置が分かるように鉛筆で線を書いたりしました。

初めに「ぴよんぴよん跳ぶ動物って何かな？」とクイズ形式で子どもの興味を引き出し、ヒントとしてジェスチャーゲームを取り入れることで楽しく活

動できるように心がけました。また、私が入っていたクラスははさみの活動をまだ3回しかしたことがないと事前にうかがっていたため、はさみの持ち方や注意事項については実際に前で見せながら丁寧に指導しました。具体的には、敢えて間違ったはさみの使い方を示して「これ合ってる？」と問いかけることで、応答的な関わり大切にしながら、正しい使い方を意識できるように促しました。その他に意識したこととしては、進度に大きな差が出ないように工程ごとに説明→作業と区切って遅れる子どもや先に進める子どもが出ないように気をつけました。3歳児は先生に見てもらうことが大好きなので各テーブルを周って声かけをして時間を調整しました。

完成して遊ぶ活動は、まず一人で跳ばす練習、その次に同じテーブルの6人で同時に跳ばして高さ比べ、最後にクラス全員で「いっせいのーで」の掛け声に合わせて跳ばして高さ比べをするといった段階をつくることで飽きずに盛り上がってくれました。幼児は遊ぶことが大好きなので制作に時間を使いすぎず遊ぶ時間にも余裕を持っておく以案外1時間があつという間に感じられました。

部分実習ではなかったですが、朝の会、給食、帰りの会でピアノを弾いたり、帰る前の絵本の読み聞かせも10回程度ずつさせていただきました。

最後に幼稚園実習のアドバイスとしては、幼児はお喋りや体を動かすことが大好きで元気いっぱいに1日遊ぶので、実習生も万全な体調で思いっきり子どもたちと一緒に遊び込むことが最も大切かなと思います。4週間楽しく元気に頑張ってください！

4週間の実習で私が意識したこと

現代社会学部現代こども学科3年次

私は母校である奈良県の公立小学校に4週間の教育実習に行きました。2年生を担当させていただき、授業は2年生2クラスを対象に算数14回、国

語2回の計16回行いました。2年生の担当ではありましたが、全学年、全クラスの授業見学やクラブ活動、委員会活動へも参加させていただいたため、他学年との関わりも多くありました。

私がこの実習で意識していたことが2点あります。

1点目は、授業中の子どもの姿を多角的に観察するようにしたことです。小学校では、学力に差がある子どもたちが同じ教室で、同じ授業を受けるため、実際の一人ひとりの子どもの姿を意識して見るようにしました。それによって、大学の模擬授業では気づくことができなかった、新たな発見や新たな学びができました。

2点目は、先生方に授業で意識されていることを頻繁に聞くようにしたこと。先生方は、児童を当てる順番や声かけの仕方など、細かいところまで工夫をされていたことがとても印象的でありました。現場の声を生で聞くことで、自分の授業の改善点も明確になり、レベルアップに繋がったと感じます。

実習中にやっておいて良かったと思うことは、何か少しの気づきがあれば、先生がおっしゃっていた言葉と、その言葉に対して児童が発言した応えまで、細かくノートにメモをとっておくことです。印象的な場面であっても、他にやらなければいけないことが多くあるため、少し時間が経っただけでも忘れてしまうことがありました。出来事をそのときにメモをしておくことで、後から見ても状況を鮮明に思い出すことができ、自分の学びに繋げることができるので、おすすめします。

4週間は長く、指導案作成、教材研究、授業準備など大変なこともありましたが、子どもたちのパワーに毎日助けられることばかりでした。そして、教師はやりがいのある、魅力的な職業であると、実習を通して改めて感じました。ぜひこれから実習に行く後輩の皆さんには、周りとのコミュニケーションと、自分自身が楽しむことを大事にして、有意義な実習期間を過ごして欲しいと思います。

教師をめざすきっかけ

－教育実習を経て－

現代社会学部現代こども学科3年次

私は、教育実習を経て教員をめざす意志が固まりました。もともと、昔から子どもと関わるのが好きでしたが、教職には大変だというイメージがあり、自分には務まるわけがないと考えていました。しかし、大学2年次の春、ある転機が訪れました。それは、子どもとアウトドア活動を行うボランティア団体からの勧誘です。私は、自信のない自分が変わるのは今しかないという思いで、その団体に入ることを決意しました。その後、長期休暇に行われる子どもたちとのキャンプや、毎週のミーティング、作業、児童理解の研修などを経験し、やはり子どもと関わることで得られるやりがいは何にも変えられないと感じました。そして、あらためて将来のことを考え直してみると、子どもと直接関わり、成長を間近で感じられる教師という職への憧れが強くなりました。

しかし、私は子どもとの関わりは多い反面、子どもに勉強を教えるという経験がほぼありませんでした。学童や採点のアルバイトは経験したことがあるものの、教育現場における経験が全くありませんでした。そこで、私は3年次になる前の春休みに母校で短期間の学習支援ボランティアをさせていただき、3年次の6月からは教員養成サポートセミナー生として京都府で実習をさせていただきました。これらの経験のなかで、個性あふれる子どもたちや熱心に働く先生方と出会い、母校での教育実習がより楽しみなものになりました。

私は教育実習を通して、教えることを学ぶだけではなく、生きていくうえでとても大切なことも学びました。それは、貴重な経験をさせていただいているという感謝の気持ちを持つことです。当たり前のことではありますが、社会人としてのルールやマナーを改めて意識しながら、行動することは大切で

す。また、貴重な機会を無駄にしないように、積極的に学びに行く姿勢を持つことが必要だと思いました。自分は何を学びに行っているのかという目的をあらためて見つめ直し、主体的に学ぶ姿勢を持つべきだということを学びました。これらの姿勢は、教育実習だけではなく、何事においてもあてはまることだと思います。現在私は将来教師になるために、日々自分の目的を見つめ直しながら、教師力を磨いています。今後も教育実習で学んだことを無駄にしないように、全力で子どもと関わっていきたいと思います。

実習を振り返って

現代社会学部現代こども学科3年次

実習を振り返って、私は幼稚園実習で3歳児1週間、4歳児1週間、5歳児2週間とそれぞれ順番に担当させていただきました。今回の実習では低い年齢から順番に保育をしたため、各年齢の発達の違いが非常に分かりやすく、とても学びのある実習となりました。特に社会性の発達の面では、3歳児クラスでは保育者などと遊ぶことも多く、友達と遊ぶよりはおもちゃで1人で遊ぶなどの並行遊びが多く見られました。それに対して、4歳児クラスでは友達とおもちゃで一緒に遊ぶ姿が見られるようになり、5歳児クラスに入ると友達とルールのある遊びを楽しむ姿が見られました。このように、各年齢の発達を学ぶことができました。また、保育の工夫についても多くの学びがあり、3歳児クラスでは帰りの準備を楽しんでできるように、準備ができたその子どもの好きなイラストをホワイトボードに描くという工夫を実践しており、子どもたちも自分の好きな絵がホワイトボードに描かれるのを非常に楽しみにしている様子でした。4歳児クラスでは話をする際に担任の先生は椅子に座り、子どもたちと加配の先生は床に座ることで、担任の先生に注目できるような工夫がされていました。5歳児クラスではそれぞ

れの子どもの特徴を把握し、話をするタイミングを変えていました。例えば、お茶をわざとこぼした時にその場で話をするヒートアップする子どもには、落ち着いたタイミングでさっきの行動について振り返りをし、逆にその場で話をしなければ忘れてしまう子どもにはその場で話をするなど、その子どもに合った対応で接することを意識されていましたが、このような場合があることを知り、それぞれの子どものタイミングがあることを学びました。そして、子どもの特徴を把握する大切さに気づくことができました。今回の実習で学んだことを活かし、これからも理想の保育者像を胸に、努力していきたいです。

乳児院実習

現代社会学部現代こども学科3年次

10日間にわたり、乳児院での実習に行かせていただきました。実習に行く前は、施設というものについて授業では学んでいたものの、その実際を具体的にイメージすることが難しく、とても不安な気持ちを抱いていました。しかし、実習初日、実習生に対して、様々な姿を見せてくれる子どもたちと関わったことにより、どうすれば子どもたちに近づくことができるだろうかと、自然と不安な気持ちよりも、子どもたちと関わりたいという思いが強くなっていました。

実習を通して、乳児院は子どもたちにとって生活の場であることから、子どもたちが安心できる環境であるということがとても大切にされており、情緒の安定に繋げられるよう、細やかな言葉がけや、見通しの持つことができる言葉がけをたくさんされていると分かりました。さらに、子どもの思いや、発信をしっかりと受け止め、応じ、尊重する関わりが行われているということが分かりました。

ある日の昼食時、1人の子どもがどうしてもお米

を食べたくないと激しくご飯を拒否したことにより、職員の方はご飯をさげました。私はここで食事が終わるのだと思ったのですが、職員の方がパンを持って戻って来て、その子どもにパンなら食べられるかを確認して渡していました。この場面から、生活の場であるということ、職員の養育者としての在り方とは、こういうことなのかとはっとさせられました。

また、生活の場だからこそというところで、実習中に特に難しさを感じたのが、子どもに注意を行う場面でした。社会的なルールに反することや、子どもが困ることになることは注意しなければいけないのですが、家庭なら許されるラインの線引きというのがとても難しく、何が子どもにとって本当に良いことか、良い関わりかということを常に問い続け、その状況に応じて判断していく必要があるのだと学んだとともに、自分なりの基準をもっておく大切さというのを職員の方の姿から学びました。

実習を経て、乳児院について具体的なイメージを得ることができましたが、まだまだ子どもに対する学びが足りないと感じることが多くありました。そのため、これからの学びでは、もっと具体的に子どもと生活について学び考えを深め、自分なりの解釈や基準を、得られるよう学んでいきたいと思います。

「温」

現代社会学部現代こども学科 3 年次

私は公立の小学校にて 4 週間、教育実習を行いました。そこで過ごした貴重な時間を振り返ると、私は先生方からたくさんのことを学ばされたのだと心から感じています。

私は国際的なプロテスタントの教会で育ち、インターナショナルスクールに 12 年間通っていた背景を持っています。そのため、公立小学校で過ごしたのは今回の実習が初めてでした。そのようなことも

あり、私は現代の日本の学校における先生と児童との距離感に違和感を覚えていました。例えば、「名前は苗字にさんを付けて呼ばなければならない」といったものです。このような、日本の小学校に対するイメージを持ちつつ、私は新たな環境に足を踏み出しました。

しかし、緊張も束の間、実習初日の朝、私は驚きで包まれました。それは、目の前に広がっていた光景は、私が想像していたような先生と児童の希薄な関係性とは、かけ離れたものだったからです。私が担当した 5 年 1 組の担任の先生は、児童のことを下の名前で呼び、休み時間は外に出て児童と一緒に全力で遊び、叱る時にはしっかりとメリハリを付ける素敵でエネルギッシュな男性の先生でした。そのように、どんな時でも児童との多様な形でのコミュニケーションを大切にしている先生と、互いの教育観からプライベートのことまで、たくさん話す機会が与えられました。それだけではなく、全ての先生方が毎日私に話しかけに来てくれたりなどして、本当に私のことを気にかけてくださっていました。このような温かい人たちに囲まれたことで、私の実習は充実したものとなりました。

これらのことを通して、私はたくさんの学びと気づきを得ることができたとともに、自身の持っていた偏見において反省させられました。近年、デリケートな問題を抱えた児童が増えている中で、彼らに対する教師の接し方は難しくなっています。けれども、実習で関わることでできた先生方の愛ある行動や言葉がけを通して、私は児童への関わり方について、少しでも知ることができた気がしました。この感謝の気持ちと、私のこれまでの経験、そして実習で得たものをこの先も大切にしていきたいです。

私の夢

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私は同志社女子大学に入学し教職課程を履修して、自分の人生における選択の中で迷ったとき、難しい方の環境に身を置き、選択肢を減らさない選択（自分にできることを最大限ですること）の重要性を学びました。私は、教師になることを決めたのは大学に入ってからで、そのため高校3年生の時には教育大学へ進まず、四年制の英文学科を志望しました。結果的に教職の道へ進むことを決めたので、教育系の大学に進んだ方が近道だったかもしれません。しかし、私は自分の可能性をより広げられるよう、英文学科に進みながら教員免許を取得できる道を選択しました。高校3年生の時に自分にとって何が1番か考え、自分で決めた道だからこそ後悔することなくいろいろな事に挑戦する気持ちをもって多くのことを学ぶことができました。大学の中でも多くの良い出会いに恵まれ、応援してくれる仲間、信頼でき私の背中を押してくれた先生に出会い留学を通して自分の殻をやぶることもできました。過去に、恩師から「自分にしか歩けない道を自分の足でしっかり一歩ずつ歩ける人になりなさい」と言われたことがあります。これからも自分の選択に誠実に、自分自身で決めた道で一歩ずつしっかり歩いていけるよう努力し向上心を持って成長し続けたいです。

そして私は今まで出会った先生方が私に全力で向き合い続けてくれたように、生徒と向き合い続けることのできる教師になりたいです。この向き合い続けるということは、こうすべきだという答えがない中で、生徒一人ひとりにとってどのように接するのが1番なのか常に意識し、共に考え共に成長することです。優しいだけ、厳しいだけではなく、生徒を知ろうとし、その姿勢を示し続けることが必要不可欠で、生徒の言葉に耳を傾け、寄り添い、全力で向き合っていく中で信頼関係を築くことができるよ

うになるのだと思います。

高校生活の中では自分の夢や志について考えるチャンスがたくさんあると思います。大きい志でも小さな志でも一度描こうとしてみることで、そしてそこから逆算し目の前の目標に向かって主体性を持って挑戦する中で努力し達成していく自己実現力を社会に出る前に養うことが大切だと考えます。教師として生徒を信じ、可能性を最大限引き出せる指導や、生徒に夢や志について考えるきっかけを与えられるような指導を通して「志を持って自ら求め未来を創る人」を育成したいです。

今までの授業や自分が挑戦したことで得た経験から学んだことを忘れず、自分の成長意欲を持ち続け、教師としての夢を叶えます。

別の道で頑張るという選択

表象文化学部英語英文学科 4 年次

まず、教職課程をやりきり、現時点では教員にはならず、ひとまず別の道で頑張ると決断できた自分を褒めたいです。私は、幼い頃から中学校教員になるのが夢であり最大の目標でした。小学校の卒業文集の中の将来の夢を記入する欄にも“教師になる”と堂々と書いてありました。私が教師をめざそうと思ったきっかけは正直あまり覚えておらず、物心ついた時から漠然と教師になりたいと思っていました。ですが、中学校の英語の先生になろうと決心したのは中学1年生の時でした。当時の担任の先生にとてつもない憧れを抱き“先生のようになるんだ”と決めました。そこから、中学校の英語科教員という夢に向かって、高校そして大学に進学しました。同志社女子大学 表象文化学部 英語英文学科に入学を決めたのも中学校教諭一種免許状（英語）が取得、毎年一定数の教員を輩出しているからでした。大学1年次生から、教職に必要となる科目を少しずつ履修し、着実に教員への道は近づいていると思っていました。

しかし、私の考えを変える出来事が起こるのでした。大学3年次生の春から大学が京都市と連携して行っている京都教員ボランティアに参加し、週に2回ほど市内の中学校で授業や部活動のサポートをしていました。最初は新鮮で楽しかったのですが、段々と学校の実態について知っていくうちに“本当に教員でいいのか”という疑問が芽生えてきました。朝早くから来て、夜遅くに帰る先生がたくさんおり、授業作成や部活動などで自分の時間を最大限に削らないといけない現実、職員室にいる先生が目がいきいきしていないことも多々ありました。そこで私は、自分はなぜ教員になりたいのかについて考えるようになりました。考えに考えて出た一番大きな答えは「憧れていた先生方と一緒に働きたいから」でした。もちろん子どもは好きですし、学校という空間も好きで、教えることの楽しさも実感していました。けれど、「憧れていた先生方と一緒に働きたいから」という理由でめざしていたのならば、今の自分には教員になるという選択肢を取るの是最善ではないと気づきました。それだけの理由ではなく、教職課程を履修している上で本当に教員でいいのかという疑問を感じていたこともありましたが、現状で教員をめざすことはやめました。

その選択肢を取れたということは、教職課程を取ったことの最大の意義だと思います。教職課程の履修やボランティア、教育実習の経験から教員という職業はやりがいにあふれた素晴らしい職業だと心から言えます。生徒の成長に携わり、嬉しいことも悲しいことも共有できることは他の職業では味わえない素晴らしい経験ですが、今教員になることはやめます。教職課程を履修し、教育の奥深さ・楽しさを知れたので何か今後の人生に役立てていきたいと思っています。

教職課程の軌跡

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私にとって教職課程を履修した事は、大学生活の中で非常に有意義なものであった。教職の科目は、教育や子どもに関する学びを深められただけでなく、教育に対する深い情熱を持った教職課程履修者と出会えた事も教職課程を履修して良かったと思う理由の一つだ。学科問わず、教職課程を履修する同じ志を持つ仲間たちとの交流を通じて、異なる視点からの刺激を受け、広い視野で教育の本質に迫る事ができた。特に、授業でのグループワークでは、一人ひとりの教育に対する考え方や想いに触れる事ができ有意義な学びであった。教育実習や模擬授業での実践を通して教育の魅力を発見すると同時に生徒に教える難しさを実感した。教職課程を履修して初めて行った模擬授業では、準備した事が十分に力を発揮できずに非常に悔しい思いをした。そこから他の教職課程履修者の授業を見習い、自分の授業スタイルを見直した。そのため、教育実習では緊張しながらも準備した事が最大限に発揮でき、生徒からは「先生の授業が分かりやすい、先生の授業が楽しかった」という声を聞く事ができ非常にやりがいを感じた。

教育実習で、初めて中学生に教える立場に立ち、緊張と期待が入り混じった中、始まった授業は想像以上に楽しく感じた。授業を進める中で生徒たちとの交流を通じて、生徒一人ひとりの個性や成長に触れることで、授業をする楽しさを改めて感じる事ができた。授業の準備や進行、生徒たちへのアプローチは、教師として生徒たち視点で分かりやすく教えること、また、生徒の興味を引き出し、学びの楽しさを共有する事は難しかったが、周りにいる教職課程履修者や先生にアドバイスを貰いながらやり遂げる事ができた。

また、教育実習での3週間は、教師としてのスキルアップだけでなく社会人として必要なスキルを身

につけられたと感じている。例えば、実際に授業を行うと時間配分通りにいかず、授業時間が足りなくなる事があり、柔軟な対応力が求められる機会があった。このような柔軟な対応力は、社会人としても非常に重要なスキルであり、変化する環境に対しても柔軟かつ丁寧に対応する能力が求められるため非常に重要である。他にも、教育の現場では生徒や教師、保護者と密にコミュニケーションを取る事が重要だと学んだ。社会人になっても人とコミュニケーションを積極的に取ることを大切にしながら、仕事を効率的に進めていきたいと思う。

教職課程と3週間の教育実習を終え、未来への一歩を踏み出す今、今まで指導してくださった先生方への感謝の気持ちを伝えたい。そして、今までの知識や経験を糧として社会人としてこれからも挑戦し学び続けたい。

達成感と貴重な一瞬

表象文化学部英語英文学科4年次

教育実習を終えて達成感を感じるとともに、時間が経つ早さを改めて感じています。高校時代から教職課程を履修しようと考えていたので、大学では他の学生より忙しい生活を送ることは予想していました。しかし、私はAESコースにも所属していたため、課題が多く、クオリティを重視されるAESコースの授業課題と予想以上に多い教職課程の履修との両立に苦労することもありました。また、当時はアルバイトもしていたので、今ではよくそんな体力があったなと思います。

このような大変さを感じながらも頑張ることができたのは、一緒に学ぶ仲間がいたからだと考えています。教職課程履修者の中には、私と同じAESコースに所属している人や日本語教師養成課程などの他の課程を履修している人もいました。そのような仲間から刺激をもらい、授業内外を問わずお互いに支え合うことができたからこそ、達成感を持って

教職課程の履修、そして大学生活4年間を駆け抜けられたと思っています。

また、高校の3年間は過ぎるのがとても早いと思っていましたが、大学の4年間が経過するスピードは高校以上だと感じています。大学1年次から教職課程を履修し始め、英語の教授法をはじめとする様々な科目を受講しました。教職課程科目の単位を全て取得することができるのか、教育実習が上手くいくのか不安になりながら目の前のことをこなす日々を過ごしていたら、あっという間に教職課程の集大成である教育実習が始まり、3週間の実習も一瞬で過ぎてゆきました。そして、その3週間の中でも、受け持った生徒の成長や自分自身の成長を感じることができ、短い期間でも人は進化することに驚くとともに、時間は瞬間に過ぎる貴重なものであるからこそ、無駄にしないように一瞬一瞬を大切に過ごしていくべきだと教職課程の履修を通して改めて感じました。

大学4年次生の冬の今、4年間を振り返り、しっかりした達成感や自信を持てるのは、充実した毎日を過ごすことができたからだと思います。さらに、教職課程を履修することで、これからも長い付き合いをしていく切磋琢磨しあえる仲間に出会うことができました。大変だと感じることもありましたが、教職課程に挑戦して良かったと感じています。そして、これからの新しい生活では、大学4年間を走り抜くことができた自信と時間に対する意識を持ち、新たな目標に向かって駆け抜けていきたいと思います。また、大学を卒業してからも教職仲間と連絡を取り合い、お互いを高め合っていきたいと思います。

感謝

表象文化学部英語英文学科4年次

今感じていることは「感謝」です。私が教職を意識したのは中学時代。しかし大学と同時にコロナ禍

に突入し、憧れのキャンパスライフも京都での生活も楽しめず、今までの当たり前は当たり前ではないことに気づかされ、それと同時に将来への不安もでき、教職を取ることにしました。また大学時代に教職を取った母が背中を押してくれたことも理由の一つです。しかし実際、教職課程を履修すると、こんなにも大変な思いをしないと教職は取れないんだということを痛感しました。ただただしんどくて、治っていたはずの中学時代に発病した起立性調節障害の症状が出てきたり、朝が早い授業のときは片道1時間半超の電車の中で手足が痺れ、息ができなくなったこともありました。正直、教職をやめたいと思ったことは数えきれませんが、そのときに母はいつも励ましてくれ、時には車で途中まで送ってくれたこともありました。4年次になると、教育実習。人前で英語を話すことに自信がなくて模擬授業が怖くて、教育実習に行く前はとてもナイーヴな気持ちになっていましたが、そこでも母は支えてくれ、教育実習頑張れ！と3週間、ほぼ毎日お弁当を作って送り出してくれました。いつもお昼休みに母が作ったお弁当を食べることが教育実習中の楽しみの一つになっていました。中学・高校時代もずっとお弁当を作ってくれており、当時は当たり前だと思っていましたが、教育実習でお弁当のありがたみとパワーを感じ、母への感謝の気持ちでいっぱいです。そして母が支えてくれたからこそ教育実習の楽しさも味わうことができました。また、研究授業での題材作りをしているときに、小さいときからいろいろなところに連れて行ってもらっていたことを思い出しました。実際、青森以外の都道府県に行ったことがあるのも両親がいろいろなところに連れて行ってくれ、私の趣味や人生の視野は広がったのだと実感しています。また、小学校のときから、授業で習ったところに連れて行ってくれたことが社会科への興味に繋がり、小さいときから社会が好きだった理由の一つだと思います。例えば、聖徳太子を習うとその週末には法隆寺に行き、江戸時代に入ったと言うと二条城に連れて行ってくれました。中でも、元寇を習ったときは、夏休みに九州に行き、石塁を見て、時代は全く違いますが、吉野ケ里遺跡と金印が見つかった

志賀島、そしてカルデラを見に阿蘇山にも行ったことが思い出に残っています。ただただ教科書で習うだけではなく、現地に行って空気を感じると記憶にも残るし、楽しく学べることを小さい頃から教えてくれた母には感謝です。大学を卒業する年になって、そして、教育実習で母校に戻って、今まで育ててくれた両親への感謝を今までより感じました。今までの母の数々の言葉が今では私の心のお守りになってくれているような気がします。来年からは社会人になりますが、感謝の気持ちを忘れずに、私も母のような人になりたいです。また、教育実習で母校に戻ったことにより、たくさんの先生方にも支えてもらっていたことを感じました。指導担当をしてくださった先生、在学中お世話になった先生方には本当にお世話になり、教育実習を受け入れてくださった高校にも感謝です。そして、大学ではたくさんの方々に関わってくださったことにより教職課程を取ることができました。4年間、ありがとうございました。

4年間の教職課程を終えて

表象文化学部英語英文学科 4年次

4年間の教職課程を終えて、来年度から教員として働くことができることを嬉しく思っています。2年次生のときから本格的に教職課程の授業が始まり、教職課程の授業をすべて終えた今、達成感を感じることができています。自分が中学生・高校生のときに当たり前に受けていた授業や学校活動で、先生方が様々なことを意識されているということを学ぶことができました。

教職課程の中でも特に印象に残っているのは、3週間の教育実習です。中学生・高校生のときに来ていた実習生を見て、自分も教育実習に行くことを楽しみにしていましたが、教職課程の授業を受けるにつれて、自分1人で授業ができるのかと不安になりました。しかし、実習が始まると、授業内で生徒が

ら返ってくる反応や生徒と過ごす時間がとても楽しく、充実した3週間を過ごすことができました。私が教育実習の中で意識していたことは、「教育実習生という立場を利用する」ということです。指導教諭の先生が「教師として働くと、他の先生の授業見学に行く時間が取れない」とおっしゃっていたので、授業見学にたくさん行くようにしました。私の学校は小学校から高校までであったので、様々な先生や学年の見学に行きました。小学校では文法を詳しく教えずに英文の作り方を教えていたことや、中学生の授業でのデジタル教材の使い方、高校生への受験対策英語の教え方など、学年によって教授法が異なっていたことがとても勉強になりました。また、学生時代お世話になっていた先生の授業を教育実習生として受けたことで、先生が何を大切に授業をつくっておられるのか垣間見ることができましたし、先生方の知識量や授業準備への熱量の凄さを再確認することができました。英語科の授業だけでなく、学校生活において生徒のリアルな様子を知れたことも印象に残っています。音楽や体育の授業では生徒の普段と異なる素顔を見ることができました。大学の授業で学ぶことのできなかった、生徒のリアルな反応や生徒と関わることの楽しさを3週間で感じることはできたのは教育実習に行ったことの大きな意味だったと思います。実習最終日に担当クラスの生徒と学年の先生からメッセージをいただいたことが本当に嬉しかったですし、教師としてのやりがいを少しでも感じられたと思いました。

教職課程は授業や課題も多く、大変に思うことも多かったですが、実習に行って今まで頑張ってきたと思うことができました。4年間学んだこと、経験したことを糧にして、来年度から教員として頑張りたいと思います。

教職課程を選んで

表象文化学部英語英文学科 4 年次

大学に入学すると、多くの選択があった。授業の組み方、アルバイト、ボランティア活動など自分自身の生活が自由自在になった。人生設計をして、それに必要な物事を実行しなければならなくなった。私にとっては、その一つが教職課程だ。

小、中学校までの自分は学校が好きではなかったし学校の先生なんて大変そうで絶対になりたくないと思っていた。しかし、高校に入学すると毎日が充実していて本当に楽しかった。先生や学生生活を共に過ごした友人のおかげで、自分が明るく変わったように思う。受験期には、毎日夜遅くまで勉強に付き合ってくれた先生もいた。そこから、母校で出会った先生のようにになりたいという思いを持った。教師になるかは決められなかったが、教師になる選択肢を持つために教員免許の取れる大学、学部を選択し進学した。

大学に入る頃には、「絶対に先生になりたい」と考えていた。そのために、集団指導塾でアルバイトを始めた。アルバイトではあるが、勤務時間以外の準備や退勤時間の遅さで疲弊した。教育現場のリアルな面も経験し、1年経つ頃には他のことも経験してみたいと思い退職した。その頃には教職へのモチベーションが下がり、毎日課題に追われ睡眠時間も取れない中、「ここまでして免許を取る必要があるのか」と考えるようになった。それでも、教師になる選択肢を捨てることはできなかった。

いろいろなアルバイトを経験し、教職以外の職業の良さを知り、3年次になる頃就職活動を始めた。周りに遅れを取りたくないということもあったが、自分にはまだ教師になる覚悟がなかったからだ。就職活動を始めると、様々な企業から話を聞き広告代理店に興味を持った。毎日面接練習に取り組み、2月には内定をもらうことができた。心の中では、「あとは実習さえ終われば」と思うようになってい

た。

4年次生の5月になり、ついに教育実習がはじまった。担当教諭は、クラス指導、英語科指導ともに3年間担任としてお世話になった恩師だった。英語科の指導は準備に追われ、時には厳しい指導を受け毎日必死だった。4時間睡眠が取れたら良い方だった。探求の授業は企画から任せられ、2時間の授業を一人でこなすのは大変だった。客観的に見ると、ハードな3週間ではあったが、3週間の中で辛いと思うことは一度もなかった。それは、指導教諭が熱心で自分の成長のことだけを考えて指導してくれていたからだ。そんな先生のおかげで、自分でも成長できたと思える3週間で過ごせた。そして、その中で自分にとっての「やりがい」を見つけることができた。授業中、いつもより頑張って手を挙げてくれる生徒。学校外で、元気よく挨拶してくれた生徒。その瞬間が今でも忘れられないほど幸せだった。「このためになら頑張りたい」と本気で思えた。

実習後の7月、私は教師になる覚悟を決め就職活動をリスタートさせた。あの時、教職課程という選択を捨てなくて本当によかったと思う。

時間にかえられない 大きな学び

表象文化学部英語英文学科 4年次

教職課程とは私にとって「教育」を改めて見つめ直す時間でした。高校生の時に教師になろうと考え入学する大学を考えた私にとって教職課程を履修するのは自然なことでした。しかし、想像以上に必要な単位数や、卒業単位にカウントされない授業をAESコースや力を注いでいたサークル活動と並行して行うのは決して簡単なものではありませんでした。2年次生になっても空きコマがなく課題に追われる日々で教職の授業に対するモチベーションが低くなった時もありました。特に4年次生に近づくにつれて教育実習を行うことへの恐怖心は増えていき

ました。それは、3年次生の後半や4年次生のはじめになっても具体的な授業のイメージややり方が分からなかったからです。あの時、もう少し教育実習や授業を具体的に想定できていたらここまで恐怖心は大きくなかったのではないかと、今は思っています。

3年間の教育課程の中で私は自分自身が受けてきた教育について考える時間が多くありました。中学生の時に自分には理解できなかったことが、大人になり、そして生徒から教師へ立場が変わって考えることで大学生になってようやく理解できたことがたくさんありました。例えば、道徳の学習の意味、特別活動や探求の授業の在り方など当時の私には果たしてどのような目的で行われているのか、なぜ必要なのかを十分に考えることができていなかったと思います。大学生になりその目的や国が定めた指導要領など多くの決まりがあることを知りました。

また、以前から教師という職業に就きたいと考えていた私にとって、3年間の教職課程は自分が本当にその職業に就きたいのかと自問する期間でもありました。教職課程を履修してから、今まで見ていなかった教師の厳しさや難しさを知り自分は教員になっても大丈夫なのかと自信がなくなりました。学校現場の厳しさやひと対ひとの職業、自分が好きな生徒だけではなく保護者や地域住民とも協働しないといけないと知り他の道を少し考えたり、家族からは心配の声もありました。そんな迷いの中、教員採用試験の準備を行っていたのですが、教師という仕事にやっぱり就きたいと思ったのは教育実習でした。私は5月のゴールデンウィーク明けから3週間母校である中学校にいきました。クラスの中では一番早く、4年次生になってからすぐの実習でした。一番早い期間だったので分からないことも多く不安な気持ちが大きかったです。しかし、3週間を終えて授業や生徒指導は難しいけれど教師はとても素敵な仕事だなと思うことができました。

実習が終わり教員採用試験に合格した後に今までの点と点が繋がり教職課程を取ってよかったと思うことができました。教職課程を修了するのにも意義を見つけるにも時間がかかりましたが、それだけ教

育に携わる仕事は難しく、それだけ意味のある仕事
なんだと学びました。

教職課程を修了して

表象文化学部英語英文学科 4 年次

教育実習を終え、教職課程を修了した今、幼い頃からの夢を実現することができることを嬉しく思います。2 年次生になった頃から履修し始めた教職課程は決して楽なものではありませんでした。通常の履修に加えて卒業単位に含まれない授業をたくさん履修し、1～5 限が全て埋まってしまった日もありました。教職課程の履修を辞める人も多く、どんどん人数が少なくなっていくことに寂しさを感じたこともありました。そのような過程の中で、同じ志を持った仲間たちと最後までやり遂げることができたことに今、達成感を感じています。

授業内では学校に関する様々なことを学ぶだけでなく英語や道德の模擬授業を行うなどたくさんのことに挑戦しました。教師になりたいという夢があったものの、自分には何の力もなかったため失敗をしたり不安感を抱いたりするばかりでした。自分は教師になるべきなのか悩んだこともたくさんありました。ですが、大変さを感じると同時に教職課程を履修することは楽しく、最初は不安ばかりだった模擬授業も次第に楽しみながら行えるようになりました。そうして迎えた教育実習では生徒を前に教えるということを経験し、これまでの教職課程を通して培ってきた力を発揮した 3 週間でした。実習中は初めての経験の連続で何が正解なのか分からない、戸惑ってばかりだったと思います。しかしその中でも決して止まらず、走り続けた 3 週間でした。楽しいこと、嬉しいこと、悲しいこと、悔しいこと、驚くこと、いろいろな出来事の連続でこんなに感情が動いた期間は大学生活の中で初めてだったと思います。苦しいことも多かった教育実習でしたがそれ以上に楽しく、やりがいを感じ、やっぱり教師になり

たいという思いが強くなった期間でした。実習を終えた今、これまで教職課程を履修してきて本当によかったと感じています。

教育実習を終えてからは、教員採用試験に向けて設置されている授業を履修し学部・学科や受験自治体関係なく「教師になりたい」という夢を持った仲間たちと切磋琢磨しあいました。面接練習で自分の思いをうまく伝えることができず、泣いてしまったこともありました。そんな中でも最後まで頑張ることができたのは、同じ目標を持った仲間たちが支えてくれたからでした。教職課程を履修していなかったら出会うことのなかった仲間たちと出会い、互いに高め合えたことを嬉しく思います。そして、自治体は異なるものの来年から教師として働くことができることに喜びを感じています。

教職課程を通して、様々な人たちに関わり、互いの夢を実現することができたことに嬉しさと達成感が溢れるばかりです。教職課程を修了することができて本当によかったです。

教育実習、教職課程を終え 感じていること

表象文化学部英語英文学科 4 年次

先生として教壇に立つってかっこいいな。私が教職課程を履修し始めたのは、そんな漠然とした憧れからでした。将来に対する明確なビジョンを持っていなかったにも関わらず、教職課程及び教育実習を修了することができたのは、学ぶほどに教育という分野が面白いと感じていたからだと思います。この三年間で教職課程を履修し、修了したことは自分の糧になっていると、自信を持って言えます。

教職課程を履修する上で、素晴らしい先生方のもとでたくさんのことを学ぶことができました。英語科の教科指導法だけでなく、授業の中で人前に立ち、模擬授業をすること、教員採用試験のための小

論文の添削指導、教育の心理学など、教員にならない道を選ぶとしても、将来に繋がる学びであったと思います。課題が多く諦めそうになったこともありましたが、大学生活の中で最も頑張ったことの一つとして誇りに思います。

教育実習は様々な困難の連続であり、とてもしんどい思いもしましたが、自分の成長を感じられた三週間でした。私は京都市の中学校に実習に行きましたが、公立の中学校では生徒たちの学力差が顕著です。当初、私が授業を進めていくにあたって、質問を繰り返し、内容を確認していくという授業方法を取ったため、学力の高い生徒のみが参加してしまうという授業になってしまいました。大学で行う模擬授業では、生徒役の学生たちがスムーズに課題やアクティビティをこなしてくれますが、実際の中学生相手だとそうはいきません。教科書を開く、などといった一つ一つの作業に時間がかかるのはもちろん、生徒の性格や学力、モチベーションによって授業の参加態度は大きく違います。ある生徒が大きな声で話をしていて授業が進められなかったこともありました。想定外の事にたくさん出会う中で、担当の英語科教諭の先生にたくさん相談に乗っていただき、他の先生方の授業を見学させていただいて、また、自分の毎回の授業の中での試行錯誤の末、担当クラスが一年生だったという事もあり、生徒たち同士がもっと活動的に英語に触れ、楽しんで授業をできるような環境づくりを心がけました。最初は手探りでたくさん失敗もしましたが、一週目より、二週目、二週目より三週目と自分がクラスをコントロールして“作る”感覚が分かってきて、実践と改良を繰り返していくことでだんだんと自分が理想としていた形に近づいていきました。その結果、三週間の最終日の研究授業では、様々な学力を持つ生徒たちが全員積極的に参加できる授業を作ることができたと思います。その授業をやり切った後の達成感は何にも代えがたいものでした。

教職課程を取ろう、と何気なく思い頑張り続けて三年、長いようでとても短い期間でした。この経験は今後の人生の中で何か辛いことがあったときでも自分を支えてくれるものになると思います。

一生の財産

表象文化学部英語英文学科 4 年次

2 年次生からスタートした教職課程が終わりを迎えている。親の勧めで履修した教職課程、想像以上に大変な道のりだった。しかし、終わりを迎えている今、大きな達成感と満足感に満たされている。将来、教師になる予定がなかったとしても、後輩たちにはぜひ教職課程を履修してもらいたい。教職課程で得た学びや経験は果てなく素晴らしいもので、自分自身の大きな成長につながると信じている。ここでは、私が教職課程で得た学びや経験について共有していきたいと思う。

今年の 6 月、3 週間ほど行かせていただいた教育実習では、たくさんの苦労があった。まず、私が苦労したこととして、指導案の作成と授業の準備が挙げられる。具体的には、科目担当教諭の先生が行う授業スタイルを基に、想像する生徒のリアクションや理解度を考慮に入れつつ、教科書に沿った一貫性のある授業構成を考えていくことが特に難しかったように思う。

一方で、生徒との関わりは大変幸せな時間だった。「酒井先生！」と駆け寄って来てくれた生徒たち、私の不慣れである授業をサポートしてくれた生徒たち、いつも元気よく挨拶してくれた生徒たち。生徒との関わりの一瞬一瞬が楽しく、心温まる時間だった。教育実習では悩まされたことがたくさんあったが、このような生徒という存在にどれだけ救われたかと思うと、教師という職の魅力を新たに知れたように思う。

また、生徒との関わりの中で、ある 1 つのことに気づかされた。それは、生徒に向ける教師の姿勢は生徒にきちんと伝わっているということである。言い換えれば、教師の 1 つ 1 つの言葉が生徒に大きく影響を及ぼしているということである。実際に、学年通信、進路説明会や朝終礼で生徒に伝えた私の想いはきちんと生徒に伝わっていると、生徒とのコミ

コミュニケーションの中で実感した。

教職課程を修了するにあたって、自分自身の成長を感じられるように思う。ここでは2つ取り上げる。1つは、教職課程を履修していない学生と比べ、やり遂げてきた科目数が圧倒的に多いことから、自分自身の頑張れる幅が広がったということである。2つ目は、模擬授業や教育実習を通じて、人の前に立つことへの大きな自信が身についたということである。

卒業後、教師になる予定はまだないが、教職課程や教育実習での学びや経験を今後に生かしていきたいと思う。来年の4月からは、認定遺伝カウンセラーになるため、専門職大学院に通う。一見、教師とかけ離れた職業に思うかもしれないが、私は将来認定遺伝カウンセラーとして、教育現場に行き、子どもたちに正しい遺伝情報を分かりやすく伝えたいと考えている。そこでは、教職課程や教育実習で得ることができた学びや経験を大いに生かせると信じている。

教職課程を履修して

表象文化学部英語英文学科4年次

教職課程を修了し、教職課程を取ったことで、生徒の立場からの視点のみで捉えていたことが、教師の立場として考えるべきこと・するべきことを学び、視点を広げることができました。教職課程の中で特に印象に残っていることは、模擬授業と特別活動論、道徳教育論です。一つ目は模擬授業です。模擬授業はいわずもがなとても緊張し、事前に考えてきたことを滞りなく行うことが正しいのではなく、生徒の反応を見ながら行うことが重要であるということが分かりました。また、同じ受講生の模擬授業を観察する中で念入りに考え、工夫・準備されていることや、授業を進めるにあたってテンションを上手く上げているのを感じ、自分が頑張ったことや真剣に向き合っていることが生徒に伝わるということ

が分かりました。そして、これらの工夫を怠らなく行うことで日々楽しい授業を行うことにつながるのではないかと思います。

二つ目は、特別活動論です。私はこの授業を受講するまでは総合やHRといった授業は何をするのかと聞かれたらぱっと答えることができず、あまり印象深くないため重要視していなかったのですが、この授業を受講し総合やHRの必要性や重要性を学ぶことができました。総合やHRの時間では班活動が行われることが多く、その中でも個人作業の時間が設けられていたり、班で協力して発表内容をまとめたり、発表方法を決定したりと活動を通して、主体的に行動し、協力して一つのことに取り組むことを体験できるため重要な活動であるということが再認識できました。

三つ目は、道徳教育論です。道徳も特別活動と同じく、具体的にどういったことを学ぶと説明することができず、あまり重要視していませんでした。しかし、この授業を受講することで道徳の授業の難しさをとても理解することができました。授業で学んでほしいこと・ゴールを決め、それを生徒に正しく伝えなければ授業として失敗であるし、道徳は正解がないため教師がゴールに誘導するような発言や、ゴールに近い発言をした生徒を正解であるというような発言もしてはいけない中で、生徒が自由に発言できる環境をつくり、ゴールに生徒の力でたどり着くことができるような質問を考えることが必要であり、それがとても難しいということが身に染みて感じました。

このように、教職課程を履修することで今まで考えもしなかったことも考えるようになったことや、同じ受講生からの良い影響を受けることで教師の立場からの視点を多く養うことができました。

教育実習という経験を終えて

表象文化学部英語英文学科 4 年次

まず、教職課程を全て終えた感想として、ホッとしたという感情が一番強く感じています。なんとなく始めた教職課程を一度は諦めようとし、ここまでやって来たのに台無しにするつもりなのかと自分を奮い立たせ、なんとか教員というスタートラインまでたどり着くことができました。実習校が見つからず、もうここで私はついに諦めなければならないのかと考えがよぎったこともありましたが、免許・資格課の方、私を受け入れることを許可してくださった中学校の先生方のおかげで私はなんとかここまでくることができ、感謝の気持ちでいっぱいでした。今までなんとなく人生を過ごして来て、ここまで支えてくれた両親に感謝の気持ちを表す、など常に感じてはいますが、ここまで強く感じたことはありませんでした。実習期間では私が将来教員としてすぐに教壇に立つことができるよう、早い段階で生徒の前に立たせていただいたり、同じ教科の違う学年の先生方の授業を見学させていただいたり、担当クラス他教科の授業を見学させていただいたり、指導の仕方だけでなく教員に必要な生徒とのコミュニケーションの取り方、生徒一人ひとりに対応するスキルを実際に行動しながら見せていただきました。私以外の実習生は母校で1日の流れなどを大まかに把握しているようでしたが、私は母校ではなかったため何も分からないままでした。先生だけでなく、他の実習生にも助けてもらい3週間という短いようで長い期間を過ごしました。先生方にもたくさん助けていただきましたが、特に私を支えてくれたと感じるのは他の実習生です。生徒とうまく話せない、教えていても理解してくれている実感がわからない、研究授業が早まって何を一番に伝えたいのか分からない、数多くの相談をしました。そこで私は同期と支え合う事について学びました。実際に私の授業を見学してもらいアドバイスをもらったり、慰めても

らったりなどと支えてもらっていました。教育実習を始めるまでは英語を教えにいくという考えだった私ですが、私が生徒から教師とはこんな人であってほしいと教えてもらい、社会では同期の支えがあるから乗り越えられると他の実習生から学び、教員の方からは先生という職業は楽しいということについて学びました。私は実際に教員という道へは進まず、小さい頃から憧れていた職業へと進むことが決定しました。だからと言って教職課程で身につけたスキルが無駄なものだとは思っていません。近い将来、後輩をフォローする立場として、仕事を教えて、成長していく姿と一緒に喜べる先輩を目標に頑張ります。そして、いつかは教員となって再び教壇に立ち生徒へ英語の楽しさを伝えられる人材になりたいです。

生徒達の笑顔と声で頑張れる

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私は教育実習を通じて、「先生」という立場でしか味わえない大きなやりがいを感じました。また、今まで生徒としてなんとなく授業を受けてきましたが、先生として教える立場となることで、授業の組み立て方や生徒が積極的に参加できるアクティビティといった様々なことが考えられていることを実感し、視野が広がりました。大学での教職の授業では模擬授業などを通して様々なアクティビティやパワーポイントを作成するうえでのポイントといった実践的なことを学ぶことができ、実習先で授業づくりをする上でとても参考になりました。しかし、授業づくりの際に想定していたことは現場では通用しませんでした。例えば、予想していたよりも生徒が乗り気ではなかったり、声を出してくれず活気がない授業になってしまったことがありました。指導教諭の先生から、自分がしたい授業をするのではなく、目の前の生徒をしっかりと観察し、向き合うことが大切だというアドバイスをいただき、授業の中だ

けでなく授業外でも生徒と関わることによって、クラスごとの雰囲気とそれに合ったアクティビティを作り上げる重要性を実感しました。

研究授業が近づくにつれて良いアイデアが思いつかなくなり、困難に直面することもありましたが、その疲れや悩みを吹き飛ばしてくれたのは、生徒たちのフレッシュな「笑顔」と「声」でした。教員という仕事は担当教科を教えるということだけでなく、学校に関わるあらゆる仕事に従事するため、現場で働いていらっしゃる先生方は毎日忙しく動きっぱなしの毎日を送っていました。しかし、先生方は口を揃えて「生徒たちから思っているよりもエネルギーやパワーをもらえるから頑張れる」とおっしゃっていました。実際に3週間実習生として学校で生徒と関わる中で、私もそれを強く実感しました。これは先生だからこそ実感できる特別なやりがいだと思います。

近頃、教員はブラックだ、やりがいだけではやっていけない、といったことをメディアで目にするのが増えてきましたが、目の前にいる生徒から直接エネルギーをもらいながら働くことができる「教員」という仕事は素晴らしい職種だと思います。私は卒業後すぐには教員にならず、企業に就職することを決めましたが、教職課程を履修し、教育実習に行ったという経験は大変貴重で人生の宝になりました。もしもこの先教壇に立つことがあったら、生徒達からの笑顔と声からパワーをもらいながら、「教員」という仕事をしたいです。

教職で得たもの

表象文化学部英語英文学科 4 年次

教育実習及び教職課程を終えた今、私は達成感とともに継続する大切さを学んだ。教職課程を履修した理由は、将来の視野を広げるための1つの選択肢として教員になることも考えていたからだ。

大学で教職課程を履修し始めた頃、単位には換算

されない授業を受けたり1限や5限などの授業が多かったりと通学がしんどい時期が続いた。2年次生の頃は大教室で授業を受けていたのが進級ごとに小さくなるのを見て、何度も「やめたい」と思うことがあった。しかし、自分で教職を取ることを決めたからには最後までやり通そうと決意し、諦めなかった。

大学4年次生で教育実習に行く前は、これから3週間しんどい日々が続くのかとか生徒にいい授業ができるのかという不安な気持ちでいっぱいだったことを覚えている。実際に実習が始まってみると、初日から生徒がたくさん話しかけてくれたり先生方が優しく指導してくださったりとそれまでの不安が一気に消えた。実習3日目から初めて生徒の前で授業する日には、生徒たちのキラキラした目を教壇から見ると緊張よりも「この3週間で英語をもっと楽しいと思ってほしい。」と感じ、授業づくりではゲームやクイズを交えて英語を学べるように工夫した。毎回元気で積極的に授業に参加してくれた生徒たちの姿からエネルギーをもらい、3週間をやり過ごした。実習最終日はホームルームクラスの生徒と先生からメッセージカードをもらい、そのなかには「先生の授業で英語が楽しいと思えるようになった」という言葉がいくつもあったのを見て、私が初日に抱いた思いが届いたことを実感し涙が出るほど嬉しかった。教員の仕事は大変なことばかりだと思っていたけれど、これがやりがいになるのかと気づくことができた。さらに、教員の仕事を実際に体験してみて私が学生だった時には分らなかった教員の偉大さを学んだ。しんどいこともあったけれど楽しく価値のある教育実習を終え、ここまで教職を続けてきたご褒美のように思えた。たとえ教育実習でも生徒にとっては一人の先生との出会いであるのと同じく、私にとっても一人ひとりの可愛い生徒との出会いであるから、人生において貴重な経験となった。

私は大学を卒業してすぐ教員になる道を選ばなかったけれど、この教職課程で得た「何事も継続する大切さ」はこれから先のどんなことにも言えることだ。挫折しそうな時はこの4年間の教職課程の経験を自信に変えて、挑戦していける社会人にな

りたい。

確かな成長

表象文化学部英語英文学科 4 年次

教育実習、教職課程を修了して感じていることは、「現実なのかな…？」です。私の想像していた数倍しんどくて、履修する教科も多く、すごく悩みながらも進んできましたが、教育実習も無事に終わることができ、現実とは思えないような達成感を感じています。特に教育実習では、4 年間の集大成として 3 週間という限られた期間ではありましたが、生徒の成長を感じながら自分自身も成長することができ、人生の中で確実に意味のある経験ができたと感じています。

教育実習に行き、人のために動きたい。と思う事ができました。教育実習が始まり、最初の 3 日間は、定時の 17:00 に合わせて、指示があったものや、授業に必要な準備は済ませて、すぐに帰宅していました。ですが、少しずつ生徒との関わりが増え、授業の様子を見ていくうちに、自分から「何かできることはありますか？」と仕事を探し、最終下校時間の 20:00 まで残り、先生方と一緒に作業するようになりました。大学の授業で行う模擬授業では、生徒役は大学生なのでスムーズに授業を進める事ができていましたが、小テストの採点を担当した時に、気持ちよく丸をつけられる回答の少なさにすごく驚きました。事前のシミュレーションでは、想像できなかった驚きに直面した時に、「現場」を知る事ができたと思います。

教育実習初日に行われた校長先生との面談でのお話も、とても印象深く、実習後も残っている言葉があります。面談時に、校長先生から「どういう先生になりたいですか？」と実習生 3 人に質問されました。一人ずつ答え、私は「生徒からこの先生だったら話してもいいかな？と思ってもらえるような先生になりたいです。」と答えました。答えを聞いた後、

校長先生は「教師という仕事は、勉強を教えるのが仕事と思われがちです。実際にとっても大切な事です。でも、3 人とも授業内容については話さず、授業外のことについて話しましたよね？」と、校長先生が考える教師の本質とは、というようなお話を聞きました。実際に、最初に行った授業と、生徒たちとの関わりが増えた後の授業では、積極的な授業参加度合いが違うように感じました。授業範囲を完璧にしたい！という事だけにとらわれず、関連する話題や、みんなの好きな事を知り、取り入れながら授業づくりをしていく。という事を実践しながら、私自身も学ぶ事ができたと思います。

教職課程は、とても大変でしたが、それ以上の経験と達成感を得る事ができ、履修して本当によかった！諦めなくてよかった！と心の底から思います。

教育実習・教職課程を終えて

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私は今、教職課程を終え、ホッとしています。1 年次生の秋頃に教職を取ると決め、最初は小学校、中学校、高校と憧れの先生や恩師の先生がいたことで、この教職に興味を持ちました。2 年次生から教職の道のりが始まり、ワクワクと同時に取らないといけない授業の多さに不安を抱えていました。授業が始まり、最初は実感がなくただ教職必修の授業をひたすら受けるだけの毎日でした。もうちょっと心構えしておくべきだったなと今では感じています。3 年次生になり、模擬授業が始まりました。初めての模擬授業でトップバッター、準備不足や緊張で時間を余らせてしまい、失敗してしまいました。今ではこの経験を活かして早めに準備するように心がけています。そんな中で励ましてくれたのが、友達でした。仲の良い友達で、一緒に教職の授業を取っていました。その励ましのお陰で、次はもっとこうしようと前向きになることができました。友達が支えてくれていることを改めて感じました。3 年次生の

冬、教育実習が近づいてきました。私は、今まで教職課程で学んできたことを教育実習で発揮できるのかとても不安で仕方ありませんでした。4年次生になり、もう一回模擬授業をする機会を与えてくださいました。その際、昨年の模擬授業でアドバイスをしてくださったことを活かして、模擬授業を作成しました。模擬授業が終わり、十分な時間の模擬授業ができ、昨年より準備不足ありませんでした。しかし、臨機応変に対応できなかった部分や自信を持てなかった部分がありました。この二つは生徒に分かってしまうことで、私自身アドバイスをしてもらって気づいた部分でもありました。これは一般企業などに就職しても言えることだなと感じました。そのアドバイスをいただいて、実際実習の教える範囲を聞いた際に、いち早く教材研究をして、指導案を書いて、プチ模擬授業をしようと考えていました。ですが、教材研究もままならないまま、実習を迎えました。実習が始まり、緊張の日が続きました。私の指導教員の先生は妹の担任をしたことがある先生で話しやすかったです。授業の相談をしたり、プチ模擬授業にも付き合っていたりしたが、部活動をされている先生で懇談期間もあったので、忙しくて「今聞いてもいいのかな？」と遠慮をしてしまい、その日中に質問を聞くことができなかったことがありました。帰りなどに今日聞いておけばよかったと思ったことがあったので、質問は聞ける時に聞いておくことが大事だと感じました。

教育実習を終えてはとりあえずホッとしました。実習は楽しい毎日ではなかったのですが、先生方の指導・褒めていただけたことによって成長でき、乗り越えられたと感じています。また、教職課程を修了した今、やり切ったなという達成感に満ち溢れています。大変なこともありますが、教職を履修してよかったなと思います。

夢を見つけた3週間

表象文化学部英語英文学科 4年次

教職課程を履修し終えて、最後までやり切れてよかったという安心感と教職課程を履修してよかったと心から思う気持ちでいっぱいです。

私が本学に入学する時、両親から唯一約束事として言い渡されたのが「教職課程を履修すること」でした。当時の私ははっきりとした将来の夢を持っておらず、教員という仕事についても「楽しそうだけど大変そうな仕事」と軽い気持ちで考えていただけでした。そのため、その約束は私にとって前向きに捉えることができるものではありませんでした。

二年次生になりいざ教職課程がスタートしてみると、驚きと不安の連続でした。教員になるためにこんなに勉強することがあるのか、という驚きが一番大きかったです。それまで私は教科を教えている教員の姿しか思い浮かべられないほど、教員という仕事について知りませんでした。そのため、生徒指導・教育の原理・道徳についてなど、教員と聞いてパッとイメージが湧いてこない内容の授業をたくさん履修する必要があることに驚き、私がこれまで出会ってきた先生方はこれ乗り越えてきたのかと尊敬の気持ちでいっぱいになりました。

そんな毎日の中で、私が持つ教員という仕事のイメージが段々と具体的になっていき、「教員っていいな」という気持ちが少しずつ生まれてきました。その気持ちが、強い意志に変わったきっかけが教育実習でした。

中学校での3週間は息つく暇がほぼないほど忙しく、教員の毎日ってこんなにもやらなくてはならないことで溢れているのだなと痛感しながら必死で過ごしていました。大学生活で忘れてしまっていた早起きから始まり、学校に着いた瞬間からすぐ気持ちを切り替えて生徒たちのいる教室に向かい、生徒が帰ったら終わりかと思いきや、生徒が帰ってから溜まった課題をこなす。これが3週間という期間限

定ではなかったら果たして私は耐えられるのだろうかかと不安になるほどでした。しかし、そんな忙しい日々の中で生徒が何気なくかけてくれる言葉や、授業で言ったことをしっかりと覚えてくれていて、生徒が楽しそうに学校生活を送っている様子に元気を貰い、乗り越えることができました。実習中、ある先生から「教員は生徒をどんな人に育てたいかを常に考えなければならない」という言葉をいただきました。私が出会った生徒たちの目は本当に真っすぐで、言葉にも嘘がなく、自分の感情を素直に表現してくれる子たちばかりでした。そんな見習いたいと思うところばかりの生徒たちの人生に関わって、そして彼らの道しるべとなる立場になれる。教員という仕事は、そんな素晴らしい仕事であると教育実習を通じて学びました。実習前は自信を持って教員になりたいと言えなかったけれど、3週間かけて教員になるという将来を思い描くことができました。そして実習での経験を糧に教員採用試験に挑戦し、無事合格しました。

私は春から教員として新しい挑戦をします。本学で学んだこと、教育実習で学んだことを胸に、初心を大切にできる人間として子どもたちと関わっていききたいです。

教職課程のサングラス

表象文化学部英語英文学科 4 年次

教職課程を履修し、私は学校教育に対する考え方を一新した。自身が中学生・高校生であった時にはあまり好まなかった活動や、正直に言うとなぜこんなことをやらないといけないのだろうという活動、それぞれに意味や目的があったことに気づくことができたのである。それだけではない。教師の労働環境からフリースクールや通信制学校のように個人に適した学びの場がある中での対面型全日制普通科学校の存在意義まで。今まで私の中にある当たり前が崩れていった。この当たり前が崩れ新たな視点を獲

得した状態で実習へ赴いた。

実習先は母校の高校だったのだが、目に映るもの全てが新鮮に映った。

見学させていただいた授業は、高校時代にそういえばこんな内容をやったなと振り返りで面白いと感じることに加え「授業構成の鮮やかさが面白い！」「グループワークへの導入はこうするとやりやすいのか！！」「この授業にはこんな意図があったのか！！！」と、次々に高校時代とは違う面白さを発見できた。その度に私が受ける衝撃は小説の伏線を回収したかのような感覚であった。ホームルームの教室では、生徒として内から見ていた時に感じやすかった自分以外の誰かがまた別の誰かに向ける視線や感情とはまた違う、外から見ることによって発見できるホームルームという小さな社会での各個人の立ち位置のようなものを俯瞰して見やすく、なるほどと興味深かった。

授業やホームルームについては自分が高校時代に体験したものと比較していろいろな気づきを得られるものであった。一方、高校時代には経験していないことから得た気づきもあった。私の母校には全日制に加えて単位制もあるのだが、全日制と単位制では教室の雰囲気と授業の進め方の違いは大きかった。今までは全日制にしかいたことが無いため、こういうことをやっていたのかと素直に感じた。どちらで学びたいのかは生徒それぞれの好みがありそうだったと思ったが、そこにいた生徒たちを見ていると女子校や男子校が存在するように選択肢の1つとして存在することの意味のようなものを体感できた。もう1つ、初めての経験でいうと授業時間外の職員室内の先生たちの過ごし方を見ることができたのはとてもいい経験であった。よくニュースやSNSで話題に上がる教師のブラックな環境を見ていると、ずっとバタバタしていてどうにもならないイメージだったのだが、私の予想よりは先生方は自分のペースで仕事をされていた。もちろんお昼休みや放課後の生徒対応や電話対応、割れた窓ガラスの修理対応などは常にあったが、自分のペースを掴み仕事をする姿勢はとても勉強になった。

私は実習へ行く前、教職課程を履修することによ

り新たな視点を獲得し、教育実習で実際に学校現場を見ることでまたさらに新たな視点を獲得した。その度に学校教育に対する見え方が変わった。生徒視点だったら、保護者視点だったら、先生視点だったら、学習指導要領視点だったら。それぞれの視点を付け替えて幅広く学校教育を見ることに教職課程の意義を感じた。

教職課程を振り返って

表象文化学部英語英文学科 4 年次

教職課程を履修することは決して楽なことばかりではありませんでした。課題の量が集中して多かったり、朝から夜遅くまで学校で授業を受けたりと非常に濃い日々を過ごしたと思います。自分が選んだことではありますが、遊んでいる友達を羨ましく思ったりしたこともありましたが、教職課程を通して友達が増えたと思いますし充実した学校生活を送ることができたのではないかと思います。

教職課程を履修しようと考えたきっかけはテレビで舞鶴の高校の話を見たからでした。誰と出会うのかによって人生が大きく変化することに衝撃を受け、今すぐでなくても将来、誰かにきっかけを与えられる職業に就きたいと思い教職課程を履修しようと思いました。

実際に教育実習に行き、実習初日に教務部の先生が「教務部には生徒の単位認定、不認定をする役割があります。生徒の人生を左右する単位の、その単位の集合体である『授業』を教育実習生が担うのです。」とおっしゃいました。その言葉を聞いた瞬間、自分の準備不足さを反省しましたが、その気持ちと同時に教壇に立つことの重みを感じました。また授業は仕事のほんの一部であることを思い知らされました。また部活動の指導や分掌等、やらなければならないことが山のようにあり驚きが隠せませんでした。その中でも私に時間を割いてくださった HR の先生には感謝の言葉しかありません。また学生時

代に放課後まで教室に残って私たちに時間を割き長い時間お話をしてくださった担任の先生に「忙しいのに時間をとって申し訳なかったです、ありがとうございました。」と伝えたいと思いました。授業づくりにおいて生徒の理解度と授業の進度を上手にすり合わせていくことの難しさを実感しました。また授業の内容がこれから生きていく上で身につけてほしいことを教える授業と英語のテストで良い点を取るための授業のギャップに悩みました。学年集会に出席しキャリアプラン作成方法や SNS との上手な付き合い方について学びました。小中高生にとって世界の広さは狭く限られたものであると考えています。SNS で様々な人と繋がることができ自分自身で世界を広げることが可能になっていると思いますが、大きな危険を伴う可能性があるかもしれません。そうなれば身近にいる広い世界を先に経験している大人の存在が非常に重要になると思います。これから社会に出る中で積極的に様々なことに取り組み、多様な人と出会うことで一人の大人として人間性を磨き、人にきっかけを与えられる職業に、将来就けたらと思います。

教師を支える生徒の存在

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私は教職課程の集大成である教育実習を終え、「教師」という仕事に一層身近に触れることができた。正直なところ、教育実習へ行く前は心のほとんどを不安や緊張が占めており、3 週間無事に終えることを第一の目標としていたように感じる。

いよいよ教育実習が始まった第一週目では、職員室や廊下を忙しく歩き回り、学校のあらゆる場所で生徒たちと話をされている先生方の姿が見受けられ、私は教師目線からの「学校」での一日の動きの目まぐるしさに圧倒された。第二週目には、実際に授業を受け持たせていただき、授業の進み具合や生徒たちの反応や質問から、自身の力不足や勉強不足

を痛感し、残りの実習期間を最大限の力を尽くして過ごすことを心に誓った。そのような実習期間の私の心の支えであったものは、一人ひとりの生徒たちが持つ純真さが滲み出る元気さや心の温かさであった。私は、生徒たちに「先生」と呼ばれるたびに「人としても実習生としてもまだまだ未熟な私のことも先生と呼んでくれる生徒たちがいる」「私にもこの生徒たちに教えられることや影響を与えることができるものがある」という喜びを感じた。普段の生活でも、自分のありのままの飾らない姿を見せることに苦手意識がある私は、生徒たちと仲良くなることに少し時間がかかったが、目の前のことに一生懸命に取り組んだり、本音を伝えたり、心から真剣に一人ひとりの生徒たちに向き合ったりしてこそ、心の距離が縮まるということを実感した。また、最終週の研究授業の際には、生徒たちは「いろんな先生に見られるから緊張すると思うけれど、先生頑張ってる」と声をかけてくれたり、普段の授業では大人しいクラスの生徒たちが積極的に手を挙げてくれたり、クラスメイトと楽しそうに生き生きと授業を受けてくれたりし、生徒たちが持つ思いやりは私にとっての何よりの救いであり、実習生である私自身が生徒たちにどれほど助けられ励まされているかをよく理解することができた。この実習期間で教師は常に多くの業務に追われているということは体感したが、このような生徒たちの存在が教師を元気にさせ、やる気にさせ、辛く感じることも生徒たちを想うことで力が湧き、頑張ることができるのだらうと感じた。

最後にこの教職課程を通じて、今まで教師という仕事は「生徒に寄り添う」ことが何よりも大事だと考えていたが、生徒を想う心や目の前のことに真摯に取り組もうとする心は生徒たちにも伝わり、その教師を支えてくれるのは生徒たちであり、教師自身も「生徒に寄り添ってもらっている」ことに気づくことができた。また、教育実習で様々な感性や考えを持つ生徒に出会ったことで、教科指導に関する知識を身につけることは大前提だが、一人ひとりの生徒たちへの対応方法について日々考えていくことも、生徒たちの学校生活をより良くするためには必

要不可欠だと感じた。

4年間教職課程を履修して 感じたこと

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私が大学で教職課程を履修しようと決めた理由は、二つある。一つ目は小学校の頃から英語が好きで将来の夢の候補としてあったからである。二つ目は資格を何も取得せずに大学を卒業するのはもったいないと思ったからである。

実際に教職課程を履修して1年目は、教職課程を履修していない友人は帰りが早く、履修者は5限までの日も多く気持ちの面でしんどかった。2年目は、顔見知りが増えてきて教職履修者の友人ができて気持ちの面のしんどさというものが無くなったが、履修科目が多く一番忙しかった覚えがある。授業内容ではグループ活動なども多く楽しく学ぶことができた。3年目は履修者のメンバーが2年次から変わらなかったため、より仲を深めることができ、一般企業か教師か相談しあい、進路についてたくさん悩んだ1年間だった。4年次では、教職課程の中で一番しんどい教育実習を控えていることからずっとドキドキしていた。実習前にクラスの模擬授業を見たのと同時に3週間も耐えられるのか、寝られるのかなど不安がどんどん大きくなっていった。実習先は母校ということもあり仲間ともすぐに打ち解けて励まし合い、周りのサポートがとても心強かった。実習には教材研究をして臨んだが全く役には立たず、泣いた日もあり、毎日復習と予習の毎日で今までで一番過酷な期間だった。

実習を終えて最初に感じたことは、私が高校生だったとき先生たちはこんなにも時間をかけていたんだということが分かり本当にすごいと思った。さらに指導教員の先生は授業だけではなく部活動指導、生徒指導、講座などもあり、私が教員になったらできるのか不安が募るばかりだった。しかし3週間を

終えて得たものは多く、達成感、生徒と距離を縮めてたくさん話せた、授業の進め方が上達した、声量が劇的に変わったなどたくさん褒めていただき、成長することができて、やっぱり先生っていいなと思うことができた。私は4月から教壇に立つが、実習を終えてどのような教師になりたいのか想像することができた。学期初めに距離を詰めておかないと信頼性を築くことができないため、部活動や好きな教科などの話題から自分からどんどん話しかけていきたい。

また、先生になるにせよ、ならないにせよ、教職課程を履修してよかったと思う。履修したから出会えた仲間も多く、私自身より先生になりたいという気持ちが強くなった。資格取得をすることで大学に通った意味もあるし、将来の職業の幅が増える。大学4年間かけて教職課程を履修したことで、忍耐力や継続力など養うことができ、就職活動や教員採用試験でも言える自分の強みだと思う。4年間で得た学びを4月から発揮できるようにするのが私の今の目標である。

教育実習を終えて

生活科学部人間生活学科4年次

「教育実習では、教師になったらやってみたいことに挑戦しよう」、この目標から私の教育実習は始まりました。私は母校の女子中高一貫校で3週間、教育実習をしました。教育実習までは緊張よりも憧れの教師という職を体験できるというわくわくした気持ちの方が大きかったです。

ホームルームクラスは高校2年生でした。クラスの生徒と関わる時間があまりなかったため、職員朝礼の前や休み時間、放課後に教室に行って少しでも生徒と関わる時間をつくりました。大人しいクラスでしたが少しずつ仲良くなっていき、進路相談をしてくれる生徒もいました。最終日にクラス全員からの色紙をもらった時はとても嬉しく、泣いてしま

しました。また実践授業は高校2年生と中学3年生で行いました。高校2年生は「高齢期」の分野でしたが、私はこの分野が得意ではなくとても不安でした。しかしそれは、その分野を分らない生徒の気持ち分かるということだと考えるようにしました。そして高齢期について馴染みがない生徒でも少しは興味を持てるような授業にしようと思い、実習中に1つでもできたらいいなと思っていたこと（ホワイトボードを使ったグループワーク、何か生徒に体験させること、絵本の読みきかせ、新書『人生の答えは家庭科に聞け！』を取り入れること、画用紙やマグネットでの教材作り、手書きのプリント、掲示物の作成）を取り入れ、授業の工夫をしました。生徒から「先生の授業いつも楽しい」と言ってもらえてとても達成感がありました。

私は母校での教育実習だったこともあり、「頑張ってるね」と声をかけてくださる先生も多く、指導教諭の先生も丁寧に指導してくださりました。これまで漠然としていた「教師」という職を、実習中に先生方とお話しをさせていただくことで、なりたい教師像を考えることもできました。教育実習に行く前は、自分は教師に向いていないのではないかと、教育実習に行ったら教師になりたくないと思ってしまうのではないかと少し不安に思うことがありました。しかし実習後は本当に教師になりたいと強く思えるようになり、卒業後は高校の家庭科教員になることが決まりました。人が生きていく上で必ず力となる家庭科という教科を、教師になって生徒と一緒にこれからさらに学んでいきたいと思います。

教育実習から広がる 挑戦と発見

大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）

私は大学院で英語教育に焦点を当てた修士論文を執筆しており、教職課程を履修することでより深い学びが得られるのではないかという思いから、この

道を選びました。これまでの二年間は大学院の授業と教職課程の授業の両立があり、充実した日々でした。特に教職課程の中で印象深いのは教育実習での経験です。大学の授業では味わえない、生徒との繋がりや教育者としてのやりがい、同時に直面する大変さを実感しました。

以前は「教師」という言葉を聞くと教科を教えるという印象を持っていましたが、実習を通して、教師は教科指導だけではなく、部活指導、授業の準備、進路指導など、多岐にわたる業務を担当していることを痛感しました。

私の実習校ではタブレットを積極的に活用した授業が展開されていました。この新しい形式の授業に初めて触れ、従来の指導法とは異なる指導の工夫が求められました。私は ICT の実践として、Kahoot! というクイズを作成できるアプリを活用し、英文法や英単語の復習を行いました。このアクティビティにより、生徒たちはゲームを通じて楽しみながら学び、生徒同士で協力しあいながら積極的に取り組むことができました。この経験を通じて、従来の指導法に縛られず、新しい指導法が生徒たちの学びとモチベーションの向上につながることを実感しました。しかし、実際の授業では、タブレットでの指導による予期せぬトラブルが生じることもありました。具体的にはタブレットの提示機の電源が入らないことやタブレットに文字を書く際に字体が小さく、後ろの生徒が見えないといった課題が生じ、柔軟な対処や授業計画においてもトラブルに備えて、別の手段を考えておくことが大切だと学びました。

教育実習を含め教職課程を履修し、授業を計画し指導する上で、最も重要なことは学習者主体の対話が行われる授業をめざすことだと強く実感しています。そのため、教育実習では生徒の興味や関心を知ることが大切だと考え、早めに教室に入り、生徒と積極的にコミュニケーションを取るようになっていました。生徒との対話を通じて、好みや関心を知り、それを基に授業を工夫することができました。担当クラス外の生徒との関わりが限られていた中、授業前に対話を重ねることで、クラスの雰囲気や生徒たちの反応に良い影響を与えたことを実感しました。

この経験から学んだことは、対話を通じて生徒との繋がりを築くことが、よりよい学習環境を生み出すきっかけとなることです。卒業後は教職課程で得た知識や経験を活かし、教師として学びと挑戦を大切にしていきたいと思います。

教職課程を終えて

科目等履修生

私は1年間の協定留学に参加したため、在学中に3年次生までの単位を取得し、卒業後、科目等履修生として残りの教職課程を履修しました。在学中に感じていたこと、そして今教職課程を修了して感じていることをお伝えしたいと思います。

教職課程は就職の選択肢の一つとして在学中に履修していました。その中で、英語科の勉強だけでなく、道徳や生徒たちの成長過程の中で気をつけなければならないこと、いじめについてなど、教師になるために必要な知識の多さに不安になり、教員になることへのモチベーションが薄れることもありました。しかし、それでも履修し続け、勉強していく中で、現役の先生方も試行錯誤して、正解のない問いに対し、自分なりに一生懸命取り組み、生徒たちのために考え抜いていることに気づきました。そしてその姿勢が教員にとって大切なことであると気づきました。

就職活動をする中で、教員をめざすか、企業に就職するか悩みました。しかしゼミの先生の、「教員はいつからでもめざせる。いま履修している単位は無駄にならない。」という言葉聞いて、卒業後は企業に就職することを決めました。

企業に就職し3年が経とうとした頃、教員への道をまためざしたいと思い、教職課程を修了するために科目等履修生になることを決めました。私自身、会社を辞め、また教員をめざすということに、本当にこの選択でよかったのか。と正直不安になることもありました。しかし、その不安は教育実習で吹き

飛びました。

教育実習期間中はとにかく忙しく大変でしたが、なぜかその多忙さが心地よく充実感がありました。また、伝えたいという一生懸命な想いは必ず生徒に伝わるということを学び、生徒の成長や変化を見ることにやりがいを感じました。また、私の授業を見た高校時代の恩師から「企業で経験した3年間は絶対に無駄じゃなかった。力をつけて帰ってきてくれて嬉しい。」と言ってもらい、自分の選んだ道に自信が持てました。

教職課程を履修するということは人生の選択肢が一つ増えるということだと感じています。教員をめざしていても、そうでなくても教職課程の中で学ぶことや、思考を凝らすことでの気づきはたくさんあり、その経験は企業でも活かされます。在学中は就職活動やゼミ、アルバイトなど、やりたいこと、やらなければならないことがたくさんあると思います。ですが、その中で教職課程を修了したということとは必ず、やり切ったことに対する達成感と自信に繋がります。

私は4月から母校で教壇に立ちます。今までの人生の中で経験した成功談も失敗談もすべてを武器にして生徒たちに、今を一生懸命頑張ることの大切さを伝えたいです。そして教職課程で学んだことを活かして、今後もさらに学びを深め、生徒たちと共に成長し続けていきたいと感じています。

教育実習は、教職課程のご褒美だ

科目等履修生

教育実習を終えて、まず一番に感じたことだった。この言葉は、教職科目の授業の中で私がお世話になった、I先生が仰っていた言葉である。3週間の実習を通じて、この言葉の意味について身をもって実感することができた。なぜ、辛くて大変だった実習を「ご褒美だ」と感じることができたのか。そ

れは、実習前には想像もできなかったほどの大きな達成感や、学びを得ることができたからである。

私が教職課程を履修し始めたのは友人の影響だった。赤裸々に話すと、初めは「免許があつて損なことはないな」という軽い気持ちで履修することを決断した。しかし、教職課程を履修し始めてしばらく経った2年次生の終わり頃、その気持ちに変化があった。授業のつくり方はもちろん、子どもの発達や学校経営等の専門的な知識を学ぶにつれて、漠然としていた「教師」という職業の解像度が着実に上がっていき、それがいつしか憧れに変わっていった。その頃から、「英語を話す楽しさをもっと広めたいな」と強く感じるようになった。

教職課程を履修するにあたって、様々な困難もあった。模擬授業を行う授業では、思うように授業計画を立てられず、課題を終えるのに何日もかかった。また練習とはいえ、実際に教壇に立って学生らの顔を見ると想像以上に緊張してしまい、計画通りに授業を進められないもどかしさや悔しさを味わった。そしてもちろん、実習中にも同じような経験をした。精一杯準備していても、いざ教壇に立つと頭が真っ白になり上手く話せなかったり、生徒たちから投げかけられる質問に上手く答えられず落ち込んだりすることもあった。また実習中の作業の量は自分が想像していたよりも多く、帰宅してから焦って作業を進める日もあった。さらに、翌日の授業のことを考えると緊張して眠れない日もあった。しかし今振り返ると、そんな辛かった思い出もすべて今の私を作る糧となったように感じる。

実習中に印象的だったのは、「自分の努力したこと多くは、きちんと結果として返ってくる」ことである。生徒たちの名前を覚えるために、自分から積極的に話しかけるようにし、話した内容をノートに記録していった。それらを見返し何度も読み返したことで、最初の1週間でクラス全員の名前を覚えることができた。その後は、積極的に会話の中で名前を呼ぶようにしたり、以前話した内容をもう一度話題にしたりするようにした。その結果、生徒たちも徐々に心を開いてくれたように感じた。今度は、生徒たちの方から、よく話しかけてくれるようにな

った。この経験から、自分から働きかけることの大切さを学んだ。

教職課程を履修した経験は、私にとって何にも代えがたい貴重な財産となった。学校の生徒たちや現

場で働かれている先生方との関わりのなかで、本当にたくさんのことを学ばせていただき、まさに、これまで教職課程を履修し続けた「ご褒美」だった。

2. 教員採用試験合格体験記

合格体験記

学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次

採用試験の勉強を始めたのは3年の12月頃からです。私は一般教養の範囲にかなり不安があったことと、私立小学校の受験（教職教養の出題がない学校が多い）を考えていたため、一般教養の勉強から始めました。一般教養のテキストと問題集を購入し、隙間時間にテキスト等を読み込んでインプット・問題集を解いてアウトプットを繰り返していました。春休みからは、9時から17時まで学校で勉強し、その後カフェなどに場所を変えて21時頃まで勉強することを繰り返していました。この間、気をつけていたことは、毎日ご褒美の時間をつくることです。私は自分に甘く、やる気が出るまで時間がかかる一面があるので、夜にゲームや音楽鑑賞をしたり、勉強を始める前に絵を描いたりするなど、勉強ばかりの生活が苦痛にならないように工夫していました。

さらに、春休みから佐藤先生にお願いし、小論文の学習も始めました。小論文は書けば書くほど上達するため、早めの対策が吉だと思います。また同じ夢を志す友人と集まって勉強したり模擬授業しあったりすることもありました。

4年次生になってからは学習がさらに本格化し、先生方の協力を得ながら学んでいきました。教職教養の勉強は4月から始めましたが、京都市は教職教養の配分が少ないこともあり何とか間に合いました。この頃からやるが増え一般教養まで手が回らなかったため、早めに一般教養を学習しておいて良かったと思います。

受験する私立小学校を選びだしたのは5月頃からです。複数の教員採用サイトに登録して求人情報を得たり、私立小学校説明会に参加したりして自分に合う学校を探しました。例え就職したい学校があ

ったとしても、その年に採用が出るかどうかは運であるため、幅広い視野を持って複数の学校を見た方がいいと思います。また、少しでも興味がある学校から求人情報が出た場合、とりあえず応募していました。全部で6～7校応募したように思います。エントリーシートの記入や志望動機等の添削は大黒先生の力をお借りしました。

6月に教育実習が終了してからは、最後の追い込みとして一般教養の勉強を再度行うとともに、先生方の力をお借りし個人面接の練習や模擬授業などに特に力を入れて取り組みました。また京都市ではグループディスカッションもあったため、仲間とグループディスカッションの練習を行いました。中川先生に zoom で見ていただくこともありました。

京都市の筆記試験終了後は私立小学校の試験に本格的に力を入れました。私立小学校は学校によって試験形態がさまざまなため、かなり大変でした。（体育の実技がある学校もあり、ラジオ体操、バスケットボール、マットなど幅広く見られました。）しかしどの学校も小論文、個人面接、模擬授業は必ずあったため、早めに対策していたのが功を奏しました。

以上の経験から伝えたいことは主に3つあります。1つ目は、早めに取り組みば取り組むほど良いということです。できるだけ勉強せずに遊んでいたと思う気持ちも分かりますが、電車の時間や髪を乾かしている時間など、少しの時間でも学ぶことができるので、教員採用試験を受けると決めた日から何かしらアクションを起こすことをおすすめします。

2つ目は先生方の力を大いに借りることです。自分一人でも何かもこなすのは無理があるので、遠慮せず先生方をお願いするのが良いと思います。同志社女子大学には経験豊富でビシバシ指導して下さる先生がたくさんいらっしゃるの、先生方と一緒に頑張ってみてください。（合格後の報告もお忘れなく！）

3つ目は能動的に行動することです。特に私の代

は、私立小学校を受験する人が周りにおらず、学校によって受験形態が様々なため悩んだこともありました。そのため学外の力を借りたり、興味のある学校について調べたり能動的に行動することを心がけました。結果的に私は母校の小学校に就職しましたが、様々な学校を観たことで、子どもに学ばせたい力は何なのか考え直すきっかけにもなりました。

今から受験勉強を頑張る皆さんが夢を叶えることができるよう、応援しています。

悔いのない大学生活を！

学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次

私の口癖は、「なんとかなる」です。これは物事を投げ出す意味ではなく、前向きに捉えることで自分に自信をつける意味合いで使っています。「なんとかなる」と信じたから、私は大学 4 年直前の春休みにオーストラリアへ短期留学をするという選択をしました。在学中に海外へ留学したいという夢があり、コロナ等の影響で留学に行けるのがやっとのチャンスでした。教員採用試験前に行くことに対して大きな不安はありましたが、今だからこそできることを大切にしたいと考え、短期留学へ行きました。結果として、自身の大きな武器になり、面接等で活用することができました。

面接練習は、大学 3 年の秋学期から少しずつ始まりました。本格的に面接練習をしたのは大学 4 年の直前期です。面接は練習した量が自信につながるため、話すことがまとまっていなくても、ボロボロの状態でも、人と緊張した空間で話す練習をすることが大切だと思います。面接の時間内で、自分がどんな人かを伝えるために何をすればいいかを考えて本番に臨んでいました。私は緊張すると顔が強張ってしまうため、面接官から「今日は緊張していますか」と聞かれたら、そこが笑顔を見せるチャンスだと思い、とびきりの笑顔を見せてアピールしていました。すると、面接官も笑ってくれるため、場が和

んで安心して面接を受けることができました。

筆記の勉強は、正直勉強時間がかかなり少なかったと思います。本命受験地の神戸市は大学推薦をいただいたおかげで筆記試験が免除されたので、面接練習に時間を割きました。併願で他県を受験するために筆記試験の勉強を行ったため、受験する県の過去問を一冊分解いて傾向を把握しました。

教員採用試験の準備や勉強は長期戦です。それを耐え抜くことができたのは、いつも一緒に頑張っていた仲間や、ご指導してくださった先生方、そして最後まで支えてくれた家族の存在があったからです。感謝の気持ちを忘れず、これからの教員人生も「なんとかなる」と自分を信じて頑張ります。

教員採用試験を終えて

学芸学部音楽学科音楽文化専攻 4 年次

私は大阪府と兵庫県の教員採用試験を受験しました。そしてどちらの自治体でも合格することができ、4 月からは大阪府の教員として働かせていただきます。

私は音楽学科です。大学 4 年間は音楽の専門性に加え、小学校教員としての専門性や子どもとの関わり方を学びました。どちらの学びも自分にとって刺激的で、小学校・中学校どちらの校種にも魅力を感じたため、大阪府の「小中いきいき連携」での受験を決めました。

「先生になりたい！」と思ったのはいいものの、何から手をつけ、どうやって勉強したらよいかかわらないと思っている方は多いと思います。どのように試験に向けて準備していたのか、私の勉強方法を 2 つ紹介します。

1 つ目に、教員採用試験用の参考書を何度も繰り返し解くということです。社会や理科、教職教養などの暗記科目は、参考書を赤シートで隠しながらノートに単語を書いたり、唱えたりしながら暗記しました。特に苦手意識のあった数学は、参考書の問

違えた問題を何周も繰り返し解き直しました。

2つ目に、自分の教育に対する考えや意見を持つということです。日頃から教育時事やニュースに目を向け、自分なりの考えを持ったり、気になる教育用語があれば調べたりして知識を取り入れていました。また小学校でボランティアを行い、先生という仕事に直に触れ、子どもたちとの関わり方を学びました。実際の学校現場を自分の目で見ることが、自分の教育観を形づくる上で役立ちました。そしてこれらのことを、自分の言葉でノートにまとめ、面接練習や小論文対策などの中で、インプットとアウトプットを繰り返すことが大切だと思います。

最後になりましたが、上記のことに加え、何よりも私が頑張る活力になったのは、同じ志を持つ仲間や先生方の存在です。今まで一緒に勉強してきた仲間や、教員採用試験に向け面接や模擬授業、小論文対策をしてくださった先生方に感謝しています。1人で頑張ろうとせず、周りの仲間や先生方の助けを借りながら、自分の視野を広げ、学びを深めていくことが大切だと思います。皆さんも合格に向け、頑張ってください。

これまでの自分を信じて

学芸学部メディア創造学科 2021 年度卒業生
京都教育大学大学院連合教職実践研究科 2 年次

京都教育大学大学院連合教職実践研究科で学ぼうと思ったのは、小学校のボランティア先で授業中に教室から飛び出してしまう児童と出会い、支援・指導の方法の在り方について学びたいと思ったからです。もともと、高校情報教諭の免許を取得しようとしていたのですが、コロナ禍で ICT が小学校で導入されたことをきっかけに小学校へボランティアに行き、小学校教諭に興味を持ちました。その時に「学校」という場が児童にとって一体どのような場所であるのが良いのかについて考え、「教育」についてもっと学ぶ必要性を感じました。

そこで、数箇所の大学院を調べ、その中で理論だけでなく、実践も重要視している京都教育大学の大学院に行くことを決めました。同時に、大学 4 年次の時に通信で小学校教諭の免許取得のための勉強も始めました。

大学院の学びは多岐に渡り、連携校での実習、フィールドワークなどの実践も踏まえて授業で理論について考えられるため、学校教育をより深く学ぶことができました。また、他校種の院生や現職教員の院生の方々とも交流することができるので、幅広く教育について意見交流しながら知見を広げることもできました。

教員採用試験の勉強を始めたのは、採用試験の 1 年半前くらいからです。まず始めたのは、自分が受ける自治体の試験内容について調べることです。自治体によって出される傾向が大きく変わるので、各自治体の教育委員会の指針なども含めて、出題傾向の確認をし、勉強を進めていきました。小論文・討論・面接に関しても、傾向を掴むため、過去の出題等をみながらいろいろな先生や友達と何度も練習を重ねました。より言葉に説得力を持たせるために、ボランティアや実習などの経験を踏まえて語るよう心がけていました。実際に試験を受けてみて、大学で勉強したことをどのように活かしていくか、今の教育課題について目を光らせ、その課題に対し自分の考えを持つておくことが重要だと感じました。模擬授業は私の場合、実習など実際の子どもたちをイメージし、いろいろな人に見てもらいながら、録画し確認することで徐々に良くなってきました。客観的に見てみることで課題点などが見えやすくなると思います。

試験は緊張しますが、準備をしていると自分の言葉として話すことができます。これから受験する方々には、これまで学んできたことに自信を持って取り組んで欲しいと思います。

11 年間の夢

現代社会学部現代こども学科 4 年次

「小学校の先生になる」という夢をくれたのは、小学 5 年生の担任教諭だった。内気で人前で話すことが苦手だった私を、恩師は学校運営に携わる計画委員会に勧誘した。恩師から直接その話を聞いたとき、私は驚きを隠せなかった。同時に、「なぜ私ですか？」と逆質問までしてしまった。人前に立つことが怖くて、学級委員長すら務めたことがなかった私が、いきなり学校を動かす委員になるのは、なかなか厳しい話だと思ったからである。逆質問をした私に恩師は、「あなたならできる」と答えた。しかし当時、別に入りたい委員会があった私は、小学 6 年生で計画委員会に入るという約束を恩師と交わし、別の委員会を選んだ。

約束通り、小学 6 年生になって計画委員会に入ると、挑戦の連続だった。学校全体を巻き込んだレクリエーションを主催したり、全校集会で司会を務めたり、運動会で閉会の挨拶を述べたり、それまで人前で話すことがなかった私にとっては全てが挑戦だった。しかし、委員の仲間と協力し、顧問である恩師が相談にのってくださったおかげで、全てを大成功に収めることができた。同時に、一つ一つの企画を終えるごとに、大きな達成感と充実感を味わった。1 年前の恩師の言葉を信じ、新たな一步を踏み出してよかったと心の底から思えた。「児童を信じて、児童の可能性を最大限に引き出す」。それを体感した私は、恩師に憧れを抱き、小学校の先生になることを決意した。

2020 年の春、この決意は変わることはないまま大学に入学した。新型コロナウイルス感染症によって制限されることは多かったものの、グループワークや模擬授業、指導案作り、教育実習、そして学科独自のイベントであるこどパを通して、こどもに関する知識だけでなく、社会性やコミュニケーション能力、変化対応力などさまざまな能力を身につけて

いった。そして大学 3 年次生の春休み、ついに私は夢を叶えるために、教員採用試験を受験することを決めた。

教員採用試験を受験することを決めた後からは、自分との闘いだった。筆記試験のために参考書を買って勉強するだけでなく、大学内の教職課程センターにもほとんど毎日通い、購入した参考書だけでは補いきれなかった分の問題や過去問にも積極的に取り組んだ。大学で開講されていた教員採用試験のための授業にも参加し、多くの先生方や友達と面接練習や小論文の練習に励んだ。時には、直接、先生にアポを取り、先生方のお忙しい時間を割いていただきながら、面接練習をしたこともあった。しかし、同じことの繰り返しで続く日々の中で、1 番の課題は、筆記試験の勉強にやる気が起きなくなっていたことであった。筆記試験の日程が近づくにつれ、問題や過去問を繰り返し解くようになると、「これ以上何を頑張ればいいのか。」と思ってしまうことが何回もあった。ノルマもゴールもなく、一人で行う筆記試験の勉強は、自分ではまだ完璧ではないと分かっていても、自分で自分を奮起させることがとても難しかった。特に、周りの友達が就職活動を終え、将来が決まっている話を聴くと、不安だけが募っていた。

そこで私は、1 週間に 1 回は遊ぶこと、午後は必ず大学で勉強することを決め、勉強を進めた。遊びの予定は、その日を全力で楽しんで遊ぶために今日の勉強を頑張るという活力になっていた。午後は必ず大学で勉強をすることで、睡魔に負けず、集中して勉強に励むことができた。また、大学での周りに勉強や課題をしている人がいるという環境によって、「自分もやらない」という気持ちに切り替えることができていたように思う。

このようにメリハリをつけて勉強し、自分で納得するくらいまで、先生方や友達と面接練習や小論文対策を行ったことで、念願の小学校の先生になることができた。11 歳から憧れ続けた夢が実現すると思うと、今はわくわくした気持ちでいっぱいである。夢を実現するために多くの時間を割き、お力添えいただいた先生方や一緒に頑張ってくれた友

達には、本当に感謝しかない。そして、11歳の私に「小学校の先生になる」という夢を与えてくれた恩師にも感謝の気持ちを伝えたい。将来の夢を与えてくれた街で、憧れ続けた先生になって、あのとき精一杯頑張った自分に誇りをもちながら、これからも歩み続けたいと思う。

自己分析について

現代社会学部現代こども学科4年次

私は教員になるにあたって高い志がある訳でも、何年も前から勉強をしていた訳でも無いので、あまり多くのことは書けませんが、その代わりに教員の道を選ぶまでにたくさん迷った期間があったことで気づいたことを書きたいと思います。

進路に迷っていた時期に就職活動をしようと思った時期がありました。まず何をしたらいいか迷っていた時に、周りの大人やネットの情報から自己分析をしなければいけないことが分かりました。それじゃあ自己分析をしないと、と思ったわけですが、就職活動の情報を全然知らなかった私は自己分析とはなにか分かりませんでした。ネットで調べてみても、自分の情報を書き出せや、自分の過去を振り返りなど、どれも大雑把なことしか書いてありませんでした。全然参考にならないなと思い、自分なりに自己分析について考えて導き出したことを以下に書きます。

それは自己分析＝自分のタイプ診断ということです。なんだそれ？と思うかもしれませんが、1度考えて見てほしいです。例えば、自分はパンかご飯どちらを食べれば朝元気になるかな、過去を振り返って多分パン派やなあ。早起きして勉強するか、夜遅くまで頑張るかどっちが集中できるかなあ、夜派やなあ。このような感じです。こんなもの意味があるのかと思ったかもしれませんが、例で示したもので言うと、パン派と分かれば、面接に行く朝パンを食べれば上手くいきますし、勉強の捗る時が分かれば

それに合わせてスケジュールを考えることができます。他にも私は1回目で必ず上手くいかず、2回目の方が上手くいく派という人は本命の前に練習が必要ですし、人前で話すことがどうしても緊張してしまう派の人は誰かに対して話す練習が必要でしょう。自分がどのようなタイプかを知ることによってどんどん自分という存在に詳しくなっていくことができます。その結果自分の弱いところに対策ができます。このタイプ診断の積み重ねが世間で言われている自己分析であり、自己分析のメリットとはここにあるのだと実感しました。

私はこのタイプ診断の結果、自分がギリギリに追い詰められた時実力を発揮する派だと気づいたことで3月までの緩い勉強ののち4月から自分を追い込んで勉強することができ、家でできない派だと分かったことで無理にでも学校に行き勉強することにつながり、お昼ご飯を食べたあと必ず眠くなる派なのでその前に集中するものは終わらせることができたなど、自分の進路に役立てることができました。こんなもの分かっているという人が大半かもしれませんが、私にとっては世紀の大発見だったのでここに記しておきたいと思います。

今自分の進路に迷っている人や、勉強の方法に迷っている人は自分がどのようなタイプかを自分で診断して進路や勉強に役立てて欲しいなと思います。そして、進路に迷い、この勉強意味があるのかなと思うことはとても意味があることで、その工程を何度も繰り返すことでその事について何度も考え、後悔のない選択にたどり着くと思うので、決して自分を責めず残りの大学生の期間を謳歌してほしいです。

二兎を追わない者は一兎をも得ず

現代社会学部現代こども学科4年次

愛知県の教員採用試験に合格し、2024年度より

小学校教員として働かせていただきます。今回は、これから教員をめざす皆様に向けて、この合格をいただくまでに取り組んだことについてお伝えしたいと思います。

はじめに、私は8月まで愛知県と京都府に志願書を出し、受験勉強を行いました。愛知県は私の出身地、京都府は大学三年次生の時に京都府教員養成サポートセミナーというインターンシップに参加したことから出願を決め、どちらも一般受験で申込み、合格に対する思いも勉強に費やす熱量も平等に試験勉強に取り組みました。特に愛知県と京都府は筆記試験の内容や出題傾向がほとんど被らないためとても苦労しました。結果、京都府は一次試験の面接で落ちました。これから受験する皆様は同じように悔しい思いをすることがないように私の経験を生かしていただけたらと思います。関西圏では試験日程によって他府県を同時併願することが難しいため、受験する都道府県の選定に苦労することかと思います。試験内容が都道府県で大きく異なるため、過去問と向き合い決めてみてください。私のように試験内容が異なる地域を併願される方は時間の使い方が鍵になりますので、以下の試験対策を参考にしてください。

試験対策

第一に、筆記試験は教職教養・一般教養・専門教養（私の場合は小学校全科）・小論文の4つの分野があります。勉強を始めようと思っても何から始めればいいのかわからない場合、どの分野でも希望する自治体の過去問の二番目に新しいものを制限時間通りに解いてみてください。きっと解けない問題が多いと思いますが、なるべくすべての問題に目を通し、勘でもいいので答えてみてください。採点が終了したら、過去問の前の方に掲載されている出題傾向のチャートを見ながら出題傾向と自分の得意な分野を見つけてみてください。毎年出題されているような法律や知識は大学でプリントアウトして目を通し、出題箇所にもマーキングすると資料として活用しやすくなります。参考にしてみてください。どの分野でも必ず得手不得手はあります。教員採用試験を

受ける仲間で質問しあい、互いに高め合えるような関係を築いていけると勉強に対して孤独感が無くなりメンタルを安定させやすくなると思います。

第二に、面接試験は個人面接・集団面接・討論・模擬授業・場面指導等多くの種類があります。必ず受けた自治体の試験内容を確認してから対策を始めてください。大学の授業の中でも練習をしてくださる授業があります。シラバスを見て自分に必要な授業だけ受講することも効率的ですが、あえて自分の受験科目にない面接練習を受けてみることもおすすめします。「自分ならどう答えるか」を考えるとすることがとても大切です。また、テーマを用いて自分の受験科目の質問形態に変えて自分で回答を考えるということもできます。時事性のある事柄が出題されることが多いです。多くの教授に面接練習をしてもらうことで、より多くのテーマや時事性のあるテーマに触れてみると良いと思います。また、言葉に詰まる経験をしてください。面接は予想を超えた質問もあります。言葉が詰まったときにどう対応するか実践しておくだけで心が少し軽くなります。各自治体の掲げる方策等をよく頭に入れて、笑顔で明るく元気に応答できるよう万全の準備を行いましょう。

多府県を受験するということ

受験する自治体が多ければ多いほど勉強や対策の量は増えます。また、結果によって自信につながる場合と自信を失う場合があります。私の場合は後者でした。たとえ本命の自治体ではなくても失敗経験は自分の中に大きく残ります。特に落ちた原因が振り返っても分からない場合は疑心暗鬼になり、自分のすべてが教員に不適切であるように感じます。私の場合、落ちた後に愛知県の面接があったのでトラウマのように夢に出てくる日もありましたが、より慎重に丁寧に応答することを心がけ、試験官の言葉を注意深く聞くようになりました。この失敗のおかげで私は合格できたと思っています。これも結果論ではありますが。失敗から学ぶことができたのは2つの自治体で受験したからです。しかし、愛知県だけ受けていても受かっていたかもしれません。失敗す

ることより短時間で失敗と向き合い、乗り越えることが難しいです。受験する皆様自身に耐性があるか問いかけてみてください。もちろん、私の友人で多府県を受験して全て合格をいただいている方も多くいます。よく考えて決めてくださいね。

最後に、長い文章を読んでいただきありがとうございます。題名にもある通り、教員採用試験で2つの自治体を受けたからこそ今の合格があると思っています。教員採用試験も教育現場も日々変化しています。ぜひ、ボランティア活動等を通して児童が学ぶ教室や先生方の話し方、子どもと話す経験をしてください。志望動機が分からなくなった時、模擬授業や場面指導でスランプに陥った時、役立つのは子どもと過ごした経験です。皆様の教員採用試験受験が充実したものになることを願っています。

教員採用試験合格までの道のり

表象文化学部英語英文学科 4 年次

私は幼い頃から学校が好きで、ずっと先生になりたいと思っていました。そして、中学生の時に英語を好きになったことをきっかけに将来は英語教師になるという目標を立てました。その後、同志社女子大学での学びや4年次に行った教育実習を通して中学校で働きたいと感じ、中学校英語科で教員採用試験を受験しました。そして、無事に合格することができます。春から英語教師として働かせていただきます。今回は合格に向けて私が取り組んだことをお伝えします。

まず初めに、勉強は長い時間をかけて行いました。教員採用試験を受験する4年次には教育実習があり勉強をしようと思ってもなかなかできません。早めに動くことが大切だと思います。私は、2年次頃に受験する自治体を決め情報収集を始めました。ここで試験内容が分かるので、3年次になった頃から自分の苦手な分野を中心に勉強を始めました。具

体的に教職教養は参考書や授業での資料を活用して勉強を進め、知識がついてきたら過去問を解くようにしていました。また、教職教養と言っても自治体によって内容が大きく異なるため、過去問を分析し効率よく勉強を進めることをおすすめします。英語に関してはゼミで英語に多く触れていたため特別な対策はしていませんでした。ですが、自治体によっては TOEIC のスコアなどで加点されることがあるのでそういったことに取り組むのも合格に近づく方法なのではないかと思います。また、教職教養などの暗記は1人で勉強することが多かったのですが、面接や場面指導などに関しては教員採用試験を受験する友人と一緒にに行いました。教員採用試験対策の授業以外にも授業後にそのまま教室に残って互いにアドバイスをしたり教員採用試験直前の夏休み中にはオンライン上で集まったりして毎日対策をしました。1人で勉強することもいいのですが、同じ夢を持つ仲間と一緒に取り組むことで、新たな発見をし、高めあえることができます。そして何より楽しみながら対策をすることができます。しんどく感じることもあると思いますがそういった時こそ誰かと一緒に勉強をしてほしいです。

最後に、私が教員採用試験を受け終わった後に抱いた感想は「楽しかった！悔いはない！」でした。点数が取れず合格できるのか不安で苦しい時期もありましたが、たくさんの時間をかけて取り組んだことで自分に自信を持ち、楽しむことができました。そして合格した時はたまらなく嬉しかったです。教員をめざす皆さんにもこの気持ちを味わってほしいです。これまで述べた私の経験が少しでも皆さんの支えになれば幸いです。応援しています。頑張ってください。

私の教採合格までの道のり

表象文化学部日本語日本文学科 4 年次

ご縁があり、来年度から熊本県の中学校国語科の

教員に採用されることとなった赤崎羽衣です。これを読んでくれている皆さんのお力に少しでもなれるよう、私が教員採用試験を受けるまでの道のりを書かせていただきます。

私が教員になることを決意したのは、大学3年次生の12月でした。昔から教員になることが夢だったため、1年次生の頃から教員免許を取るための必修の授業を受けていました。しかし、受講していくにつれ、私に教員という大役を務めることができるのかなど、とても不安な気持ちになっていきました。そのため、3年次生になると必修を受けながらも周りの友達と一緒に就職活動の説明会に参加していました。多くの企業の説明会に参加するにつれ、自分が何をしたいのか分からなくなり、躓いていました。それが3年次生の12月です。そんな私に手を差し伸べてくれたのは家族でした。「教員になりたい」と言っていた私自身を信じてくれており、「あなたなら教員になれる」と直接言ってくれました。それが後押しとなって、私は教員になると決断しました。

正直、他の人よりスタートは遅かったと思います。加えて、私は自分だけで行動するのが苦手です。なので、最初に自分が受ける自治体である熊本県の東京アカデミーのオンライン無料相談を申し込みました。相談では、過去の熊本県教員採用試験では、どのような内容だったかや絶対に抑えておくべき項目は何か、最新の教育時事は何があるかなど主に試験についての質問をしました。データをもとに多くのアドバイスをいただけて、とても参考になりました。その時に、有料のオンライン講座があることを教えていただき、私は専門科目の授業のみ受講していました。1回だけではなく、何度も相談できたので、関西以外の自治体を受ける方は自分の受ける自治体の情報を知ることができる良い方法だと個人的に思います。それと同時進行で、過去問を解き、試験問題を分析していました。筆記試験はもちろん、小論文や面接も過去問をもとに何が問われているのか、出題傾向はどうなっているかをひたすら解いて見つけていきました。1人でやるときもありましたが、教員採用試験を受ける友達と一緒にやっ

ている時の方が多かったです。人に見てもらうことで、新たな視点や問い・アイデアをもらうことができ、お互いに対策することができました。

長くなりましたが、私が皆さんに伝えたいことは『悩むことも大切であること』と『自分1人だけではないこと』の2つです。教員になるか就職するか悩んでいる当時はとてもきつかったですが、今ではこの悩みがあったから、選んだ道に自信を持てています。また、そのときに支えてくれた家族・一緒に頑張った友達がいたからこそ、乗り越えられた壁がありました。これから先、皆さんが私のようにたくさんの難題とぶつかっていかれるかもしれません。それを乗り越え、自分の将来に向かって頑張っていくことを遠くからではありますが、応援しています！！

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！

自信を持つこと

表象文化学部日本語日本文学科4年次

「あなたが教師をめざす理由はなんですか？」私は、この質問に答えることが苦手でした。これまでの私は、「教師になりたい！」と強く思ったことはなく、教師をしている両親を見て、小さい頃から「私も将来は教師になるんだろうな」くらいにしか考えたことがなかったからです。だから、面接指導で冒頭の質問をされたとき、私は「両親が教師をしているのを見てきたからです」と答えました。すると、先生から「世襲制ですか？」と返されてしまいました。その時に初めて、「私ってなんで教師をめざしているんだろう？」と本気で考えることになりました。私は、将来の夢を聞かれたら迷わず「教師」と答えていたし、私の中で、教師になるという選択以外はありませんでした。しかし「なぜ教師になりたいのか」という、最も大切とも言える部分が私の中にはありませんでした。そこで、これまでの

学校生活を振り返ったり、自分自身を振り返ったりして、「私は、なぜ教師をめざしているのか」を考えてみました。

結論を言うと、私は今でも自分が「教師をめざす理由」をしっかりと答えることはできません。面接指導や教員採用試験では、「中学校で出会った〇〇先生に憧れて」や、「私は学ぶことが好きで、探究心があるから教師に向いていると思う」という風に答えてきましたが、それらは、何か違うような気もしてしまうのです。もちろん、本番はそんな迷いも見せず、「私が教師をめざす理由はこれだ！」と自信満々に答えてきました。そこで、私は、全てが事実である必要はない、時には、自分自身を演出することも大切だと学びました。たとえ、それが本当の自分でなくても、また、自分の一部に過ぎないとしても、大切なのは、いかに「この人は本当に教師になりたいんだ」、「この人を採用しないと損だ」と相手に思い込ませることができるかどうかだと思います。もしかしたら、これは、教員採用試験以外の場面にも当てはまることかもしれません。では、相手に思い込ませるために何が必要かというと、それは「自信」だと思います。私は「自信」を持つために、とにかく知識と情報を獲得するということを意識していました。教職・一般教養、専門教科の勉強をするのはもちろん、受験する県の教育方針や教育の特徴を知る、教職課程センターにある教職関連の雑誌を読んで、教育のトレンドや教育現場の実際を知るといったこともしていました。そのため、「できることは全部やった、これで私のことを落とすなんてありえない」というくらいの強い気持ちを持って、試験当日を迎えることができました。そう思えるほど多くの時間を費やしてきたからこそ、私は、自信を持つことができたのだと思います。また、少しでも多くの知識を持つておくことは、小論文や面接の時に、全く知らないことを聞かれて何も答えられなかったという状況を回避することにもつながると思います。「教師をめざす理由」は人それぞれにあって、それは時間が経つにつれて変化したり、教師をめざすことに迷いが生じたりすることもあるでしょう。

私も、4月から教壇に立つことが決まっている今でも、「本当に教師でよかったのかな、私に教師なんてできるのかな」と迷いや不安が生じることもあります。しかし、そんなことを考えていても仕方ないのです。「やるしかない」と決めて前に進んでいけば、大抵のことはどうにかなると思います。私は、これまでもそんな気持ちでさまざまなことを乗り越えてきました。自分にどんな仕事に向いているのかなんて、ほとんど分からないと思います。けれど、自分で「これをやる！」と決めて、それに向かって突き進めば、自信をもって道を切り拓いていくことができるのではないのでしょうか。皆さんも、自分が決めた将来に向かって全力で突き進んでください。

チャンスをつかむ

生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻 4 年次

私が栄養教諭を志したのは高校受験の頃である。それから一度も将来の夢が変わったことはなかった。これまでの進路選択はすべて栄養教諭になるという夢をかなえるためだった。絶対に栄養教諭になりたいという強い気持ちが合格に一步近づけた理由とを感じる。

大学入学後は教員免許取得に必要な単位を取得しながらも、出身の中学校で学校ボランティアとして働いた。同窓会に参加した際、中学校の担任の先生に声をかけていただきボランティアをすると決めた。その中学校では小学校の頃にお世話になった栄養教諭の先生が勤務されていた。私が給食を大好きになり、栄養教諭を志すきっかけをくれた先生だ。そんな憧れの先生から栄養教諭の仕事をそばで教えていただき、教育現場の様子を知り、多くの生徒と関わりを持つなど毎日が教育実習のような日々で教員をめざすうえで大きな財産となった。

ボランティア活動をする中で、中学校の先生方が日々生徒の成長を喜び、忙しいながらも楽しそうに

勤務されている様子を近くで感じ、栄養教諭に限らず教員という仕事に対し大きな魅力を感じるようになった。また、教員採用試験前には模擬授業の練習の機会を設けてくださり、校長先生をはじめとする現職の先生方から貴重な意見をいただき授業のブラッシュアップにつながった。今思い返せばこのような学校ボランティアでの経験が教員採用試験合格に大きく役立ったのではないかと感じる。

もう一つ教員採用試験合格に大きな影響を与えたのは教職実践演習の授業とそこで知り合った仲間だと考える。面接対策では数えきれないほど心が折れ悔しい思いを何度もしたが、それを乗り越えた学生同士の間には必然的に仲間意識が芽生えていた。授業時間外にはそれぞれの自治体の情報を共有し、夏休みに入ってもオンラインで面接や模擬授業の対策を繰り返し行った。一人では行き詰ってしまうこと

も多い中で、同じ目標を持つ仲間の姿は自分を奮い立たせる良い刺激となっていた。それぞれの授業や教育実習の経験からアドバイスをもらうことで何倍もよりよい模擬授業を考えることができた。

これまで記してきたように、私は周りの人や環境に非常に恵まれ、たくさんの尊敬できる先生方に出会うことができ、本当に運が良かったと思う。このことをボランティア先の先生に話した時、「これは単に運がよっただけでなく、栄養教諭になりたいという強い気持ちや、まっすぐな姿勢でチャンスを逃さず掴み取ってきたあなただから人も環境もよくなったのだろう」と言っていたことがある。そこで初めて、チャンスを自分で掴んできたのだと気がついた。4月からも常に目標を持ち、何事にも積極的に取り組む姿勢で夢だった栄養教諭として働こうと思う。



授業での先輩講和の様子



教職特別演習でのグループワーク

第 5 部

教職課程情報公開資料
(各種統計データ・参考資料)

2023 年度教職課程センター教員 学生相談受付状況（2023 年 4 月から 2024 年 3 月まで）

【相談内容別内訳】

相談内容	件数
進路相談（教員採用試験、一般就職活動、大学院進学等）	23
受験相談（学習方法、専願併願、受験地等）	20
教員採用試験に関する情報提供	6
書類添削（PR シート、履歴書、願書等）	59
面接指導	92
論文指導	20
模擬授業	34
場面指導	5
連合教職大学院	1
受験報告（受験、可否）	49
授業相談（卒業論文含む）	6
合計	315

【学科別内訳】

学科	件数
音楽学科 演奏専攻	33
音楽学科 音楽文化専攻	45
メディア創造学科	4
国際教養学科	0
社会システム学科	5
現代こども学科	180
医療薬学科	0
看護学科	6
英語英文学科	7
日本語日本文学科	17
人間生活学科	7
食物栄養科学科 食物科学専攻	0
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	4
音楽専攻科	0
大学院	7
科目等履修生	0
合計	315

【学年別内訳】

年次	件数
1 年次	7
2 年次	12
3 年次	27
4 年次	262
専攻科	0
科目等履修生	0
卒業生	7
合計	315

2023 年度教職課程センター利用状況（2023 年 4 月から 2024 年 3 月まで）

【京田辺キャンパス】

	利用目的（件数）								来室人数
	資料閲覧	資料コピー	質問	面談申込	各種申込	自習利用	貸出	その他	
4 月	49	92	6	4	0	1	2	20	174
5 月	32	90	5	0	2	9	6	5	149
6 月	34	130	2	2	0	79	11	14	272
7 月	44	85	5	2	4	71	4	26	241
8 月	24	36	0	2	0	15	0	16	93
9 月	8	10	1	1	0	1	0	10	31
10 月	5	6	3	2	0	1	0	7	24
11 月	6	9	1	0	0	1	0	12	29
12 月	14	14	2	0	0	1	0	5	36
1 月	5	11	13	0	0	2	1	9	41
2 月	0	3	2	1	0	2	3	3	14
3 月	7	4	0	4	0	2	6	5	28
合計	228	490	40	18	6	185	33	132	1132

【今出川キャンパス】

	利用目的（件数）								来室人数
	資料閲覧	資料コピー	質問	面談申込	各種申込	自習利用	貸出	その他	
4 月	6	10	23	1	1	12	0	9	62
5 月	1	17	7	0	0	5	0	11	41
6 月	1	17	9	1	0	12	0	2	42
7 月	4	9	6	0	2	12	0	9	42
8 月	3	3	0	0	0	3	0	2	11
9 月	2	2	4	0	0	0	0	3	11
10 月	1	6	2	0	0	0	0	3	12
11 月	4	3	0	0	0	0	0	2	9
12 月	3	5	2	2	0	1	0	3	16
1 月	5	4	0	0	0	0	0	1	10
2 月	4	3	0	0	0	1	0	0	8
3 月	0	2	1	1	0	0	0	1	5
合計	34	81	54	5	3	46	0	46	269

2023 年度 専任教諭採用試験合格者実数
※公立・私立合わせての数

	幼稚園・保育園		小学校		小・中		中学校		高等学校		中・高		特別支援学校		高等専修学校		その他		合計
	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	現役	既卒	
音楽学科	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	5
メディア創造学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
社会システム学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現代こども学科	14	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
看護学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
英語英文学科	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	6
日本語日本文学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
人間生活学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
音楽専攻科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大学院	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
科目等履修生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	14	0	22	0	2	0	0	0	3	0	12	0	0	0	1	0	0	0	54

小計	現役	既卒
	54	0

※複数校合格している学生も1人としてカウントしています。

※認定こども園合格は、幼稚園・保育園枠でカウントしています。

2023 年度 常勤・非常勤講師採用実数
公立・私立合わせての数

	幼稚園		小学校		中学校		中・高		高等学校		その他	特別支援学校	日本人学校	合計
	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤				
音楽学科	0	0	3	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	7
メディア創造学科	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
社会システム学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現代こども学科	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	6
看護学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
英語英文学科	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
日本語日本文学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
人間生活学科	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
音楽専攻科	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
合計	0	0	8	1	2	1	1	1	5	2	1	1	0	23

2023 年度 教育職員免許状取得件数

学科	教科	幼 1 小 1	小 1 のみ	幼 1 のみ	小 1 中 1 高 1	中 1 高 1	中 1 のみ	高 1 のみ	養 1	栄 1	取得者 総計	卒業生 数	取得率
音楽学科	音楽	0	0	0	5	39	0	8	0	0	52	103	50.5%
メディア創造学科	情報	0	0	0	0	0	0	9	0	0	9	123	7.3%
社会システム学科	社会のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	294	2.7%
	地理歴史のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	公民のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	地理歴史 公民	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	社会 地理歴史	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	社会 公民	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	社会 地理歴史 公民	0	0	0	0	8	0	0	0	0	8		
現代こども学科		47	3	41	0	0	0	0	0	0	91	96	94.8%
看護学科		0	0	0	0	0	0	0	13	0	13	89	14.6%
英語英文学科	英語	0	0	0	0	21(1)	0	3	0	0	24(1)	149	16.1%
日本語日本文学科	国語	0	0	0	1	12	0	9	0	0	22	115	21.7%
人間生活学科	家庭	0	0	0	0	4	0	5	0	0	9	101	8.9%
食物栄養科学科 食物科学専攻	家庭	0	0	0	0	3	0	1	0	0	4	53	7.5%
食物栄養科学科 管理栄養士専攻		0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	85	3.5%
合計		47	3	41	6	87	0	17	13	3	235(1)	1,208	19.5%

() 科目等履修生 外数

大学院研究科専攻 専攻科	教科	中専 高専	中専 のみ	高専 のみ	取得者 数
文学研究科 英語英文学専攻	英語	0	0	0	0
文学研究科 日本語日本文化専攻	国語	1	0	1	2
	音楽	0	0	0	0
文学研究科 情報文化専攻	情報	0	0	0	0
国際社会システム研究科 国際社会システム専攻	公民	0	0	1	1
生活科学研究科 生活デザイン専攻	家庭	0	0	0	0
生活科学研究科 食物栄養科学専攻	家庭	0	0	0	0
音楽専攻科	音楽	4	0	1	5
合計		5	0	3	8

() 科目等履修生 外数

教育職員免許状取得率 推移表（学科別）

	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016
音楽学科	50.5%	44.6%	50.0%	47.5%	57.9%	42.6%	44.0%	52.9%
メディア創造学科 (情報メディア学科)	7.3%	1.8%	1.6%	1.6%	4.0%	0.8%	2.9%	2.1%
社会システム学科	2.7%	3.3%	4.1%	4.1%	2.6%	5.2%	5.1%	4.0%
現代こども学科	94.8%	95.6%	96.6%	96.4%	94.3%	92.4%	92.3%	92.5%
看護学科	14.6%	17.6%	3.8%	14.3%	8.1%	19.5%	0.0%	0.0%
英語英文学科	16.1%	18.5%	12.8%	14.9%	12.1%	20.1%	16.2%	15.5%
日本語日本文学科	21.7%	20.7%	16.0%	23.1%	17.2%	18.9%	24.7%	22.8%
人間生活学科	8.9%	8.3%	11.6%	3.3%	12.8%	14.1%	11.1%	9.9%
食物栄養科学科 食物科学専攻	7.5%	2.0%	8.2%	7.6%	2.0%	7.6%	6.9%	10.3%
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	3.5%	2.6%	5.2%	2.1%	6.5%	5.3%	6.8%	5.4%

2023 年度 教育実習状況
(幼稚園・小学校：3 年次生・4 年次生、中学校・高等学校：4 年次生)
月別実施状況（実習開始日基準による）

	音楽学科	メディア 創造学科	社会 システム 学科	現代 こども 学科	看護学科	英語 英文学科	日本語 日本文 学科	人間生活 学科	食物栄養 科学科 食物科学 専攻	食物栄養 科学科 管理栄養士 専攻	合計	% (科目等履 修生除く)
4 月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.4%
5 月	34	2	6	0	13	18	11(1)	6	2	0	92(1)	37.9%
6 月	15	5	0	0	0	6(2)	3	1	0	0	30(2)	12.3%
7 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
8 月	2	0	1	1	0	0	3	1	2	0	10	4.1%
9 月	5	2	1	58	0	1(1)	3	1	0	3(1)	74(2)	30.5%
10 月	1	0	0	30	0	0	2	0	0	0	33	13.6%
11 月	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3	1.2%
1 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
未定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
合計	58	9	8	92	13	25(3)	22(1)	9	4	3(1)	243(5)	

() は、科目等履修生数 外数

実習生比率（GK 追加実習生、科目等履修生を除く）

	音楽学科	メディア 創造学科	社会 システム 学科	現代 こども 学科	看護学科	英語 英文学科	日本語 日本文 学科	人間生活 学科	食物栄養 科学科 食物科学 専攻	食物栄養 科学科 管理栄養士 専攻	合計
GK：3 年次生 GK 以外：4 年次生 総数	111	141	310	97	95	162	123	104	54	87	1284
実習登録者数 (O 追加実習分・GK 追加実 習・科目等履修生を除く)	55	9	8	92	13	25	22	9	4	3	240
%	49.5%	6.4%	2.6%	94.8%	13.7%	15.4%	17.9%	8.7%	7.4%	3.4%	18.7%

3 年次生、4 年次生の総数は、1 月 1 日現在です。

幼稚園・小学校・中学校・高等学校別実施状況
(幼稚園・小学校：3年次・4年次、中学校・高等学校：4年次)

		音楽学科	メディア 創造学科	社会 システム 学科	現代 こども 学科	看護学科	英語 英文学科	日本語 日本文 学科	人間生活 学科	食物栄養 科学科 食物科学 専攻	食物栄養 科学科 管理栄養士 専攻	計
幼稚園	4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	9月	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	15
	10月	0	0	0	17	0	0	0	0	0	0	17
	11月	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	未定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	34	0	0	0	0	0	0	34
小学校		音楽学科	メディア 創造学科	社会 システム 学科	現代 こども 学科	看護学科	英語 英文学科	日本語 日本文 学科	人間生活 学科	食物栄養 科学科 食物科学 専攻	食物栄養 科学科 管理栄養士 専攻	計
	4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5月	1	0	0	0	9	0	0	0	0	0	10
	6月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8月	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	9月	1	0	0	43	0	0	0	0	0	2(1)	46(1)
	10月	1	0	0	13	0	0	0	0	0	0	14
	11月	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	未定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	4	0	0	58	9	0	0	0	0	2(1)	73(1)
中学校		音楽学科	メディア 創造学科	社会 システム 学科	現代 こども 学科	看護学科	英語 英文学科	日本語 日本文 学科	人間生活 学科	食物栄養 科学科 食物科学 専攻	食物栄養 科学科 管理栄養士 専攻	計
	4月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	5月	20	0	4	0	3	14	4	4	1	1	51
	6月	11	0	0	0	0	4(1)	1	0	0	0	16(1)
	7月	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	8月	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3
	9月	3	0	0	0	0	0(1)	0	1	2	0	6(1)
	10月	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	11月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	未定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	36	0	4	0	3	19(2)	8	5	3	1	79(2)
高等学校		音楽学科	メディア 創造学科	社会 システム 学科	現代 こども 学科	看護学科	英語 英文学科	日本語 日本文 学科	人間生活 学科	食物栄養 科学科 食物科学 専攻	食物栄養 科学科 管理栄養士 専攻	計
	4月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5月	13	2	2	0	1	4	7(1)	2	1	0	32(1)
	6月	4	5	0	0	0	2(1)	2	1	0	0	14(1)
	7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8月	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	3
	9月	1	2	1	0	0	0	3	0	0	0	7
	10月	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	11月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	未定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	18	9	4	0	1	6(1)	14(1)	4	1	0	57(2)
合計		58	9	8	92	13	25(3)	22(1)	9	4	3(1)	243(5)

() は、科目等履修生数 外数

教育実習実施状況 推移表（開始月別）

	2023	2022	2021	2020	2019	2019※	2018※
4月	1	1	0	0	0	0	0
5月	92(4)	85(4)	76(2)	0	84(1)	84(1)	103(3)
6月	30(1)	16(1)	17	4	36(1)	36(1)	44(2)
7月	0	0	0	0	0	0	0
8月	10	15	23	39(2)	9(1)	9(1)	8(1)
9月	74	80	81(2)	146(5)	112	114	115
10月	33	28	36(1)	64(1)	19	17	20
11月	3	6	5	12	3	3	1
1月	0	0	0	0	0	0	0
未定	0	0	0	0	0	0	0
合計	243(5)	231(5)	265(8)	263(3)	263(3)	291(6)	277(2)

※教育実習予定者数

教育実習実施状況 推移表（学科別）

	2023	2022	2021	2020	2019	2019※	2018※
音楽学科	58	48(3)	67(1)	62(2)	78(1)	78(1)	74(1)
メディア創造学科 (情報メディア学科)	9	2	2	2	5	5	1(1)
社会システム学科	8	9	13	12	8	8	16(1)
現代こども学科	92	95	92	118	109	109	104
看護学科	13	15	3	11	6	6	15
英語英文学科	25(3)	26(1)	21(3)	24(4)	18(2)	18(2)	35(2)
日本語日本文学科	22(1)	26(1)	22(1)	26	22	22	24
人間生活学科	9	7	10	3	10	10	14
食物栄養科学科 食物科学専攻	4	1	4	5	1	1	5
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	3(1)	2	4	2(2)	6	6	3(1)
合計	243(5)	231(5)	265(8)	263(3)	263(3)	291(6)	277(2)

※教育実習予定者数

教育実習実施状況（学校種別）

	2023	2022	2021	2020	2019	2019※	2018※
幼稚園	34	44	33	47	52	52	32
小学校	73(1)	63	72	83(2)	74	74	85(1)
中学校	79(2)	84(5)	93(5)	94(4)	83(2)	83(2)	104(3)
高等学校	57(2)	40	35	41(2)	54(1)	54(1)	70(2)
合計	243(5)	231(5)	233(8)	263(3)	263(3)	291(6)	277(2)

※教育実習予定者数

科目等履修生は外数

中高一貫校は中学校でカウント

2023 年度 介護等体験実施者数

	3 年次	4 年次	科目等履修生	合計
音楽学科演奏専攻	50	0	0	50
音楽学科音楽文化専攻	22	0	0	22
社会システム学科	13	2	0	15
現代こども学科	58	1	0	59
英語英文学科	14	1	0	15
日本語日本文学科	16	0	0	16
人間生活学科	2	0	0	2
食物栄養科学科食物科学専攻	5	0	0	5
科目等履修生	0	0	3	3
合計	180	4	3	187

介護等体験実施者数 学科別推移

	2023 年度	2022 年度	2021 年度	2020 年度	2019 年度
音楽学科演奏専攻	50	40	29	41	32
音楽学科音楽文化専攻	22	15	9	19	24
社会システム学科	15	8	10	9	13
現代こども学科	59	53	58	66	59
英語英文学科	15	28	31	14	16
日本語日本文学科	16	17	26	16	20
人間生活学科	2	4	5	8	4
食物栄養科学科食物科学専攻	5	6	2	5	5
科目等履修生	3	3	7	5	2
合計	187	174	177	183	175

介護等体験実施者数 学年別推移

	2023 年度	2022 年度	2021 年度	2020 年度	2019 年度
3 年次	180	154	157	169	168
4 年次	4	17	13	9	5
科目等履修生	3	3	7	5	2
合計	187	174	177	183	175

特別支援学校、社会福祉施設の両方あるいはいずれかでの介護等体験実施者数。
2023 年度、2022 年度、2021 年度、2020 年度は介護等体験代替措置完了者数。

2023 年度 学校ボランティア活動状況（学科別）

	京都市 教育 委員会	京都府 山城 教育局	京田辺 「学校ボラン ティア」事業	大阪市 教育 委員会	大阪府 学校ボラ ンティア	奈良県 ボランテ ィア活動	滋賀県 ボランテ ィア活動	神戸市 スクール サポーター	その他	合計
音楽学科	4	0	0	0	0	0	0	1	0	5
メディア創造学科	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
社会システム学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現代こども学科	4	0	4	0	1	1	3	2	0	15
看護学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
英語英文学科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
日本語日本文学科	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3
人間生活学科	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
科目等履修生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	15	1	4	0	2	1	3	3	0	29

2023 年度 学校ボランティア活動状況（学年別）

	京都市 教育 委員会	京都府 山城 教育局	京田辺 「学校ボラン ティア」事業	大阪市 教育 委員会	大阪府 学校ボラ ンティア	奈良県 ボランテ ィア活動	滋賀県 ボランテ ィア活動	神戸市 スクール サポーター	その他	合計
1 年次	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2 年次	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3
3 年次	5	0	1	0	0	0	0	3	0	9
4 年次	7	0	3	0	2	1	3	0	0	16
科目等履修生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	15	1	4	0	2	1	3	3	0	29

2023 年度 学校ボランティア活動状況（学校種別）

	京都市 教育 委員会	京都府 山城 教育局	京田辺 「学校ボラン ティア」事業	大阪市 教育 委員会	大阪府 学校ボラ ンティア	奈良県 ボランテ ィア活動	滋賀県 ボランテ ィア活動	神戸市 スクール サポーター	その他	合計
保育所	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
認定こども園	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
幼稚園	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
小学校	9	0	3	0	1	1	3	2	0	19
中学校	4	0	0	0	0	0	0	1	0	5
小中学校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高等学校	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
中学校・高等学校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別支援学校	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	15	1	4	0	2	1	3	3	0	29

※保育所ボランティアもカウント

※適応教室（和歌山）はその他小学校にてカウント

学校ボランティア活動状況 推移表（学科別）

	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010
音楽学科	5	7	11	11	1	6	3	7	5	15	17	15	7	12
メディア創造学科(情報メディア学科)	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1
社会システム学科	0	0	0	5	0	0	0	2	2	2	1	1	1	5
現代こども学科	15	11	9	18	16	26	15	48	47	35	48	46	71	71
看護学科	0	0	4	1	2	1	0	1	—	—	—	—	—	—
英語英文学科	1	2	2	2	1	3	3	0	3	5	6	10	8	1
日本語日本文学科	3	2	7	6	5	5	12	9	8	13	5	4	10	8
人間生活学科	2	1	1	1	0	0	1	1	1	2	1	1	2	0
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	3	1	2
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	1	0	0	0	1	0	0	2	2	0	3	9	9	1
科目等履修生	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	2	4
大学院	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
合計	29	24	36	47	27	41	34	72	68	72	82	89	116	105

学校ボランティア活動状況 推移表（教育委員会別）

	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010
京都市教育委員会	15	13	18	14	8	16	17	17	18	23	29	28	31	42
京都府山城教育局	1	1	1	4	1	1	1	20	14	10	5	5	5	22
京田辺「学校ボランティア」事業	4	3	9	7	4	7	2	17	18	14	15	15	23	24
大阪市教育委員会	0	3	1	3	2	2	1	5	4	7	4	4	6	7
大阪府学校ボランティア	2	1	2	3	5	3	0	2	9	8	10	10	12	10
奈良県ボランティア活動	1	0	3	3	3	5	4	2	2	3	7	7	3	2
滋賀県ボランティア活動	3	2	1	1	0	3	3	3	1	3	5	5	2	3
神戸市スクールサポーター	3	1	0	1	1	2	2	1	1	2	1	1	2	2
その他	0	1	1	11	3	2	4	5	1	2	6	5	5	4
合計	29	25	36	47	27	41	34	72	68	72	82	80	89	116

保育所ボランティア活動状況

	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012
京都市（公立）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
京田辺市（公立）	0	0	0	0	0	3	0	1	10	10	7	2
大阪府（公立）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	4	1
奈良県（公立）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	1
合計	0	0	0	0	0	3	1	2	10	11	15	6

教師塾等参加者数

京都市教師塾 参加者推移表

学科	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	2008
音楽学科	1	3	4	4	2	1	1	2	2	2	5	3	2	5	0	3
メディア創造学科 (情報メディア学科)	0	0		0	0	0	0			0	0	0	0	0	0	0
社会システム学科	0	0	3	1	0	0	1	2	4	1	0	1	0	0	2	2
現代こども学科	2	3		3	1	0	2			8	12	6	1	3	6	27
英語英文学科	0	1	7	2	3	2	2	4	4	2	0	2	4	2	3	2
日本語日本文学科	0	0		5	4	0	3			0	2	2	3	6	1	4
人間生活学科	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	2
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
大学院生	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
科目等履修生	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	—	—	—
合計	4	7	15	16	10	3	9	8	11	13	20	19	11	18	15	40

堺・教師ゆめ塾 参加者推移表

学科	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	2008
音楽学科	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
メディア創造学科 (情報メディア学科)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
社会システム学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
現代こども学科	0	0	0	0	0	2	1	0	2	0	3	1	3	1	1	2
英語英文学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
日本語日本文学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
人間生活学科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	0	0	2	2	0	2	0	3	1	4	2	1	2

滋賀の教師塾 参加者推移表

学科	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012
音楽学科	2	0	1	3	1	2	2	3	0	0	1	1
メディア創造学科 (情報メディア学科)	0	0			0	3			0	0	0	0
社会システム学科	0	0	1		0		3		4	0	0	0
現代こども学科	2	2			0	2				2	4	
英語英文学科	0	0	1		0	1	0		0	0	0	
日本語日本文学科	2	0			0	3	0		0	2	1	1
人間生活学科	0	0	0		0	1	0		1	0	0	
食物栄養科学科 食物科学専攻	0	0	0		0	0	0		0	0	0	0
食物栄養科学科 管理栄養士専攻	0	0	0		0	0	0		0	0	0	0
合計	6	2	3	3	1	5	7	3	4	5	4	6

京都連合教職大学院 入試結果推移（2015 年度入試～2024 年度入試）

1. 特別推薦入試：連合構成 9 大学 ※1

	第 1 回（9 月選抜）		第 2 回（10 月選抜）		第 3 回（2 月選抜）		合計	
	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者
2024 年度入試			10	10	1	1	11	11
2023 年度入試			16	16	1	1	17	17
2022 年度入試			17	17	2	2	19	19
2021 年度入試			20	19	8	7	28	26
2020 年度入試			15	15	6	6	21	21
2019 年度入試			27	27	1	1	28	28
2018 年度入試			27	27	－	－	27	27
2017 年度入試			25	25	－	－	25	25
2016 年度入試			21	21	7	7	28	28
2015 年度入試			29	29	－	－	29	29

2. 同志社女子大学からの特別推薦入試推薦者数：上記 1 の内数

	第 1 回（9 月選抜）		第 2 回（10 月選抜）		第 3 回（2 月選抜）		合計	
	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者
2024 年度入試			0	0	0	0	0	0
2023 年度入試			1	1	0	0	1	1
2022 年度入試			1	1	0	0	1	1
2021 年度入試			1	1	0	0	1	1
2020 年度入試			0	0	1	1	1	1
2019 年度入試			5	5	0	0	5	5
2018 年度入試			4	4	－	－	4	4
2017 年度入試			0	0	－	－	0	0
2016 年度入試			3	3	1	1	4	4
2015 年度入試			4	4	－	－	4	4

※2

3. 一般入試（現職教員除く） ※3

	受験者	合格者
2024 年度入試	68	60
2023 年度入試	68	58
2022 年度入試	58	48
2021 年度入試	25	23
2020 年度入試	21	18
2019 年度入試	31	24
2018 年度入試	21	20
2017 年度入試	33	32
2016 年度入試	25	21
2015 年度入試	42	22

※1：2021 年度以前は京都教育大学でも特別推薦入試を実施していたが、2022 年度以降は実施していない。

※2：2022 年度本学内選考では 3 名合格者があったが、内 2 名については、一般入試（第 1 回（9 月選抜））に合格したため、連合教職大学院への推薦は行わないこととした。

※3：一般入試については、2020 年度以前は 10 月・2 月の 2 回実施、2021～2022 年度は 9 月・10 月・2 月の 3 回実施、2023 年度以降は 7 月・10 月・2 月の 3 回実施。表 3 は年間合計人数を記載。

▪ 「同志社女子大学教職課程年報」要項 ▪

制定 2021 年 12 月 2 日

改定 2022 年 9 月 21 日

(1) 目的

同志社女子大学教職課程センターの事業に関する年次報告及び教職教育にかかる研究・実践報告を通して、本学の組織的な教員養成に寄与することを目的として、「同志社女子大学教職課程年報」（以下、「年報」という。）を発行する。

(2) 編集委員会

年報に関する編集業務を行うため、教務部教職課程センターのもとに、同志社女子大学教職課程年報編集委員会を置く。編集委員会は、教職課程センター長及び教職課程センターに所属する専任教員によって構成する。

(3) 掲載内容

掲載内容は、原則として以下のとおりとする。

- 1 教職課程センター主催の講演会、研究会、説明会等の活動報告。
- 2 教職課程科目担当者からの特別寄稿。
- 3 教職教育に関する研究報告、実践報告、論説、書評など。
- 4 在学生、卒業生からの寄稿。
- 5 教職課程に関する統計資料。

(4) 執筆者

- 1 本学の教職課程に関わる専任教職員（退職者を含む）。
- 2 本学の在学生、卒業生。
- 3 教職課程センター長が認めたもの。
- 4 研究報告以外の執筆者の選定は、編集委員会が行う。

(5) 年報の刊行

年報は、原則として毎年度 1 回、次年度 6 月末に刊行する。

(6) その他

- 1 研究報告については、別途「『同志社女子大学教職課程年報』投稿の手引き」に定める。
- 2 その他必要な事項は、編集委員会で定める。

(7) 改廃

本要項の改廃は、編集委員会において決定する。

▪ 「同志社女子大学教職課程年報」 投稿の手引き ▪

同志社女子大学教職課程年報編集委員会

制定 2022 年 9 月 21 日

改定 2023 年 9 月 21 日

1. 投稿資格

- 1) 本学の教職課程に関わる専任教職員に限る。
- 2) 共同研究の場合には、上記の者を必ず筆頭著者とした上で、上記以外の者の名を付すことができる。なお、必ず共同研究者の所属先・身分等を記さなくてはならない。

2. 募集する原稿

- 1) 原稿は、他に未投稿、未発表のものに限る。
- 2) 研究報告には、「原著論文」ならびに「研究ノート」、「資料」を含む。
 - ・原著論文とは、完結した内容をもつものである。
 - ・研究ノートとは、原著論文としては十分な成果を得るに至らないが、限定された部分の発見や速報的内容をもつものである。
 - ・資料とは、調査、統計、実験などの結果の報告で研究の資料として役立つものである。
- 3) 投稿原稿は、A4 判、縦置き横書きで、上下左右それぞれ 4cm の余白をとる。10.5 ポイントで、1 枚あたり、23 字×40 行で印字する（この場合、本文の刷り上がり 1 頁は原稿約 2 枚に相当する）。各頁に頁数を記載すること。特に形式は指定しないが、1 枚目に、「原稿の種別」を明記し、参考文献・脚注等については、論文の最後に記載すること。字体の指定は付記すること。図表の挿入箇所は、余白に示すこと。
- 4) 図（写真を含む）および表には通し番号とキャプションを付する。図と表は本文と分けて、それぞれを 1 ファイルとして作成する。図表や写真を転載する場合には、原稿提出前に著作権者の許諾を得ること。図のカラー印刷を希望する場合は実費を著者負担とする。
- 5) 英文抄録の掲載に関しては、著者の任意とする。著者が英語を母語としない場合は、英文校閲記録を提出する。
- 6) 刷り上がり（A4 判 1 頁：23 字×40 行×2 段組＝1840 字 [和文]）は、最大 10 頁とする。印刷頁を超過した場合、超過分に対する実費を著者負担とする。

3. 原稿の提出

- 1) 原稿は Word ファイルで e-mail で添付にて提出すること。
- 2) 図表・イラスト等を掲載する場合も電子データを提出すること。
- 3) 提出先は下記のとおり。

同志社女子大学 教職課程センター 京田辺キャンパス
e-mail: kyosho01@dwc.doshisha.ac.jp
- 4) 毎年 2 月下旬を原稿提出締切日とする。

4. 掲載可否

- 1) 投稿原稿の採否は編集委員会で決定する。
- 2) 査読は行わない。ただし、編集委員会は原稿中の字句の加除、訂正を著者に求めることがある。
- 3) 採択決定後、同志社女子大学研究倫理規準に反することが明らかとなった場合、編集委員会は採択を取り消すことができる。

5. 校正

掲載決定した論文等の原稿の校正は各著者が行う。校正の期日を大幅に遅れた場合には掲載できないことがある。最終原稿からの大きな変更は認めない。

6. その他

- 1) 本学の「研究助成」に基づく論文等である場合には、原稿の末尾にその旨を必ず付記すること。
- 2) 編集委員会および著者は同志社女子大学研究倫理規準を遵守する。
- 3) 発行責任者は教務部長とする。

7. 改廃

本手引きの改廃は、編集委員会において決定する。

▪ 「教職課程年報」編集委員会委員 ▪

〔教務部〕

真部 真里子

(本学教授、教務部長、(兼) 教職課程センター長)

〔教職課程センター〕

大黒 孝文

(本学特別任用教授)

中川 美保子

(本学特別任用教授)

水本 徳明

(本学特別任用教授)

佐藤 光友

(本学特別任用教授)

▪ 編集後記 ▪

教職課程年報を5部構成で発行して3回目の春を迎えました。懸案であった電子版もようやく開始の運びとなり安堵しました。ぜひご高覧ください。この3年で優に100名を超える執筆者の皆様にご心から感謝いたします。次号からは教員採用試験の早期化への取り組みなど、新たな活動を加えさらに質の高い「1年間の報告」にしたいと思います。

(編集担当 中川美保子)

2023年度より、『教職課程年報』を本学公式Webサイトでも公開しております。

※冊子版とは一部、内容を変更している場合があります。

同志社女子大学 公式Webサイト内「教職課程センター」より、項目「教職課程年報」にアクセスしてください。

https://www.dwc.doshisha.ac.jp/current/teacher_training_center



同志社女子大学 教職課程年報 第7号

編集／発行	同志社女子大学教職課程年報編集委員会
発行日	2024年6月30日
事務局	同志社女子大学 教務部教職課程センター 〒610-0395 京都府京田辺市興戸 TEL 0774-65-8733